
神さまとゲーム脳と過守護な殺戮竜の物語

セロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神さまとゲーム脳と過守護な殺戮竜の物語

【Nコード】

N2195U

【作者名】

セロ

【あらすじ】

女の子だけゲーム好きでオタクな主人公。

ある日、パソコンにオンラインゲームの広告が届いた。興味を持って事前登録すると、デウス・エクス・マキナ（マキナ）と名乗る少女が現れ、妙な質問を出し始める。戸惑いつつもそれに回答する主人公。しかし、出せるはずのない質問を出されたことによりそのゲームの異常性に気付く。

だがすでに遅かった。

主人公はマキナにより、ゲーム参加者としてゲームの世界に連れ込

まれてしまう。

目を覚ますとそこは牢屋の中だった。そこが異世界であることを悟りはしゃいでしまう主人公。しかしその牢屋は奴隸として売られる少女が囚われた牢屋だった。

【女性主人公とかダブルヒーローとか、やってみたかったことまとめてやっちゃいましたな作品です。お見苦しい点もあるかもしれませんが、頑張って面白い作品にしたいと思います】

プロローグ（前書き）

はじめましてかお久しぶりですセロと申します。 m (m

友達に「女の子作るのは妙に上手い」って言われて「じゃあ女の子を主人公に書いてみよう」と書いてしまったこの小説。一人称とか女性視点とか不安だらけですけど頑張ります。

プロローグ

「どう？ 錆び臭い旧世代ガン〇ムも悪く無いけどさ、やっぱりスタイリッシュな新世代でしょ？」

「男つてのがわかってないよなも姉は。錆び臭いからこそいいんだろ。やっぱ初代から逆シャ〇だな」

床に敷かれたレッドタイガーの毛皮で作ったふかふかのじゅうたん、天井には光を灯した光魔石をたくさん吊り下げたシャンデリア。とあるお城の一室。西洋ファンタジーとかでよく見るような石造りの大きな部屋で、あたしとあいつはハイビジョンプラズマテレビの前に座っていた。

「け、けどさ、こう……GM粒子をバーツて拡散させるシーンとか燃えない？」

「……俺がガン〇ムだ！』っていう痛すぎる台詞で一気に萎えた」

「い、痛いってあんたねえ！ 刹那君のガン〇ムに対する想いがわからないの！？」

「わからん」

「即答するなーっ！」

——昨日から徹夜でお気に入りの作品を見せてるけど、こいつはいっこうにガン〇ム〇〇の良さをわかれとうとしない。

なんでわからないかなあ、こんなにかっこいいのに。絶対気に入ってくれると思ってたのに……

気に入ってくれたら一緒に劇場版も見ようと思ってたのに……

いや、諦めるもんか！ 絶対こいつもこっちの世界に連れ込んでやる！

「うー、これは世界観から入った方がいいか……資料集でも召喚してもらおう」

「……いまさらだけどこんなことであんまこき使うなよ。曲がりなりにもあいつ神様だぞ？」

「いいじゃない。仕事はちゃんとこなしてるんだし、正当な報酬よ」

あたしがそう言うときあいつは苦笑いしながらポケットから飴玉を取り出して口に放り込んだ。

「それよりそろそろ行こうぜ。今日の仕事は西の大陸での魔王退治だろ？ 早く行かないと日暮れまでに帰れなくなるぞ」

「はーい」

——我ながらとんでもない会話してるなあと思う。ほんの何ヵ月か前までは普通に女子高生やってたのに。

半年だっけ？　　なんだかもう何年も経ってるような気がする。

あたしが殺されたあの日から……

十　半年前

『新作無料オンラインゲーム　”デウス・エクス・マキナ”　近日公開』

学校から帰って、なんとなく机のパソコンを見たらそんなメールが開かれていた。

……なにこれ？

パソコンの電源はちゃんと切ってたはずだし、以前ウイルス入りのメールをもらってパソコンに入れてたゲームのデータやお気に入りイラストが全滅してからは心当たりの無いメールは開けないようにしてる。

でも、今日学校から帰ってみればパソコンは起動していて、当たり前のようにメールが開かれていた。
はて、と首を傾げて考えてみる。

親はあたしが小学生の頃死んじゃったし、引き取ってくれたおばあちゃんも去年死んで今は一人暮らし。親の幽霊が心配して現れてパソコン開きっぱなしとかも聞いたことない。

あたしにストーカーとかは……無いね、うん。

……ま、いっか

気にはなるけどそれだけ。

もしかしたらゲームの神様があたしに『このゲームをやりなさい』
と言ってるのかもしれない。

モン○ンもHR999にしたし、最近の武器性能のインフレに飽
きてきたし、こっちに乗り換えるのも悪くない。

無料だし試しにやってみてもいっか……。あ、事前登録やってる。

椅子に座り楽な体勢をとってマウスを操作。事前登録をクリック。
画面が切り替わりお城の中のような背景に変わる。そしてドロ
ン！
という効果音と同時に煙の中から女の子が現れた。

年は10歳ぐらい。髪はふわふわ揺れながら虹色に輝いてる。眼
はくりくりしていてなんとなくいたずらっ子みたいな感じがあった。

画面の中の女の子はカメラ目線になってニコツと笑いかけてきた。

『はじめまして！ 今日事前登録だね？ ありがとう♪』

おおっ！ ボイス付きだ。すっごくかわいい声だけど声優誰だろ？
それによく動く。これは期待以上の力作かも。

『私はデウス・エクス・マキナ。この世界の、気まぐれでいたずら
好きでご都合主義な神様です。あ、けど呼ぶときはマキナって呼ん
でね？ 長いしかわいくないから』

マキナはそう言うところほんと咳払いした。そんな何気ない動作まですごくリアルだ。

『それじゃ、名前教えてくれるかな？』

あ、ハンドルネームとかじゃなくて本名ね』

ん、名前ね……。

言われた通りに“浅倉 もこ”自分の名前を打ち込む。

『浅倉 もこさんだね？ ありがとう』

「え？」

思わず声に出してしまった。普通、こういうキャラの声をやるのは声優さんだ。どんな名前を打たれるかわからないのに声を用意しておくなんて普通しない。

ましてそれを完璧に発音するなんてありえない。

『次は質問だよ。これから出す質問にYESかNOで答えてね？』

何でも無いようにマキナは続ける。

……ま、まあ、それだけゲームが進化したってことだね。3Dのゲームまで出てるんだし驚くことない。

『それじゃ質問いくよ。一つ目、ゲームが好きか』
そりゃもちろん。

YES

『男である』

NO

『自分はオタクだと思う』
ずいぶんピンポイントね。

YES

『剣か魔法なら剣だ』
どちらかというと後衛が好きか。

NO

『異世界とか行っちゃいたい』
もち、是非とも。

YES

『凌辱系エロゲとかに興味がある』
いや、これセクハラじゃ……まあ……

YES

『会いたい人がいる』
そりゃね。小学生の頃の友達どうしてるかな。

YES

『人生やり直せたらなと思う』
えらく重いわね。

YES

『お姫さまと勇者さまみたいなのに憧れる』
そりゃ女の子だし。

YES

質問に答えていく。

けどなんだろう？　なんか質問に違和感を感じる。気のせいかな？

そのまま質問に答えていく。

YES. YES. NO. YES. NO. NO. NO. YES. NO.
YES

NO. YES. YES. NO. NO. YES. YES. YES.
ES. YES. . . .

——多い。果てしなく質問が多い。
だんだんだれてきた。

　　というかコスプレがどうか好きな食べ物がどうか関係あんの？
　　これで騙しだったら怒るよホント。

『猫と犬なら猫がいい』

NO.　　つか関係あるの？　　これ。

『現実はずまらない』

どんな質問してんのよ。

. . . . YES

『今までに親しい人を失ったことがある』
なにこの質問。

. . . . YES

『その人はとても大切な人だった』
. . . . YES

おかしい。何か変だ。質問が――

『親が死んでから現実がどうでもよくなった』
――っ?!

「なに……これ……?」

あたしは質問を見て息を呑んだ。

あり得ない。こんな質問、普通じゃない。

画面の中のマキナがクスクスと笑った。動きがリアル過ぎる。
まるで本物の女の子が笑ってるみたいに。

『あれ? どうしたのかな?』

そんな驚いた顔して』

っ?! 今、間違いなく画面の中のマキナはあたしに言った。息が詰まる。なに……これ……。

『あはは、鳩が豆鉄砲喰らったみたいな顔してる〜♪
最初に言ったじゃない。私は神様だって。神様ならこれぐらいできて当然と思わない? これで登録は完了だよ。ようこそ、私の世界へ』

「ひっ?!」

怖くなってパソコンの電源を連打した。

けど画面の中のマキナは消えない。

ニコニコ笑いながらどこから取り出した銀色の拳銃をあたしに向ける。

ズドン、と重い銃声が響いた。

——あ……れ……なんで……？ 身体が……動かない……。

赤い液体で汚れた画面の中で、マキナはガンマンさながらに拳銃から立ち昇る硝煙にフツと息を吹いた。

『浅倉 もこさん。享年17歳。参加No. 777……っと。あ、スリーセブンだね。なんかサービスしとくよ。えーと、それじゃ質問の回答をいくつか反映するね。』

『ゲームが好きか』

YES

『男である』

NO

『自分はオタクだと思う』

YES

『運がいい方だと思う』

NO

『コスプレに興味がある』

YES

『自分はエロい方だと思う』

YES

『凌辱系エロゲとかに興味がある』

YES

『会いたい人がある』

YES

『人生やり直せたらなと思う』

YES

『お姫さまと勇者さまみたいなのに憧れる』

YES

『猫と犬なら猫がいい』

NO

うんうん、こんなところかな？ それじゃ、ごきげんよう。またあ
いまして〜』

プツン、と画面が消え黒く変わる。

黒い画面には胸を血まみれにした、あたしの姿が映っていた。

一日目（前書き）

- ・作者のセロは変態です！
- ・作者のセロは変態です！

大事なことなので二回言いました↑
書いてたら自然とこうなっただんです……

一日目

——気が付いたらあたしはかたいベッドの上で石の天井を見上げていた。

「……………は？」

思わず声が出た。辺りに自分の声が反響してあわてて口を閉じる。

身体を起こして周りを見ると石造りの部屋に鉄格子が付けられた、ファンタジーでよく見るような牢屋みたいところだった。

薄暗くてよくは見えないけど、あたし以外にも何人か女の子がいて、だいたいはぼろっちい服着てだらんと木のベッドに寝転んでいる。

少し肌寒くて身体が震えた。

意味がわからない。え、え〜と……………なにこれ？ 夢？

う、うん、こういう時は古典的にほったたをっねってみよう。——いたたたた！

じんじん痛む頬っぺたを指で擦りながら、一応もう一度つねってみる。痛い。

夢じゃない……………よね？ えっと、よし、何でこうなったか考えてみよう。

まずオンラインゲームの広告が来てて

クリックしたら幼女がでてきて質問されて

で、撃たれて

そしてここにいる。

見事に繋がらない。

息をするのも、ポカンと開けた口を閉じるのも忘れていた。バクバクと心臓が鳴ってる。

……けど、パニックにはならなかった。というか頭は意外と冷静だった。

なぜなら昔からよく、気付いたら見知らぬ世界にいたっていうのを妄想してたから。

これ……もしかして……

「あの……大丈夫ですか？」

「ひゃいっ?!」

うああ……、声裏返った。

見上げてみると茶色の髪をした女の子が、茶色い器を持ってあたしを見ていた。

……あれ?　なんか女の子の頭でぴよこぴよこ動いてるのが……?

——犬耳っ?!

女の子の頭に付いていた物。それは正真正銘の犬耳だった。しかも視線を落としたらお尻の辺りからしっぽまで生えている。コ、コスプレじゃないよね?　動いてるし……。

「あの、水ですけど、飲めますか？」

「あ……う、うん、ありがと……」

ほとんど無意識のまま水の入った器をもらって一口飲んだ。
錆びた鉄の味がする。まずい。

けど、確信を持てたことが一つ。

これは……異世界召喚だ。

よく漫画やゲームで起きる展開。何かのきっかけでまったく違う世界に飛ばされるというやつだ。

かなり突拍子の無いと言えば無いけど不思議とそんな考えを受け入れられた。

……というより、犬耳女の子が普通にいる時点ではほぼ間違いないでしょ。

ゼロ〇とかD〇G DAYSとか、異世界召喚っていうのはあたしたちオタクにとっては一度は妄想する展開だし……ん？

あたしは水に映った自分の顔を見た。

——お……おおっ？！

そこには見たことも無いような美少女の顔があった。長い艶やかな黒髪にぱっちりした眼。長い睫毛。雪のような白くてきめ細かい肌。小さくて形がいい、けれどふっくらした唇。

思わず自分の顔に手をやる。……間違いなく自分の顔だ。

やっぱりこれ異世界召喚だ！ で、あたしはヒロイン級な美少女

に転生！　よし！

「あ、あの……どうしたんですか？　そんな嬉しそうに……」

思わずガッツポーズしたらさっきの犬耳の女の子にドン引きされた。

あわてて言い訳して深呼吸して気を落ち着かせる。

「ふう……ふふふ」

自然と笑いがこみ上げてくる。昔から懂れてたんだこういう展開。退屈でどうでもいい日常から抜け出して非日常の住人になること。おまけにこんな美少女に転生とか美味しすぎる。

冴えないオタク女子高生として日常を過ごすか絶世の美少女になって異世界で冒険なら断然　異世界でしょ！　あとは素敵な勇者様でもいれば完璧だけどいたりしないかな……。

『プルルルル　プルルルル』

「ひゃっ?!」

いきなり携帯の着信音が聞こえた。牢屋の中に音が反響する。

あわてて音の出所を探すとベッドの枕元にあたしの携帯が置いてあった。

すぐに手に取って音を切り、周りを見回す。

けど、あれだけうるさかったのに犬耳の子以外はこっちにたいして興味を示してる子はいなかった。

「えっと……それ、何かの魔法ですか？」

犬耳の子はちょっと困ったような顔をしてあたしを見てる。しまった、ほったらかしだった。

「え……あ、うん。魔法。そんな感じ……」

愛想笑いしながら携帯を開く。新着メールが一件。だけど電波は圏外になってる。

とりあえずメールを開いてみる。差出人は……ゲームマスター？

『おめでとうございます。あなたは神の作りしゲーム“デウス・エクス・マキナ”の参加者となりました』

ゲームの世界……か。

これもけっこうよく聞くパターンね。現実の小説よりってやつかしら？

『あなたはゲームの参加者です。そして参加者であるからにはこのゲームのルールに従っていただきます。あなた方の目的はこの世界の神 デウス・エクス・マキナの元にたどり着き、神の座を譲り受けることです。』

ひとまずは一ヶ月間、無事に生き延びることだけをお考えください。デウス・エクス・マキナは強者を求めます。生き延びた者に道は開けるでしょう。

ささやかながらそのための力をあなた方に差し上げました。どうぞご確認ください』

……一ヶ月間生き延びる？

不吉な予感がした。

そこまで読むと下に“浅倉 もこのステータス”と書かれたリンクがあったので押してみた。

浅倉 もこ LV. 1

1stジョブ オタクゲーマー

2ndジョブ なし

3rdジョブ なし

スキル

??????

ジョブ 酷くない!?

スキルの?????っていうのは緑色に点滅していた。

ゲーム的に考えるなら条件を満たしたら発動するようなスキルってことかしら

んゝ……と、魔法とか期待してたのに無さそう。LV. 1ってことはレベル上げれば覚えられるとかかな?

とりあえずこのゲームはラスボスのデウス・エクス・マキナ……ってののところで行って神になるのが目的ってことかしら?

とはいえそれに乗るかはまだ未定。せっかくの異世界召喚だしこの世界をたっぷり楽しみたい。

とにかく今の状況確認ね。あたしは今どういう状況なんだろう?

さっきの犬耳女の子なら何か知ってるかな。

「あの、あたしたち今どういう……」

その時、牢屋の外で鉄の扉が閉まる大きな音が聞こえてきた。

「ひいっ!？」

犬耳女の子はびっくりと身体を震わせた。布団を掴んだかと思うとそれをあたし共々頭から被って、あたしの腕にしがみついてガタガタ震え出す。

さっきまで無気力にベッドの上で丸くなっていた女の子たちも一斉に布団を被り、何かに怯えたみたいに震え出した。

え? なに?

少しすると牢屋の外から足音が近づいてきた。

剣を腰に下げて革の鎧を着た兵士二人と、宝石をじゃらじゃらつけたいかにも金持ちそうな太ったおじさん。

あたしは布団の中から様子を伺う。

おじさんは顎に手を当てながら牢屋の中にいる女の子達を順番に見ていく。

何してるんだろう? と思って見ていたらあたしと目が合った。

「ひ……!」

鳥肌が立った。

舐めるような、ねっとりとした視線。あたしを性欲の対象としか見てないような目。

そいつはニヤニヤしながら牢屋の中のあたしたちを見回すと、兵士と何か話ながら一人の女の子を指差した。

「う、ああ……っ!!」

指差された女の子が短く悲鳴をあげた。二人の兵士が牢屋に入ってきて女の子の両腕を掴んだ。

「いや……いや! 誰か……誰か! いやあああああっ!!」

悲鳴を上げて、泣きながら女の子は抵抗する。エルフ耳でさらさらした金髪の、12歳ぐらいの小さな女の子だった。

女の子は引きずられていく。

牢屋から出されるとその女の子は後ろから兵士に羽交い締めにされた。必死に暴れてるけどびくともしない。

それにおじさんが近付いていく。

足をばたつかせて遠ざけようとしたけどその足も他の兵士に掴まれ、無理やり両足を広げさせられた。

「どれ」

「ひぐっ!」

おじさんはおもむろに女の子の服の下から手を入れた。

——え？ う……うそ……

あたしからは見えないけど、たぶん女の子の大事な場所に触ってる。

女の子が悲鳴を上げたら兵士に口を塞がれた。

「んーっ！ ……んぐ、んん……！」

身体が反り、天井を仰いだ目からぼろぼろと涙がこぼれる。おじさんはニタニタと気持ち悪い笑みを浮かべながらそれを眺めていた。

「ふふ、これはよさそうだ。こいつを買おう」

おじさんはそう言って手を抜くと、女の子は糸が切れたみたいにもその場に崩れ落ちた。兵士が鎖付きの鉄の首輪をはめて、そのままどこかに引きずっていく。

しばらくの間女の子が悲鳴を上げてるのが聞こえたけど、また鉄の扉が閉まる大きな音がするとそれも聞こえなくなった。

「なに……今の……」

あたしは震えていた。胸の中がぐちゃぐちゃにかき回されたみたいに気分が悪い。

「ね、ねえ……あの子……どうなるの……」

聞かずにはいられなかった。あたしにしがみついていた犬耳の女の子は震えながら泣いている。

「……凌辱されて……性奴隷にされる思います……。
……ライトエルフ族は清純で虚弱だし……あの子はまだ幼いから……
……死んでしまうかも」

吐き気がした。頭がぐらぐらする。

犬耳の女の子はあたしにしがみついて泣いている。

「……いい子だったのに……リーンちゃん……」

さっきの光景や悲鳴が頭の中でリフレインする。胸がズキズキ痛い。

なんなのよここ……。

5分前の自分をぶん殴ってやりたい気分だった。

二日目

「寝ちゃったか……」

あのあとしばらく、犬耳の女の子を慰めてたけど泣き疲れて寝ちゃったみたい。

今はあたしの膝を枕にしてすやすや寝息を立ててる。

ちよつとため息について壁に空いた小さな窓に目をやった。

窓から見える小さな四角い空は、夜明け前みたいで少し白んでいた。

「なんか……ハードな始まり方だったなあ……」

状況から考えて、あたしは今奴隷として売られてるらしい。……しかも、Hなことさせる目的で

そしてここはどうやら砦かなんか。奴隷商が牢屋として使ってるみたい。

捕らわれのお姫さまとかならありだけど、捕らわれの性奴隷候補ってどうよ？ ハードモード？

はしゃいでたのがバカらしくなってくる。

「ん……んん……」

犬耳の子があたしの膝枕の上でもぞもぞ動いた。

あらためてその子を観察してみる。

歳はあたしより下かな？ 明るい茶髪からピヨコンと飛び出た犬耳。首回りにはふかふかした綿毛みたいな白い毛が生えている。おしりのちよつと上辺りは服に穴が空いていて、モフモフのしっぽが出ていた。頭を撫でてあげるとちよつと気持ちよさそうに表情がとろけた。——かわいい。

やだなにこの子めちゃくちゃかわいいよ萌えの塊だよ！？ 犬耳しっぽ付きとかなんてあたし得！ 耳フニフニしたいしっぽでモフモフしたいギュッて抱きしめたい！

耳ぐらいならいいよね？ フニフニしていいよね？ 誰かが止めてもあたしは行くよ？

……うあああゝゝ！、柔らかいよフニフニだよ幸せだよゝゝ！

「う……ううん」

あ、目覚ました！？ 目をぱちくりさせてあたしを見上げてくる。

ハッと我に返ってあわてて耳から手を離す。
いけない、暴走した。あたしの悪い癖がでた。

「わ、わわ！ すいません！」

その子にあわてて起き上がるとぺこぺこ頭を下げてきた。
なんでそっちが謝る？

「す、すいません！ 私いつの間にか寝ちゃって……」

「いいよ。気にしなくて」

その子はまだぺこぺこ何度も謝ってくる。話が進まないからあたしから話すことにした。

「あたしは朝倉 もこっっていうの、あなたのお名前は？」

「フ、フィロです」

「そっか、じゃあフィロちゃんに聞きたいことあるんだけど……いいかな？」

——奴隷とか砦とか、あたしの予測はだいたい当たっていた。全然嬉しくないけど。

あたしの境遇は話さないでおいた。信じてもらえるか不安だったし、せっかくの出会いなんだし『変なやつ』なんて思われたくない。

ちなみにあたしは気絶した状態でここに運ばれてきたことになってるみたい。その辺はどうなってるんだろ？

よし、とりあえずゲーム的に言うならヒロインっぽいのも出てきたし、次はここからどうやって脱出するかね。

このまま売られて『異世界に来て変態おやじの性奴隷になり一生を終えました』なんて嫌すぎる。それに……、あたしだって女の子だ。ゲームの中ではさんざんいろいろやったけど、現実リアルのファーストキスや初めては好きな人にあげたい。

もっと言うなら、今はこれだけ美少女になれたんだし、どうせな

ら超美形なエルフとかに、ロマンチックな部屋で頭なでなでされたり優しくキスされたりしながら『いいの？ もこちゃん』『うん…：優しく…：してね？』ってかんじで…

妄想してたらフィロちゃんが不思議そうにあたしを見てた。おまけにあたしよだれ垂らしてた。ヤバイ…：、本気で痛い。

と、とにかく脱出狙いってのは絶対！

…：ここが本当にゲームの世界なら助けに来てくれる勇者様でもいいそうなんだけど…：期待しない方がいいか。そうなると必要なのは…：レベルアップね。できるだけ戦闘力上げて強力なスキルも使えるようになれば楽になるはず。

そういえばフィロちゃんが魔法がどうって言ってた。後で詳しく聞いてみよう。

そんなことを考えていたら頭の中でポーンという効果音がした。

『新しいスキルを獲得しました』

そんなアナウンスみたいなのが聞こえた。新しいスキル？ 携帯を開いてブックマークしたあたしのステータスを見てみる。

浅倉 もこ LV. 2

1stジョブ オタクゲーマー

2ndジョブ なし
3rdジョブ なし

スキル

??????

ゲーム脳(NEW)

——これバカにされてんのかなあ……えーと、スキル ゲーム脳
効果は“様々な動作をゲーム仕様にする”らしい。
どうということだろう？

それとなぜかレベルアップしてる。けどモンスターとか倒した覚えは無い。敵を倒した経験値でレベルアップとかじゃないのかな？

「あの……もこさん？ 何してるんですか？」

「あ、ううん、何でもないよ」

あたしは携帯を閉じるとフィロちゃんの頭を撫でた。髪がさらさらしてなんか癒される。フィロちゃんも気持ちよさそうに目を細くしてしっぽをパタパタさせていた。

……ヤバイ。かわいい。また暴走しそう。落ち着けー、落ち着けあたし。きつと仲良くなればいくらでもモフモフさせてくれるから。

——フィロちゃんなら大丈夫かな？ いい子そうだしちよつと脱出について情報集めときますか。

……で、脱出話を持ちかけたら本気で反対された。聞くところによると、砦の至るところに警備や魔法罫、感知魔法が張られていて奴隷が逃げれたことは無いらしい。

『今まで脱走できた人はいないですし、捕まれば酷い目に合わされます！ それよりは売られた後、ご主人様の命令をよく聞いて信頼をもらい、ある程度の自由をいただくという方が望みがあります』とのことだ。

かなり脱出は厳しいみたい。いきなりこんな難易度ってどんだけ鬼畜ゲームなのよ……。

うんうん唸ってたらフィロちゃんがじつとあたしのことを見てきた。

「……もこさんってこんなところにいるのに……強いですね……」

「ん？ 強い？ あたしが？」

「はい。本当に……すごいです。私なんて脱出って考えただけで怖いですし……よく不安になって泣いちゃいますし……それに引き換えもこさんは……強いんですね」

「……あたしは弱いよ。弱すぎるから強く見えるの。フィロちゃんのが全然強い」

きよんとしたフィロちゃんの頭を抱き寄せて、本当の犬みたい
に頭とか顎の下とか首筋とかをわしゃわしゃしてみる。……と、な
んかよっぽど気持ちよかったみたいでふにゃっと表情がとろけてた。
かわいい。超かわいい。うあゝ！ 押し倒しちやいたいぐらいか
わいいよゝ！ ……自重しないと、うん。

そうやってたら兵士の人が食事を持ってきた。
なんかあたしたちのこと見てニヤニヤしながら口笛を吹いた。…
…昨日の一件も有ってかすごく嫌悪感が湧く。

ま、いいや。ご飯ご飯。何かを考えるならまず腹ごしらえ。頭を
使うゲームする時も食後が一番調子良くなるし。

「フィロちゃん、一緒に食べよ」

「あ、は、はい！」

ベッドにフィロちゃんと並んで腰掛ける。

メニューは果物と野菜のサラダとパンに何かのスープ。あとは野
菜ジュースらしい色をした飲み物だ。

正直、ここに来るまであたしがいつも食べてたやつより美味しそ
う。

「うわあ……けっこういい出すんだ」

「体調悪くしたり、肌艶が悪くなったら奴隷としての価値が下がり

ますからね」

少し上がったテンションが急降下した。……フィロちゃん、その情報はあまり欲しくなかったよ。

でも、なんにせよ美味しいご飯はありがたい。

元の世界ではインスタントばかりだったからなあ……。

こっちの世界での楽しみの一つになりそう。

「いただきます♪」

さっそくパンにバターを付け、顔を近付ける。焼きたての香りによだれが出る。かぶり付こうと大きく口を開けた。『スキル。“ゲーム脳”発動』

頭の中でそんなアナウンスが聞こえた気がした。

——あーん、ガチン！ あたしの歯はきれいに空振りした。

ご飯が消えた。全部、まるごと。サラダのトマトっぽい果物のヘタから、付け合わせのバターまできれいさっぱり。そしてお腹だけはなぜかいっぱいになってた。

は？

訳もわからず空になった食器を見つめる。

……あり、わかったかも。レトロゲームの食事シーンって、だいたいは机の上の食べ物パツと消えるって感じになってたっけ。

なるほど、スキル“ゲーム脳”の効果はそういうのを文字通りゲーム仕様にする能力ってことね。

やったねあたし！ さっそくスキルの効果がわかったよ！

——泣いた。

「ふあ！？ ちょ…もこさんいつの間に食べて…ってなんで泣いてるんですか?!」

「なんでも…ひっく…うああああん!!」

フィロちゃんの胸で泣いた。フィロちゃんは戸惑いながらだったけど優しく慰めてくれた。

触ってみると意外に胸、大きくて柔らかい。…ちよつと長めに泣いところ。

ひとしきり泣いた(胸の感触を味わった)あとでフィロちゃんに魔法のことを聞いてみた。

「魔法を見たことないんですか？」

「あゝ、あるけど無いというかなんというか…」

「珍しいですね…もこさんって名前からして東方の国の出身ですよね？ 向こうでは無いんですか？」

フィロちゃんはそう言うと言手を出し、そこにポンと火を灯して見せてくれた。

「おおっ!?!」

「そんなに驚かれると恥ずかしいですよ……」

フィロちゃんは照れたように目を伏せて顔を赤くした。

「ね、ね、これあたしでも使えるのかな？」

「うーん、どうでしょうか……」

原理とか教えてもらったけど、ここら辺は精霊だの術式だのたいテンプレだったから簡単に覚えれた。要するに、魔法を使える魔族とか妖精の血を引いてれば儀式をして使えるようになるらしい。フィロちゃんに覚えがいいって誉めてもらえた。

ちよっと気分いい。その後はいくつか魔法のことを教えてもらったり、他愛ない話をしたり。明日できそうなら儀式について教えてくれるというところで話は終わった。

「――で、現在に至る……と」

あたしはベッドに仰向けに寝転びながら、携帯の日記に今日の出来事を一通り書いておいた。習慣ってやつね。

時間は23時57分。あと少しで日付が変わる。

フィロちゃんはあたしのとなりですやすや眠っている。起こさないように軽く頭を撫でながらぼんやり天井を見上げた。

うーん、全然眠れない。明日はフィロちゃんにいいよ魔法習うんだし、早く寝たいんだけどなあ。

さっき打った日記を読み直してみる。

『……あたしは弱いよ。弱すぎるから強く見えるの。フィロちゃんのが全然強い』

ちよつと恥ずかしくなつてにやけてしまう。あはは、我ながら中二みたいな台詞言つたなあ……

けどそう、あたしは弱い。弱すぎるぐらい弱い。

——だって我慢できないぐらい嫌なことあったら、死んで逃げちゃえばいいなんて思つてるもん。

あたしはフィロちゃんみたいに辛い目にあつても生きようなんて思えない。

そりゃ死ぬの怖いけど、どんなに辛い目にあつても死んじゃえばそれで終わり。もうそれで痛いことも怖いことも苦しいこともない。よくドラマとかで“○○のためなら命だって惜しくない”とか言うけど、それってようするに駄目だった時に生きてるのが辛いから、命が惜しくないんじゃないのかな？

それならあたしだってたいして変わらない。

そんな風に考えてるから大胆なことができる。周りから強く見える。

いつからかなあ……こんなネガティブに前向きになつたの。

小学生の頃、お父さんとお母さんが死んで、おばあちゃんの家に取り取られて、おばあちゃんも死んだ頃か……

やめよ。なんか鬱になつてくる。

ため息一つ。携帯を枕元に置いて……『プルルルル プルルルル』

思わずビクッ！ てしてしまった。この着信音は心臓に悪い。

あわてて音を止めて携帯を開く。時刻は深夜0時0分。かけてきたのは――

『デウス・エクス・マキナへ黒』

ディスプレイにはそう表示されていた。

二日目（後書き）

作業BGMには東方ヴォーカルメドレーがお気に入りなゼロです。

今回のお話ではもちゃんが日記に書いた内容をサラサラ〜つと。

なんか妙なスキルを手に入れましたけど、このゲームの世界じゃみんなこんな感じですよ。面白いスキル募集中！↑自分で考えろ

三日目(1)

——デウス・エクス・マキナ

この世界の神様で、そしてあたしをこの世界に連れてきた張本人……らしい。たしかマキナって呼べて言ってたっけ。

けど〈黒〉ってのはどういうことだろう？

何か嫌な予感がする。どうしようかなこれ。無視しちゃ駄目かしら？

電話に出ようかどうか悩んでたら勝手に通話モードに切り替わった。

『参加No. 777 朝倉 もこさん聞こえますか』

携帯からあの声が聞こえてきた。

立ち上がってフィロちゃんから離れ、携帯を耳に当てる。

「……もしもし？」

『こんばんは。朝倉 もこさん。このゲームは楽しんでるかな？』

相変わらずのかわいいらしい声。けどその声を聞いてるとなぜか不安になってくる。心臓がしめつけられる、そんな感じだ。

電話の向こうでマキナはくすくすと笑った。

『さて、さっそくだけど本題。今から貴女に試練を与えます』

「……試練？」

『そ、試練。メールで来たでしょ？ 数々の試練を乗り越え一ヶ月生き残れって。』

貴女がこの世界に来てから一ヶ月間、つまりあと29日間でランダムに六回、私たちは貴女に試練を与える。死んじやったらゲームオーバー、一ヶ月生き残れば次のステップへ、簡単でしょ？』

あたしが漠然と感じていた不安が形になった。
嫌な予感しかない。

『それじゃ、まずは場所を移動するから』

「え？」

一瞬で周りにあった牢屋の中の風景が消えた。

——黒。あたしは真っ黒な空間の中に立っていた。暗いわけじやなく、自分の姿ははっきり見える。ただそれ以外は何もかもが黒い世界。

「お、おい！ なんだよここ！」

「きゃっ?!」

後ろで声がして驚いて振り返った。

そこには四人いた。

軽くパニックを起こしてる不良っぽいチャラチャラしたお兄さんに眼鏡の学者っぽい人。あと、何が起きたのか理解できないって感じでポカンとしてるお姉さんと中学生ぐらいの女の子。

「なんなんだよ！ わけわかんねえ世界に連れて来られて！ 次はこんな……ざけんなよ！」

パニック気味なお兄さんが叫んでる。うるさい。

学者風の人も黙ってるけどかなりおろおろしてるな。

そうやって分析できる程度にあたしは落ち着いていた。

こういう時は普段からゲームとかラノベ読んでたあたしみたいなの方が適応しやすいのかしら。

……マキナはどうくるだろう。

なるべく隙を作らないようにして周りを見回す。

『お待たせ』

いきなり“ぐにやり”と風景が歪んだかと思うとそこからマキナが出てきた。

ただ、パソコンの画面に出てきたのは虹色の髪をしていたけど、今目の前にいるマキナは艶のある黒い髪に黒いドレスという姿だった。

『ふう、2000人近くいるから移動させるの疲れちゃった』

マキナは袖で額の汗を拭いた。まるで仕事終わりみたいに爽やかな笑顔を振りまく。

——今2000人って言った。あたしに参加NO.777って言うってたからかなりの人数をこの世界に連れて来たんだろうと思って

たけど予想以上だ。

なにせよ何か重要なことを言うかも知れない。集中して聞こう。

『おまけにいいスキル持つてる人は攻撃してくるし……いちいち相手するの面倒なんだからやめてほしいよ。こんなかわいい女の子に斬りかかって来るなんて酷いと思わない？』

パニック男も毒気を抜かれたみたいに叫ぶのをやめて、ぶつぶつ文句言うだけになった。

マキナはくすくす笑うとパチンと指を鳴らす。

するとマキナを囲むように五つのパイプ椅子が現れた。

『さ、座って座って。今から試練のルール説明するから』

あたしを含めた五人は顔を見合わせた。

あたしの考えだと今は従うべきだと思う。目線でそれとなく伝えてみると他の三人も同意件みたいだ。パニックお兄さんもあたし達が座るのを見てぶつぶつ言いながら座った。

マキナはあたし達を見回すと満足したみたいに笑顔を浮かべる。こんな時じゃなきゃ抱きしめたくなくなるぐらい無邪気でかわいい笑顔なのに……。

ふわりとマキナの身体が浮かんだ。3 mぐらいの高さ、あたしたちを見下ろせる位置で止まる。

プレイヤーキャラ

『さてP Cの皆さま、ようこそお集まりいただきました。お楽しみの第一の試練です。……とはいっても、まだみんなレベル低いね。このままなんとか戦わせてもグダグタするだけだしさっさと終わらせよ』

マキナはそう言うとうゝん、と唸りながらこめかみに人差し指を当てて考え始めた。

『よし、こうしよ』

ポンと手を叩く。

『みんなは“こいつ死んでよし”って思うやつ指差して。一番多く指差された人が死亡ね』

「な?！」

一瞬何を言ったのか意味が理解できなかった。子供が鬼ごっこの鬼を決めるみたいな軽さで、マキナは死ぬ人間の決め方を言ったのだ。

しかもこいつはたぶん本気で言ってる。言葉に誰が死ぬのか楽しみにしてるような感じがあった。

あり得ない。言葉を失ってしまった。

「それじゃせゝのでいくよ、せゝ…」 「ざけんなよ!!!」

さっきまでパニック起こしかけていたお兄さんが叫んだ。

——うざいとか思ってたごめん、お兄さん。あたしも今はお兄さんの味方だ。

お兄さんが叫ばなかったらあたしが叫んだ。いくらなんでもむちゃくちゃすぎる。

「なんなんだよそのルール! お前何がしたいんだよ!」

お兄さんはマキナに詰め寄る。マキナは困った顔をしてお兄さんを見た。

「あやや、お兄さんはこのルール気に入らない？」

「ったりまえだ！」

「そっかー、残念だな」

マキナは手を銃の形にしてお兄さんの額に向けた。

——次の瞬間、お兄さんの頭が弾けてなくなった。

「……え？」

辺りに赤い塊が飛び散る。少し遅れて髪の毛がついたままの肉の欠片が落ちてきて、べちゃっべちゃっとな音がなる。

頭のなくなったお兄さんの身体は糸が切れた人形みたいに床に崩れ落ちた。

マキナがパチンと指を鳴らすと、その身体も辺りに散らばった肉の欠片も全部消えて無くなった。

「ルールが気に入らないなら参加を強制したりしないよ。やっぱりみんなには納得した上でやって欲しいしね。他の方々にはお見苦しいものをお見せしました」

——あたしの思考は完全に停止していた。すぐには理解できなかった。お兄さんがいたっていう証拠はもう、空いた椅子だけしかな

い。

それもマキナがもう一度指を鳴らすと消えてしまった。

誰も声を上げなかった。声が出せなかった。

息ができない。……怖い。

怖いよ……。なにこれ……。なんなのよこれ……。怖いよ……。怖い
……。怖い。助けて……。誰か……

「さ、それじゃ“死ねばいいのに”って思う人を指差してください
ね、はい、せいの！」

「ひっ?!」

マキナの言葉にあたしはほとんど反射的に手を動かしていた。

あたしが指差したのは正面にいた女の子だった。そして……

二本の指があたしに向けられていた。

三日目(2)

四人の内、あたしに向けられた二本の指。あとはあたしが女の子に向けてる分と、学者風の人が女の子に向けてる一本。

一番多く指差されていたのはあたしだ。

「はい、けつてゝい。死んじやうのは朝倉 もこさん。残念でした」

——嘘だ。こんなあり得ない。だって……だってあたし何もしてないんだよ？ まだ……まだ何もやってない。ゲームなんですよこれ？ 大丈夫だよ？ 大丈夫なんだよね？

さっきのお兄さんの最期が頭をよぎった。

——嫌だ。怖い……嫌だ、嫌だ！ なんであたしが……なんであたしだけ！

「あはは、怖がっちゃって、かわいそ」

マキナはあたしの前まで降りて来るとあたしの顎に手を当てた。指先で顔を上げさせられる。

「いや……やめて……いや……」

「なんなら助けてあげようか？」

「……え」

「貴女の代わりに他の人を殺すわ。それで貴女は助けてあげる」

——優しい声だった。

助けてくれる？ 本当に？ 怖いのも終わるの？

マキナはニコツと笑った。虫をいたぶる子供みたいな無邪気な顔だった。

——次の瞬間、感じたことが無いぐらいの痛みがあたしの肩を襲った。マキナがレイピアみたいな細い剣をあたしの肩に突き刺していた。

悲鳴を上げようとしたけど先にマキナに口を塞がれて上げられない。

痛い、痛い痛い！ なんで……助けてくれるって言ったのに……

「ごめんね。さっきの無し。ルールはルールだもん」

「そ……んな……ひど……い……」

痛みで声もまともに出せなかった。

涙でぐしゃぐしゃになった視界の中でマキナだけが笑ってる。

「ひどい？ 他の人は死んでもいいって思ったのによくそんなこと言えるね？」

マキナはそう言うあたしの膝の上で膝立ちになった。

寒気がする。カエルの標本でも見るような眼であたしを見下ろしてる。

「一つ教えとくとね。この試練は“全員、誰も指差さなければ”誰

も死ななかったんだよ。あたしは誰かを差さないと殺すなんて言うてなかったんだから。

……だけど！ 貴女は指差した！ 他の人は死んでもいいから生き延びたいって指差した！ これはもう殺されても文句言えないよね？
「どうかな？ どうかな！？」

どんどん声がヒステリックになっていく。

この子は――狂ってる。

「ど……う……して……こんなこと……」

「……それを答えられるようになりたいからかな？ 私達はね、空っぽなの。空っぽだから何かで満たしたいの。たとえばそれが絶望でも」

マキナはまた指をパチンと鳴らす。いつの間にか周りにいた他の人は消えていた。

そしてマキナの手にはあたしの肩を刺したのと同じようなレイピアが握られていた。

「貴女って苦しくなれば死んじやえбайいって思ってるらしいね？
だったらあとで教えてよ。死ぬのと生きるのどっちがいいか。目を反らさず反らせず、最期の最後まで死ぬ程の死を味わって！」

――胸にレイピアを突き立てられた。引き抜いて、突き刺して、笑い声を上げながら何度も何度も。

——消える。

消えてく……あたしが……消えて無くなってく。

嫌だ……死にたくな……い……消え……たくない……嫌……だ、こんな
の………

……生き……た……い……

『朝倉 もこ 死亡』

『特殊スキル、コンティニューの発動条件を満たしました』

『コンティニューしますか？』

『——コンティニューし、ゲームを続きから始めます。残機0
ゲーム再開』

「いやあああああっ!!」

「っ?! もこさん?!」

「いや! いや……! もうやめて……お願いだから……もうやめてええええっ!!」

「もこさん!!」

………フィロ……ちゃん?

フィロちゃんの声であたしは我に返った。元の牢屋。フィロちゃんがあたしの手を固く握っている。

——生きてる?

身体中汗でびしょびしょだった。息が苦しい。

マキナに刺された場所に手を当ててみる。傷も何もない。

「いきなりどうしたんですか? 怖い夢でもみました?」
——夢?

ううん。違う。あれはそんなものじゃない。

あたしは握りしめていた携帯を開いた。ボタンを操作する手は情

けないぐらい震えていた。

浅倉 もこ LV. 2

1stジョブ オタクゲーマー

2ndジョブ なし

3rdジョブ なし

スキル

コンティニュー(0/1)
ゲーム脳

——スキル コンティニュー……効果は“死亡した時、一度だけ復活してゲームを続けられる”最初見た時、???????ってなつてたスキル……。

……つまりあれは現実だった。あたしは殺されて、このスキルで生き返った。

「——う……くう……」

涙が溢れた。吐き気がした。あの時死んだお兄さんのこと、あたしのしたこと、身体を串刺しにされる痛みと怖さが頭の中でぐちゃぐちゃになった。

「もう……やだ……こんなの、やだよ……」

帰りたいよ……。つまらなくていいから……。どうでもよくていいから……。元の生活に戻りたいよ……。嫌だよ……。もうこんな……。――けど、死にたくない。もう死ねない。あたしは知らなかった。知らなかったから『辛くなったら死んで逃げちゃえがいい』なんて思えたんだ。そんなやさしいものじゃなかった。死ぬのは死ぬほど痛くて怖くて苦しいんだ。あたしは……。何も知らなかった。

――あはは、どうしよう。最後の逃げ道無くなっちゃった。

もう逃げ道無いんだ。この地獄をずっと味わっていかないと駄目なんだ。

――なら、壊れちゃえばいいのにあたしの心。

壊れて人形みたいになっちゃえばいい。そうすればもう何も感じない。痛いのも怖いのも苦しいのも。

だから壊れてよあたしの心……

このまま売られて性奴隷にでも何でもしていいから、誰かあたしを壊して。誰か、誰か、誰か……

「もこさんっ！」

気がついたらフィロちゃんがあたしを抱き締めていた。

「……フィロ、ちゃん？」

「大丈夫、大丈夫ですよ……。私がついてますから……」

フィロちゃんはさらに強くあたしを抱きしめる。暖かい。すごく……暖かい。

とくん、とくん、って心臓の音が伝わってくる。

「う…ああ、うあ……」

「泣いてください。泣けば嫌なことも涙と一緒に流れていきますから」

優しい声。心から心配してくれる言葉。さっきまでと違う涙が溢れてきた。

「う…あ……うああああ……うあああああっ!!」

——泣いた。泣けた。心の底から。

子供みたいに。あたしより年下のフィロちゃんにしがみついて。

あたしは夜明けまでずっと泣いていた。

三日目(2) (後書き)

どうせキャラをいじめるならこれくらいの方がいいよね？　ね？

とりあえず僕がやりたかったことの一つはこんな感じ、最強主人公マンセーより最弱主人公がつまずいたり落ち込んだりしながら成長していく小説が書きたかったんです(笑)

さて、いじめるのが楽しくなったんで(おい)序盤はゆっくりこっぴどくいじめます。Sな皆さんお楽しみに↑↑↑↑

三日(3)

——あったかい。

まるでお母さんに抱かれてるみたい。すごく安心する……。

あいつも、お父さんとお母さんが死んだ時は一晩中あたしを抱いて泣かせてくれたっけ……今頃なにしてるかなあ……

「お目覚めですか？」

「ふえ？」

寝てたみたい。なんかまぬけな声が出ちゃった。フィロちゃんの胸に顔を埋めたまま顔を見上げる。

「あ、あのー、もこさん？ 起きたのならそろそろ離れて……」

「やだ。もつとこうしてたい」

「……意外と甘えん坊なんですネ」

「そだよ、あたし本当は甘えん坊だよ。だからもうちょっと甘えさせてね」

フィロちゃんはちょっと困った顔をしたけど、そのままあたしの頭に手を回して抱きしめてくれた。

本当に気持ちいい。心の中にあつた悲しい気持ちがどんどんほぐれて消えていく。

——さらにたぶん一時間ぐらい経った。

ちょっと名残惜しいけど顔を離す。両手を上げてうーん、と伸びをするあたしを見て、フィロちゃんは嬉しそうに笑ってくれた。

「落ち着いたみたいですね？」

「うん……ありがとう」

窓を見ると太陽はほとんど真上まで昇っていた。

昨日の鬱な気分は泣くだけ泣いてだいぶすっきりした。元々、今までにいろいろ経験したせいかな立ち直り早いのもあったしね。

……けどフィロちゃんがいてくれて本当によかった。あの時フィロちゃんが抱きしめてくれなかったら、あたしは本当に壊れてたかもしれない。

『性奴隷にでも何でもしていいから壊して』ってどんだけ病んでたのよあたし。

「朝ごはん、もこさんの分とおいてもらいましたけど、食べれます？」

「うん……、ありがとう」

あたしが答えるとフィロちゃんがパンと美味しそうなフルーツの

サラダを持ってきてくれた。

食べようとしたら『スキル。ゲーム脳 発動』ってなって食べ物が消えたけど。なにこの糞スキル。

フィロちゃんが目をまん丸にして驚いてたから『あたしの家系に代々伝わる早食いの魔法』ってことにしといて無理やり言いくるめておく。これは上手く説明しようがない。

というかフィロちゃん本当にいい子だ。あれこれ詮索してこないのがすごくありがたい。ただそれとなく気遣って、話したいことだけ聞いてくれる。

……大丈夫。あたしはもう大丈夫。あたしは生きてる。生きてるんだから大丈夫。あの時のことは仕方なかったんだ。あれでパニック起こさない人間なんてそうそういない。悪いのはマキナだ。

それと、死ぬのが怖いのも当たり前。今までが異常だっただけ。むしろこれで普通になったんだ。

うん、ポジティブにポジティブに……考えるのやめよ。思い出したら気持ち沈んできた。

気分を変えよう。というか今日は魔法の練習っていうお楽しみイベントがあるんだ。そっちに集中しよう。うん、そうしよそうしよ。

——というわけで魔法に関する準備を初めてもらった。

フィロちゃんは兵士の見回りが来ない時間を狙って石で床に魔法陣みたいなのを書いていく。こう言うと悪いけどミミズがのたうつみたいなの変な文字がいっぱいだ。

「じゃあ、この陣の真ん中に立ってください」

「これでいい？」

あたしが陣の真ん中に立つとフィロちゃんが呪文みたいなのを唱えた。すると陣の文字が光だしてあたしを光が包んだ。なんだか頭がポーツとしてくる。

「魔法の素養は大丈夫みたいですね」

「……そなの？ 何かよくわからないけど」

「はい、この光が出るのは魔力を持っている証拠なんです。それじやいよいよ、本格的に魔法を覚えましょうか」

フィロちゃんがそう言って呪文を唱えようと魔法陣の光が消えた。本当にファンタジーだなあ。

「さて、それでは始めましょうか。魔法を覚えるのに重要なのは三つ。まず魔力……これは大丈夫ですね。次に呪文を暗記する記憶力。そして呪文を理解する読解力です」

——うわ！？ めんどくさい気配満点だよ？

「ぐ、具体的にはどうするの？」

「まずこれから最も初歩的な火の魔法【ファイア】の呪文を教えてください。それを暗記して、詰まらず言えるようになったら呪文の意味を正しく理解していきます。魔法っていうのは、呪文を正確に詠唱し、それに意味を乗せることで初めて使えるんです。……慣れない内は詠唱短縮もできないですから大変ですよ？」

ヤバイよ！？ 早くも不安でいっぱいだよ！？ めんどくさいどころのレベルじゃないよ！？

「ち、ちなみに呪文ってどんな？」

「えー、一度聞いただけじゃ絶対に覚えられないと思いますけどいきますね。」

『母なる大地よ。我が声を届けよ。まつろわぬ火精よ。我が声を聞け。我が名はフィロ、汝らが主、サラマンダーと契約せし者なり』
（中略）……ゆえに我は第三の契約に基づき汝らを使役する権利を得た。望むは炎、我に与えよ【ファイア】』

無理です。

フィロちゃん早口でぶっ通しで唱えて30秒以上かかったよ。なにこの鬼畜難易度。この世界の人ってみんな天才かなんかなの？

うー、厳しいなこれ。ゲームなら魔法の名前唱えるだけなのに……

“ゲーム”なら？

「……【ファイア】」

『スキル。ゲーム脳 発動』

ボウツ！ と手の平の上に火が灯った。

「おおっ？！ マジで使えたよ？！」

「い、いきなり詠唱破棄？！ もこさん天才ですか？！」

フィロちゃんが唾然としてあたしを見る。気分いい。

「……にしてもちよつと小さいなあ」

「この砦には魔力抑制の結界が張られてるからですよ、外に出ればもつと強くなります。」

「……というかもこさん本当に初めてですか？ 私なんて詠唱破棄できるようになるまで一年かかったのに……ちよつとジェラシーです……」

そのあとは魔力に関する知識を教えてもらったけど、そっちもだいたいテンプレですぐに覚えた。

要するに魔力もゲームでいうMPみたいに制限が有って、魔法を使う度に魔力は減る。魔力切れの時は魔法が使えない。しばらく休

むと魔力は回復する……と、こんな感じ。

——そうやって勉強していたらさっきまでベッドに横になっていた、腕に鱗の有るお姉さんが近付いて来た。

「あんた……本気でここから逃げる気？」

「ん？ ああ、うん」

「どうして？ ここにいれば外よりはまだ安全よ？ 食べ物はあるしモンスターに襲われることもない。それにあんたは自分が美人だって気付いた方がいい。」

あんたみたいなのが外でふらふらしてたら、男共に捕まって慰み物にされるのがオチさ」

……たしかにそうだ。外が安全とか考えてなかった。

もしかしたらここに残って、どっかのお金持ちに売られて、ひたすら言うこと聞いてた方が安全なのかも知れない。

——けど。それでもあたしは行きたい。

「あたしは行くよ。確かに外は怖いかもしれないけど……死ぬのは死ぬほど怖いけど……あたしはあたしでいたいから。辛いのだと我慢して誰かの言うこと聞くなんてあたしは絶対嫌だ」

そう言ったらお姉さんはため息をついた。

しゃがんでフィロちゃんが文字を書くのに使っていた石を取る。

「……うちの種族が使ってる魔法、教えてあげる。あんたはなかなか才能が有るようだから覚えられるだろう」

「え？」

お姉さんはちょっと照れたように笑った。

「うちらにはもう必要無いけど、外に出る気のあるのならいろいろ必要だろう？ 遠慮なんて許さないよ」

「……ありがとう」

そうしてあたしはお姉さんに別の魔法を教えてもらった。

お姉さんと話してたら他の人も来たりして、魔法教えてくれたり生きるための知識を教えてくれたり……とにかく得たものはかなり多かった。

具体的に言うと

まず【ファイア】

フィロちゃんに教えてもらった火の魔法。手から火を出して投げたり燃やしたりする。魔力の消費が少ないらしくて使いやすい。

二つ目が【サイキクス】

お姉さんに教えてもらった、物を浮かべる魔法。食事に出されたお盆程度の重さの物なら自由に浮かべて動かすことができる。ただ、ちょっと魔力食うみたい。

三つ目が【ヒール】

エルフ耳の子から教えてもらった説明不要の回復魔法。ただ、これはかなり魔力使う。二回連続では使えなかった。

あとは調合とか食べれる植物とかいろいろ。携帯にメモしていく

のが大変だった。

そんなこんなで三日目の後半分は有意義に過ぎていった。

四日目(1) (前書き)

誰かー、この小説読んでる人でアーマード・コアV買う人いませんかー？
リア友で買う人いなくて寂しいんですよー↑

野良でオペ子やっても絶対指示に従ってくれない気がする今日この頃(笑)

さてさて、“神さまとゲーム脳と過守護な殺戮竜”略して“神ゲー”そろそろもう一人の主人公が出てきます。そこからは、もちやんとそいつの視点をちよくちよく入れ換えながら話を進めようと思いますので一応ご報告をば。

四日目(1)

——どうしよう。

深夜。時間は0時を過ぎたところだ。昨日のことも有ったし、0時を過ぎるまでは起きておくことにした。

ベッドに座って携帯を操作するあたしの隣でフィロちゃんがちょっと身体を丸くして寝てる。

楽しい夢見てるのかな？ 時々しつぽがパタパタ揺れてる。

——本当にどうしよう。

さすがにこれはまずい。いくら何でも引かれる。

そんなことを考えながら、あらためてフィロちゃんの寝顔を見た。

……ドキドキする。

最初会った時の「犬耳かわいいー！」って感じじゃなくて、その……ときめいてる。

あたしフィロちゃんにときめいてる。

いやいや、冷静になれあたし。相手フィロちゃんだよ？ 女の子だよ？ そりゃフィロちゃんかわいしっかりしてるし気が利くし頭いいし空気読むし甘えさせてくれるしいい子だし犬耳だしっぽ付きだけど……女の子だよ？

たしかにあたしは女の子キャラに萌えたりするよ？ ギュッしたりされたりしたいって思ってたけど、恋愛となるとちょっと……いや全然違う。

寝ているフィロちゃんの頭をそつと撫でてみる。「ふにゅう……」って言って気持ち良さそうに笑う。
胸がキュンとしてしまった。

——だめだめだめだめ！ やっぱ無理！ とうかこんな気持ち知られて嫌われたらそれこそ立ち直れないよ！？
心臓がドキドキしすぎてやばい。フィロちゃんに聞こえたりしないか心配になってくるぐらい。

落ち着けー、深呼吸吸ー。もうちょっと冷静にー。

とにかく今はまずい。さすがに引かれる。なんかするならもつと友好度上げてフラグも立てて……いや、いつそのことどうにかして既成事実を作って……あれ？ なんか変？

『最初は純愛チックだったのになんだか変な方向に話が行ってるよー？』

「ひっ——?!」

いきなり笑いながら宙に現れた白いマキナにあたしは硬直した。

『ああ、怖がらなくていいよ。私はマキナだけど試練を与えるマキナじゃないからね。違う意味での試練を与えるのは好きだけど』

突然現れたマキナは膝を抱えた格好のまま、クスクス笑ってあたしを見下ろす。

あれ……？ マキナだね？ 顔立ちとかは昨日現れたあの黒いマキナそのものだ。

だけど今日の前にいるのは髪もドレスも真っ白で瞳だけが赤い。

見た目もそうだけど何より違うのが……雰囲気。黒いマキナはなんというか……狂気みたいなのを感じたけど、この白いマキナからはそんな感じがしない。いたずらっ子みtainな印象しかなくてなんか……警戒心がわかない。

『さて、おめでとう浅倉 もこさん。あなたはLV・5になりました。だからボーナスあげるね。ああ、それと私の姿も声も他の人には見えてないし聞こえてないし、そもそも周りのNPCは私がいなくなるまで絶対に起きないから、そこは安心していいよ』

「……LV・5？ ボーナス？」

『そ、携帯でステータス確認してみてよ』

あたしは白いマキナに気を付けながら携帯を操作した。

1stジョブ オタクゲーマー
2ndジョブ かけだし魔法使い
3rdジョブ なし

スキル

コンティニュー(0/1)

ゲーム脳

魔法LV1〈NEW〉

またレベルが上がっていた。それにジョブも追加されてる。

『確認したね？ 私は一定レベルごとにいろんなボーナスを届けるのが役割なの。何か欲しいボーナスある？』

「……不死身になる薬かこの世界から脱出するアイテムが欲しい」
『はい却下。というよりボーナスはもともと私が勝手に決めることだし聞いただけなんだけどね』

……やっぱり性格は悪い。

白いマキナは探偵よろしく「うーん」と顎に手を当てて考えている。

少しして何か思い付いたのかパチンと手を叩くとあたしの携帯を指差した。

『あなたの携帯にマップ機能をつけてあげましょ』

「マップ機能？」

『そ、マップ機能。周辺の地図や他のPCの位置を表示する機能です。有効活用してね』

そう言うのとフツとマキナは消えてしまった。

牢屋の中に静けさが戻る。

来る時と一緒に帰るのも突ぜ——『ああ、それと』

……また出てきた。

マキナはニヤニヤ笑いながらフィロちゃんを指差す。

『フィロちゃんと周りの子たち、朝まで絶対目を覚まさないようにしといたから何かするなら今のうちだよ？』

「……は？」

『だから、しっぱもふもふしたり耳フニフニしたり、ぎゅーってしたり、ちゅーしたり、あんなことやこんなことしたり』

ちよ?! な、何こいつ?! 意味わかって言ってるの?! 顔

が一気に熱くなった感じがした。

あんなことやこんなことってつまり……その……あんなことやこんなこと?

「……………そ! そんなことするわけないでしょ!」

『あはは♪ 今の間は何かな? ああ、戻ってきたついでに一つ

神様からのお告げ言っとくね』

マキナはそう言ってあたしを指差した。

『最強の盾は最高の盾とは限らない。けど、最高の盾は最強の盾になれる。最高の盾となるために最強を捨てることを望んだ彼は何を護れる？ ……護られる者が支えてこそ、盾は護りたい者を護れる』

まるで歌うように、マキナはそう言った。不思議と耳に、頭に染み透るような声だった。

「……どういこと？」

『それはその時のお楽しみ、それじゃ今度こそ、またね〜！』

マキナはまた姿を消した。今度は戻ってくる気配もない。

なんだったんだろいったい。

一呼吸して携帯を操作してみる。マップ機能って言ってたけど……あった。

アプリの欄にそれらしいのが有った。さっそく起動させると今いる砦の見取り図らしき物が出てきた。

階段の位置。牢屋、扉、罠の位置。切り替えると各階のマップが出てくる。かなり詳しい。これは脱出に使えるそ——ん？

マップを切り替えて砦周辺のマップを出した時、砦の近くに人の形したマークが二つ有った。

マキナの言葉を信じるならあたし以外の召喚された人かしら？

しばらく見てるとその二つのマークは砦の周りを移動し始める。
何してるのかな？

……ん。まあ、今のあたしには関係ないだろうし、とりあえずもう寝よう。いろいろあって疲れた。

明日……いや、もう今日ね。このマップをよく見て頭に叩き込んどこう。

それと意外な効果があった“ゲーム脳”あれはもう少し効果を検証すべき。あたしの勘が当たってるなら、あれは予想外にいいスキルかもしれない。

あたしは静かに目を閉じた。

……ぎゅーってするぐらいならいいよね？

——夜が明けた。

「アイテム、しまう」

目の前にあった小石がフツと消えた。

朝、わりと早く目が覚めたあたしはさっそくスキル“ゲーム脳”

の検証に入っていた。

昨日の魔法の一件で確信したけど、このスキルはただご飯が味わえないだけの糞スキルじゃないみたい。

いや……もしあたしの勘が全部当たってるならとんでもないスキルだ。

「アイテム、まとめて取り出す」

あたしがそう言うのと十個程の石が宙に現れてバラバラと床に散らばった。

床に散らばった石を見て、全部にチェックマークを入れる。……
“チェックマークを入れる” ってなんだって言われてもうまく説明できないけど、とにかく頭の中で石にチェックマークを入れていく。

「アイテム、まとめてしまう」

床に散らばっていた石がまとめて消えた。
とりあえず試したけど予想が当たっていた。

ゲームでよくある仕様として、ドラ○もんの四次元ポケットみたいにあり得ないぐらいに大量のアイテムを持ち歩くつてのがある。

どうもこれができるみたい。あたしがしまうって言うのと物が消え、取り出すって言うのと頭の中でしまった物の一覧が出てきて物を取り出せる。

そういえば薬草とかの回復アイテムとかはどうなるかな？ 一瞬で回復できたりするなら敵に出会っても薬草使いまくりのごり押し

で乗りきれるかも。……痛いのは変わらないだろうけど。

さらに実験を続ける。

まずはベッドをしまおうとしたけど……これは無理だった。あまり大きな物はしまえないみたい。

次に寝てる子の握りしめてた毛布をしまおうとしてみる。……無理と。けど毛布だけなら普通にしまえた。誰かが持ってるやつも無理ってことかな。

えーと、他には……

ベッドに腰かけ、石を取り出してチェックを入れる。で、転がしてみた。

石はコロコロ転がって……だいたい1mちよつとでチェックが外れた。

この辺りが物をしまえる範囲ってことね。うん、だいぶわかってきた。

だんだん脱出の準備が整ってきた。

あとはタイミングね。ベストなのはやっぱりあたしが誰かに買われて、砦の外に出たあたりかしら？

……いや、駄目だ。あたしがここに来た初日、エルフ耳の女の子

が連れて行かれる時に首輪を付けられていた。

後でフィロちゃんに聞いたことだけど、あれは魔法や身体能力を封じるための物らしい。

あたしの頼みの綱は魔法だ。それが封じられると逃げれるかわからないし、あのお姉さんが言うには外は危険だそうだ。できれば万全な状態で逃げたい。

……というかそれ以前に、そういう目で見られたりあそこを触られたりする時点で絶対やだ！ 論外！

女の子をなんだと思ってるの！？ あのエルフ耳の子を連れていったやつのこと、思い出しただけで殴りたくなってくる！

となると兵士から鍵を盗むってのがいいわね。

スキルのゲーム脳で鍵をしまっちゃえばあたし以外には取り出せないし証拠も残らない。

たぶん鍵を盗むのは難しくない。兵士がよく腰のベルトに鍵の束をぶら下げてるの見るし、あたしの能力なら手を近付けただけで鍵を“しまえる”。ちよつと隙さえ見つければ大丈夫。

あとは深夜にタイミングを見計らって牢屋を出て、マップを見ながらこっそり脱出ってとこかな？ 段ボールとかの脱出用アイテム無いかしら？

「もこさん？ どうしたんですか？」

「ひゃっ！」

後ろからフィロちゃんに覗きこまれて悲鳴をあげてしまった。
フィロちゃんはクスクスと笑う。

——ど、どうしょ！ 心臓の音ヤバイ。

「大丈夫ですか？ 顔赤いですし、心臓の音もずいぶん早くなってますけど」

「し、心臓の音聞こえるの？！」

「ええ、まあ近くなら」

フィロちゃんの犬耳がぴくぴく動く。犬耳は伊達じゃないのね……
……というかどうするよこれ！？ 鎮まれ！ 止まれ！ あたしの心臓——っ！！

「風邪ですかね？ 寒気とかしません？ 昨晚も私に抱きついてましたし」

——へ？

「お、起きてたの？」

「まあ、少しだけ」

「いつ？」

「もこさんがあのケータイっていうのを閉じて私に抱きついてきた辺りです」

……あんの邪神！ 絶対に目を覚まさないって言ったのにどんだけ性格悪いのよ馬鹿——っ！！

うああああっ！ 終わったあああ！ 完璧終わったーっ！！
首周りのもふもふをクンカクンカしたり胸に顔埋めてヘヴン状態に
なったたのバレたああっ！ 殺せーっ！ いっそ殺せーっ！！
うわああああああん！！

「あの、もし寒気がしたりするならもう少しくっついてみましょうか
？」

「――今なんと？」

「ですから。もう少し抱き合ってましようか？」

「いいの？」

「あれ？ 知っててやったんじゃないんですか？ 私たち狼人族は
寒い時は家族みんなでくっついて暖をとりますから、親しい同性同
士が抱き合って眠ったりするのはわりと普通なんですよ？」

「……抱きしめてよかとですか？」

「なんか言葉変に……きゃっ!？」

返事を聞く前にあたしはフィロちゃんに抱きついていた。
うゝ。あたし今幸せかもゝ。

……もしこのまま脱出しちゃったらもうフィロちゃん会えないの
かな……

「ねえ、フィロちゃん……」

「はい？」

「ちょっと話が……」

だけどあたしが話そうとしたその時、牢屋の外で重い鉄の扉が閉まる音が聞こえた。

「今の音……！」

あたしが来た初日にエルフ耳の子が連れて行かれたのを思い出した。

大勢の足音が近付いてくる。

ずかずかと牢屋の前まで来たのは立派なマントを着けた大柄な、中年の男だった。

少し遅れていつもの見張りの兵士と、たぶん男のボディーパーガーらしい全身鎧姿の兵士が四人続く。

「ほう、また上玉を仕入れたな」

男は牢屋の前で足を止めるとニヤニヤしながらあたしとフィロちゃんを見た。

上から下まで、舐めるように見られる。

——気持ち悪い。

しばらくの間、あたしとフィロちゃんを見比べるみたいに視線が行ったり来たりした。

「よし、それでは“あれ”をもらおう」

男が指差していたのはあたしだった。

四日目(2)

“あれ”というのが自分を差してることに気付くのになにかあった。

頭が真っ白になる。

すぐに鉄格子の扉が開かれて兵士が入ってくる。

心臓が縮みあがった。

——初日のこと。エルフ耳の子がされたことを思い出して背筋が凍る。

前と同じならこのあと……、あたしは……

「いやあっ!!」

状況を把握した時には兵士に手首を掴まれていた。抵抗しようとしたけどびくともしない。

「やめてっ! いや! 助けて! 誰か……! くう……【ファイ……】」「もこさん!!」

魔法を撃とうとした瞬間フィロちゃんが突然大きな声を出した。びっくりしてあたしも兵士も動きを止める。

フィロちゃんは立ち上がって鉄格子に近付くと男に向かって丁寧に頭を下げた。

「あの子の代わりに……、私を買っていただけませんか」

「フィロちゃん?!」

なんで!?! そんな……

男の方は不機嫌そうにフィロちゃんを見る。

「奴隷が生意気なことだな。自分を買えと言うか」

「……………はい」

フィロちゃんは男の手を取る。そしてこともあろうにその手で自分の胸をわしづかみにさせた。

頭に一気に血が昇った。

「あんた! なにや…むぐっ?!」

怒鳴ろうとしたら腕に鱗があるお姉さんに口を塞がれた。
離してよ! フィロちゃんを止めないと!

「馬鹿……! あの子の気持ち無駄にする気?」

お姉さんに耳元で言われた。
気持ち? どういうこと?

「ここで騒ぎ起こしたらあんたもう絶対逃げなくなる……。だか
らあの子は……」

——え?

頭から血が降りる音が聞こえた気がした。

男の方を見るとニタニタしながらフィロちゃんの胸を揉みしだいていた。

怖いからか、恥ずかしいからか、フィロちゃんの身体がプルプル震えてる。

「私の胸……気持ちいいですか……？」

震える声でフィロちゃんは言った。

「……ふふ、悪くないな」

「……どんなことでもします。だからどうか……」

「なら靴を舐めてみる」

男が鉄格子の隙間から足を入れてきた。

フィロちゃんは少しためらいながら四つん這いになってそれを舐める。

——やだ……やめて、やめてよ……。

あたしは血が出そうなほど強く唇を噛んだ。

もういいよ……。そんなフィロちゃん見たくないよ……。だから、だめ、お願い……

「ははは！ なかなか淫乱な牝犬だ！ 気に入った。おい！ こいつを部屋へ連れていけ！ 商談が済んだらさっそく楽しませてもらう」

フィロちゃんが連れていかれる。

「フィロ……ちゃん……」

一瞬あたしと目が合ったフィロちゃんはニコリと笑った。
やめて……どうしてそんな顔するの……

フィロちゃんが牢屋から出され、首輪を付けられる。そしてそのまま首輪に付いた鎖を引かれて連れていかれた。
遠くで重い鉄の扉が閉まる音がした。

「フィロちゃん……」

あたしはふらふら鉄格子に近付いていった。
やるせなくて思い切り鉄格子を殴りつけた。痛い。
ずきずきと痛む手を押さえながらその場に膝をつく。

悔しくて、痛む手で今度は石の床を殴り付ける。

どうしてこんな辛いことばかりなの！？ フィロちゃんが……
フィロちゃんがこの世界で見つけた幸せだったのに……フィロちゃん
がいてくれるなら辛いことも頑張れると思ったのに……

いつそのこと、あたしも一緒に買ってくれればよかった……
脱出とかもうどうでもいいから……フィロちゃんという方がいい
……。ううん、フィロちゃんと一緒なら辛くてもきつと頑張れる。
嫌なことがあってもきつと立ち直れる。

……あの男、もう一度戻って来ないかな？

そしたら色仕掛けでもなんでもやってやる……好きでもない男にHなことされるのは嫌だけど。すごく嫌だけど。独りぼっちになるのはもっと嫌だ……。もう独りになりたくないよ……。

——その時、また鉄の扉が閉まる音がした。
戻ってきた!?

あたしは顔を上げる。突然のことにあわてた。え、えっと、色仕掛けって具体的にはどうすればいいんだろ? ふ、太ももとか見せればいいんだよね?

……けど足音が全然違った。というか妙だった。

たぶん足音は二人分、その内の一人の足音が カラン コロンって、まるで下駄をはいてるみたいな小気味いい音を立てている。

けど下駄? ないでしょ。この世界って西洋ファンタジーでしょ?

そうしてる間に カラン コロンという足音が近付いてくる。

「ふむ……このあたりのはずなのじゃがのう」

「ふえ?」

——現れたのは……その……ロリッ娘だった。

腰まで届く長い黒髪で、きれいな赤い着物着てて。腰に刀を下げて12歳ぐらいの美少女が、たどたどしい手付きで携帯いじりながら カラン コロンと歩いてくる。

悲しむのも忘れて思わずポカーンとしてしまった。ついに幻まで見え始めたのかと疑ってしまう。

女の子は携帯から目を上げるとあたしの方を見た。

「うおぬし、少しよいか」

「は、はあ」

「この辺りに“浅倉 もこ”という子はおらんか？ 探しておるのじゃが見つからんのでう」

は？ ますます混乱してきた。なんでこのしゃべり方が独特な子はあたしの名前知ってるの？ こんな子と知り合いになった覚えないよ？

「浅倉 もこはあたしだけど……」

「おお！ おぬしか！ 神埼！ 神埼こっちじゃ！」

あたしの位置からは見えないけど、その子はもう一人に手を振ってるようだった。

——神埼？ なんか聞き覚えがある気がする。

近付いて来たもう一人は男だった。年はたぶんあたしとあまり変わらない。

くわえ煙草でこれまた世界観無視の学ラン姿。

腕と足には銀色のガントレットとレガースを付けている。

その人はあたしの前まで来ると腰を落としてあたしと目線を合わ

せた。スポーツマンっぽい日焼けした顔。ちょっとはにかんだように頭を掻く。

「あゝ…。もこ姉か？」

「…………え？」

「俺のこと覚えてるかな……」 神埼 竜斗 “ほら、昔よく一緒に遊んでたろ？”

その言葉を聞いて一瞬ぽかんとしてしまった。どこかで聞いた名前……頭の中にその言葉がゆっくり染みてくる。

——神埼 竜斗…………りゅう君?! なんで?! どうして?!

思い出した!“神埼 竜斗”それはあたしの幼なじみの名前だ。

あたしより一つ年下。小さい頃からいつも一緒に、まるで弟みたいなやつだった。

…………けど、小六の時にあたしのお父さんとお母さんが死んで、おばあちゃんの家に取り取られてからは一度も会えなかったけど、まさかこんなところで……

…………普通に考えて信じられない。

りゅう君がたまたまこの世界に来てて、たまたまこの砦にやって来て、たまたまあたしに出会ったとか明らかに偶然ってレベルじゃない。性格の悪いあのマキナのことだし、偽物か何かの可能性も

……んむぐっ?!

いきなり口の中に何か突っ込まれた。なに?! 毒?! ……ん?
甘い?

「なに難しい顔してんだ? とうかその顔、もしかして泣いてたのかよ? 飴食べろ、元気でるぞ」

口に突っ込まれたのは飴だった。ついでによくみたらりゅう君がくわえてたのも煙草じゃなくて棒付きの飴だった。

口の中に広がる素朴な味。……そういえばりゅう君、飴大好きでいつも舐めてたっけ。その記憶の中の顔と今、目の前にいるやつの顔が重なる。

「……本当にりゅう君?」

「だから言ってるだろ? 俺は神埼 竜斗。もこ姉の幼なじみで弟分みたいなもんだった神埼 竜斗だ」
そう言ったりゅう君はニカッと笑う。

——同じだ。あたしが覚えてるりゅう君と同じ笑顔だ。

……やば、また泣きそう。
胸がなんか暖かくなってきた。

「どっか怪我とかしてないか?」

りゅう君は優しい手付きで、確認するようにあたしの身体を触ってくる。

頭を触って、肩を掴んで腕を握って。

ちょっと恥ずかしいけどなすがままにされておく。心配されるのも今は悪い気がしない。

——ムニユッ

……こいつ今どこ掴んだ？

いやいや、さすがにね。こんな事故ぐらいはあたしが大人になって大目に……

——ムニユッ

……両乳……だと……？

その時点ですでに明らかに事故じゃない。そのまま手があたしのお腹の辺りを通り、下半身に伸びていく。あたしの中で何かがぶち

切れる音がした。

こいつは——敵だ。

「こんの……！」

「ん？」

「変っ態!!」

「うぶっ?!」

きよとんとした顔に、あたしは思い切りグーパンチを叩き込んだ。

四日目(3)

「な、なにすんだよ?!」

「うっさい! 本気で感激してたのにこのド変態!! 最っ低!!」

「いやなんだよ?! 俺が何したってんだよ?!」

「自分の胸に手を当てて考えてみなさいよ!!」

本当になんなのよこの変態!? しかもあんなことやってとぼけ
るとか死ねばいいのに!

「まあまあ、二人共落ち着かんか。今はそんなことやっとなる場合で
もなからう」

着物の子が間に入ってきた。

あいつは「はい師匠」って言うとおとなしく引き下がる。

師匠? なにあいつ。

着物の子はあたしに目を向けると柔らかく笑いかけてきた。かわ
いい。

「はじめましてじゃの。わしは神埼の武術の先生をやっとる“赤川
恋次”という者じゃ。おぬしと同じくこの世界に連れて来られた
口じゃな。よろしくの」

「赤川……恋次?」

なんか男みたいな名前……ていうか男に男の名前。正直まったく似合わない。せっかくこんなにかわいいんだから親ももっといい名前付けてあげればよかったのに……

そんなことを思ってたら、それに気付いたのかその子は渋い顔をして腕を組む。

「むう……やはり違和感があるか……では恋ちゃんでも呼んでくれい。ママにはそう呼ばれておったしのう」

恋ちゃん……ね。まあそれならいいか。

けどこの子、和風な感じなのにお母さんのことママなんて呼ぶんだ。

「ん……まあ自己紹介はともかく、恋ちゃんとそっちの変態はどうしてこんなところにいるの？」

「経緯を話すと長くなるので後に回すが、おぬしを助けに来た」

「……助けに？」

「うむ、弟子の頼みというのと同じ境遇ということでの」

恋ちゃんは腕を組み、堂々と小さな胸を張る。いや……助けにたつて……ねえ？

「……えーと、気持ちは嬉しいんだけど見付からない内に早く逃げた方が……」

「なんでじゃ？」

「なんでって……ほら、危ないしこの牢屋の鍵も無いし……」

恋ちゃんは「ふむ」と牢屋の鉄格子を見た。小さな手でコンコンと叩いて、何かを考えるみたいにあごに手を当てる。

「まずはこっちからじゃな。ちょっと離れておれ」

そう言って恋ちゃんは腰に差した刀を抜いた。キラリと光る白い刃。あたしが一歩下がると刃を鉄格子に向ける。

「……………むん!!」

恋ちゃんは“Z”の形に刀を振った。

——鉄格子がバラバラになって崩れた。

……………ってええええっ?! 今何したこのロリっ娘?! あたしの手首ぐらいの太さの鉄格子がバラバラになったよ?!

「これで問題解決じゃの、さあ行くぞ。そろそろ気付かれる頃じゃ」

恋ちゃんは呆気にとられるあたしの手を取る。

な、なんか知らないけど凄そう。これなら脱出できるかも……

……………駄目だ。

このまま行ったらフィロちゃんと離ればなれになる。たぶんもう会えなくなる……。

「ごめん……」

あたしは恋ちゃんの手をほどいた。

「友達が連れていかれたの、もしかしたら戻ってくるかもしれないから待ってないと……」

「友達が連れていかれた？」

恋ちゃんの後ろに下がってたあいつが突然反応した。

なにこいつ。いきなり反応して。まさかフィロちゃんが女の子だから興味示したとか？ だったらリアルにぶっ殺すよ？

あいつはあたしに近付くと携帯をチラリと見て、またあたしの方を見た。

「その友達っていうの、もこ姉にとってどれぐらい大切な人なんだ？ そいつはもこ姉にとってどういう存在だ？」

本当になにこいつ。どれぐらい大切？ どういう存在？ いきなりそんなこと言われても……さ、さすがに片想い中なんて言えないし……

「し、親友？」

「そういう漠然としたのじゃ駄目なんだよ……」

いや駄目って何よ！？
！？
　　というかさっきから何言ってるのこいつ

「それじゃあ……。もしその子を俺が助け出したら、もこ姉は俺の言うことをなんでも聞くなって約束できるか？　それぐらい大切か？」

「……は？」

「だから俺がもこ姉の親友を助ける。そしたらもこ姉は俺の言うことをどんなことでも聞く。どんな面倒なことでもどんな恥ずかしいことでもな。これ、約束できるか？　それぐらいの覚悟を決めれる相手か？」

——心臓がバクバクし始めた。

い、いや、な、なんでもって……。か、確実にやらしいことする気満々だよ！？

というか久しぶりの再開で胸わしづかみにしてくるやつだし絶対あんなことやこんなことして……

あまつは葉使われて調教されて輪されて……。最終的には抜けることができない快樂地獄に堕とされ性奴隷に……

い、いや、さすがにこれは同人誌読みすぎにしても間違いなくいやらしいことはされる。つか恋ちゃんの前でなんて話してんのよこいつは！

……。けど、それでフィロちゃんにまた会える……？

「……約束したらフィロちゃん……。あたしの友達助けてくれるの？」

「それは約束する」

「絶対に？」

「ああ」

「絶対の絶対の絶対に？」

「絶対の絶対の絶対にだ」

「……わかった」

「後で取り消したり逃げたりはさせないぞ？」

「……うん。いいよ……それでフィロちゃんを助けてくれるなら……」

身体から力が抜ける。何か大切な物を無くした気がした。顔を上げてみたらあいつはニカツと明るく笑っていた。本気で殺したい。

「おい邪神。これで“過守護”の発動条件満たせるな？」

いきなり何も無い方向に喋り始めた。

なに？ 変態でゲスで鬼畜な上に厨二で電波なの？ 宇宙から電波受信してるの？ ほんと手の施しようがないわね。

「よし、それじゃ大丈夫だ。師匠、もこ姉頼みます」 あいつはそう言っただけ上がる。恋ちゃんは小さく頷いた。

「よいのか？ わしに任せてしまって。本音は自分で護りたいんじゃないろう？」

「俺が10人いて護るより師匠が一人いる方が安心ですからね」

「ふふ、それでは弟子の期待に応えられるように気張るとしようかのう」

二人は拳をコツンとぶつけ合った。

恋ちゃんがあたしの手を引く。今度はあたしも素直に外に出た。

「わしらは先に脱出しておく。神埼、おぬしもフィロとやらを助けて早く追いついて来るのじゃぞ」

「はい！」

あいつは力強く返事すると気合いを入れるように強く息を吐く。

「もこ姉、そのフィロって子のわかりやすい特徴とかないか？ あと最近まで使ってた物とか」

……写真なら一応あるけど……

あたしは何も言わず携帯に保存してたフィロちゃんの寝顔を見せた。

「……なんで寝顔なんて撮ってるんだ？」

「う、うっさい！」

あいつはしばらく携帯に写ったフィロちゃんを見ると小さく頷いて顔を離す。

「よし。あと最近まで使ってたやつ。毛布とかそういうのは？」

……あるけど、何に使う気こいつ……。とりあえず言われた通りにフィロちゃんが使ってた毛布を渡した。……で、あいつはそれに

顔を埋めた。クンクンと匂いを嗅いでいる。

——うわぁ……うわぁ……行動が変態過ぎて言葉を失ってしまった。

あいつはしばらく匂いを嗅ぐと毛布をあたしに返して立ち上がる。

「よし、それじゃ言ってくる」

「……あんた、フィロちゃんの居場所とかわからないのにどうすんの？」

「大丈夫」

柔らかく、そしてなんか嬉しそうに笑う。

「心配せずに待っていてくれよ。“今度こそ”約束は守る」

そう言い残してあいつは走り去って行った。

四日目(4) (前書き)

牢屋長っ!？ とか言わない。お兄さんとの約束だ。

だいたいの舞台が整う7日目までは超ゆっくりやります。

そっからはメインイベント以外は1日1〜2話Orキングダムゾ
ン！ を使う予定。

とりあえずそれまでは気長にお付き合いくださいな。

四日目(4)

side 神埼 竜斗

もこ姉の見た目もだいぶ変わってたな。いや、まあ見た目はいいんだ。可愛かったし。けどいきなりグーで殴ってくるような性格だったか？

……また俺何かやらかしたのかな？

石の階段を二段飛ばしでかけ降りる。

もこ姉が言ってたフィロって子の匂いは下の階層に続いていた。

階段の踊り場から一気に飛び降りて着地。そのまま廊下を駆け抜ける。

97

砦の中は少し騒がしくなっているようだった。

たぶん師匠が暴れ始めたんだろう。もこ姉のことはあの人に任せておけば間違いない、おかげで俺はこっちに集中できる。

——誰か来る。走りながら聴覚に意識を集中した。鎧や剣が擦れる音、緊急事態で緊張した感じの呼吸音、歩幅の広い足音。……敵の兵士だ。

固く拳を握る。タイミングを合わせ、曲がり角から飛び出して来た兵士を出会い頭に殴り倒した。

「な、なんだお前は!？」

もう一人が剣を抜く前に顎を蹴り上げた。兵士は短い悲鳴を上げて床を滑る。

『おゝ、りゅう君かっこいい♪』

「引っ込め邪神」

白いマキナがいきなり俺の隣に現れた。それに構わず再び走り出す。マキナは空中に寝そべった体勢のままついてくる。

『おーい、スルーしないでよー』

「お前に構ってる暇なんか無い」

『ひどっ！？ 神様なんだから敬ってよ！』

「敬って欲しいなら何かいいことしろ！」

――デウス・エクス・マキナ

俺たちをこの世界に召喚した神で俺たちにとって最悪の敵……のはずなんだが、こいつはことあるごとに俺の前に現れる。

俺が特殊な立ち位置のPCだから気になるらしい。

ただ、もこ姉がこの世界に来てるとわかったのも、完璧に姿が変わってしまった師匠と早い段階で合流できたのも一応はこいつが教えてくれたおかげだ。

信用するかは微妙だが白いマキナは『面白い限り』人間に手は出さない』と言っていた。

実際にいい情報もたまにくれるし、今のところは利用させてもらっている。

「……おい邪神。一つ答えろ」

『だから私は神様だよ！ 邪神じゃないよう！ で、何？』

「……あゝ、俺……もこ姉に何かしたか？ なんかやたら怒らせたみたいなんだが……」

俺が言うと思いい出し笑いたみたいにマキナは笑い始めた。

俺がもこ姉に殴られた時も笑い転げてたなこいつ。訳もわからず笑われるのは腹たつな……。

「……おい！」

『あはは♪ あれは傑作だったねー！ 答えを言うとりゅう君のスキルの効果の影響だよ。

前にも言った通り、りゅう君の固有スキル “過守護” がりゅう君の“衝動”を封じてるんだけど、それに巻き添えみたいな感じで幾つかの欲求や知識なんかも一緒に封じられちゃってるのよ。

だから意識しないでもこちゃんを怒らせるようなことしちゃったの』

いまいちわからん。

「……何とかならないのか？」

『スキル制限系の薬でも使えばいけると思うけど、その場合 今まで抑圧されてた欲求が暴走しちゃうと思うよ？ もこちゃんのことレイプしちゃうかもよ？』

「レイプってなんだ？」

『うあゝ。そういうのも忘れちゃってるか。めんどくさいなー。えーっと、レイプっていうのはー』

そこまで言ってマキナはいたずらっぽく笑った。

『というか変態ー。それ私みたいな女の子に説明させる気かな？かな？』

……とりあえずまずい言葉らしい。もこ姉に聞くのはやめとこう。後で師匠にでも聞か。

『ま、それだけで済んだら万々歳なんだけどね実際。“衝動”が暴走したら私達以外、誰にも止められないもん。だから気を付けてね？』

「……お前に心配されるなんてな」

『まあね。私が興味を持ったのは“暴走しなかった”りゆう君だもん』

そう言うマキナはフツと消えてしまった。……と、フィロって子の匂いがだいぶん近付いてきた。廊下の突き当たり。両開きのかい扉。速度を緩めず肩から思い切り突っ込んだ。

扉を突き破るとそこはやたら派手な寝室だった。すぐに左右に視線を走らせる。

——いた。でっかいベッドの上で下着姿で女の子に覆い被さっているおっさん。そしてそのおっさんに両腕を掴まれベッドに抑え

込まれた、裸で犬耳の女の子。この子だ。この子がフィロだ。

「え……？」

「な、なんだ貴様は！」

問答無用で踏み込み、振り向いたおっさんの顔面に蹴りを叩き込んだ。グチャアという気味悪い音に背筋がゾワゾワする。

おっさんはそのままベッドから転げ落ちた。

俺はベッドの前に着地してフィロを見る。

「ひっ……！」

ビクッってされた。まずい、恐がらせたか？

「あ、あの！ わ、私はただの奴隷で……」

「違う違う！ 俺はもこ姉に頼まれてあんたを助けに来たんだ。……と、えー、あんたがフィロで間違いないな？」

「は、はあ。……あ」

フィロは何かに気付いたみたいにあわてて布団を被った。

なんだ？ ああ、素っ裸だとさすがに寒いかな。

布団からぴよこんと顔を出したフィロは視線を右往左往しだす。

顔が妙に赤いし風邪でも引いたのかもしれない。

俺の服でも貸してやるか。

そう思って服を脱ぐのに邪魔になる腕のガントレットを外した。ビクリとフィロの身体が震えた。目を見開いて俺の腕に付いている数枚の“黒竜鱗”を見ていた。

黒色の尖った形をした鱗で、俺がマキナに目を付けられたきっか

けだ。

「竜……人族？ うそ……？ あれは昔話じゃ……」

驚愕したという感じの目。……この子なら犬耳とかしっぽ付いてるし大丈夫かと思ったが……やっぱり見慣れないか。

俺はそのまま学ランを脱ぐ。フィロが一気に怯えた表情になったけど、俺が「これ着ろ」って言って学ランを渡すとホッとしたような、拍子抜けしたような顔をして受け取る。

「あ、ありがとうございます……あの……えっと……」

「神埼 竜斗。まあ話は後だ。とにかくここを出るぞ。もこ姉が待ってる」

狼狽しているフィロの手を掴——「待てっ！！」

さっき蹴り飛ばしたおっさんが起き上がった。鼻が変な方向に曲がり、鼻や口の周りが血でべたべただ。寝てりゃいいのに。

「貴っ様あ！ よくも貴族である私にこのような……おい！ 近衛兵！！ 早く来んか！！」

おっさんが叫ぶと隣の部屋から四人、全身鎧を着た男が部屋に入ってきた。訓練されてると一目でわかる動きで俺とおっさんの間に入る。

俺もフィロの前に立ち兵士の前に立った。だが今は脱出優先だ。やり合う意味も無いしできれば戦闘はしたくない。

「……おっさん。頼むからこのまま逃がしてくれないか？ お互い痛い思いはしたくないだろ？」

「今さら命乞いしても遅いわ！ お前ら！ その男を殺せ！」

その言葉で兵士達が一齐に剣を抜いた。俺はフィロの手を引き自分の背に隠しながら拳を握る。

身体の中で血が熱くなる感覚。深呼吸してそれを静める。

四人……ガントレット外したのはまずかったな……

「リ……リュウトさん！」

フィロが俺の腕にしがみついてきた。

「もういいです！ 十分です！ だからお願いです！ 逃げてください！ このままじゃ……」

泣きそうになっているフィロ。女の子に泣かれるのは苦手だ。頬にそっと触れる。

「気にすんなよ。かわいい女の子を護るのは男の権利って言うだろ？」

「……え！？ あ……あの？」

フィロはおろおろとしはじめる。見ているとなんか子犬みたいで可愛い。

「はは、本当にかわいいな」

安心させようとフィロの頭をくしゃくしゃ撫でた。……おお？
この犬耳ふにふにして気持ちいいな。

「~~~~っ?！」

フィロの身体がビクンと震えた。頬が一気に赤くなる。耳が熱い。
やっぱり風邪なのかもしれない。

「はああああっ!」

兵士の一人が斬りかかってきた。
けど気負いがある。後ろ蹴りでその手から剣を弾き飛ばし怯んだ
ところに突きを放つ。

俺の拳は兵士の鎧をへこませ正確に急所に衝撃を通した。

——攻式 鎧通し。

師匠から習った鎧を着た相手を倒すための技だ。まさか異世界で
役に立つとは思わなかった。

さらに斬りかかってきた兵士が胴に振るった剣を足のレガースで
弾き、そのまま兜の上から上段蹴りで首を刈り取った。

二人目、この程度ならまだ楽しよ——俺の腕を剣閃が切り裂いた。

「——っ!？」 腕の傷口から鮮血が溢れた。

三人目が斬りかかってくる。他と動きが違う。

こいつは——強い!

左右に振るわれる剣の速度が段違いだ! ガントレットを外した

俺は本気で馬鹿か！？ まともにやりあうのはまずい！

一文字に振られた剣を伏せて避ける。

続けざま、流れるような動作から兵士が上段から振り下ろした剣をほとんど身体を横倒しにして脛のレガースで無理やり受け止めた。

床に視線を走らせる。さっき倒した兵士の剣と俺のガントレットの落ちている位置を確認。

体勢が崩れる前に側転して距離を取りつつ、剣とガントレットを拾い上げた。

手の中で剣を逆手に持ち変え投げつける。

敵の兵士がそれを弾く間に駆ける。二人目に倒した兵士が持っていた剣を拾い上げつつ、振り下ろされた剣をガントレットを盾に防いだ。

——こんなのと戦ってられるか！ なら狙うは一つ。人体も組織も頭が急所だ。

兵士二人の脇をすり抜け、剣の切っ先を貴族のおっさんの喉元に突き付けた。

「退け。じゃなきゃ殺す」

ドスの聞いた声で脅す。他の兵士の動きが止まった。おっさんは目を剥いて俺を見る。

「う……貴様……何なんだ……」

「聞ってるのは俺だ」

男の首に剣の切っ先を沈ませる。血が流れ、男の顔がみるみる蒼白になった。

「くう……ひ、退くぞ！」

男はそう叫ぶと兵士を連れ足早に部屋を出ていった。

……とりあえずこの場はしのげたか。ホッと息を吐く。……いや、安心するのは早い。早く脱出しないと。

「リ、リュウトさん！ 大丈夫ですか！？」

フィロが駆け寄ってきた。俺の手を見て口を覆う。

「ああ！？ ち、血がこんなに……！」

「大したことねえよ。それよりそっちは大丈夫か？」

「は、はい。けど……」

フィロは心配そうに俺を見ている。いい子だな、と素直に思う。高校にいたギャル軍団とはえらい違いだ。こういうところも、もこ姉が気に入ってる理由だろうな。

「そんな顔せず笑ってくれよ。そのために俺も頑張ったんだから」

「え？ こ……こうですか？」

言葉通りに受け取って、フィロはぎこちなく笑顔を作った。思わず笑ってしまった。その表情を見てるとこんな時なのについ和んで

しまう。

「わ、笑わないでくださいよ……!」

「はは、悪い悪い。……ほんと、やっぱりかわいいなお前」

「っ?!」

「俺、お前のことなんか好きだな」

「っっ?!?!」

火が付いたようにフィロの顔が真っ赤になった。

うおっ!?　なんかまた顔赤くなったぞ?!　おいおい、やっかいな病気じゃないだろうな?　とりあえず早く連れ出してやらないと。

「行くぞ」

「きゃっ?!」

フィロの足と肩を持って抱き抱える。俗に言うお姫様抱っこというやつだ。流石に病人に走らせる訳にはいかない。

「あ!　あの!　えっと……!」

「ん?　悪い。どこか痛かったか?」

「い、いえ……ただその……素敵な男性にお姫様抱っこしてもらった……小さい頃からの夢だったの……」

「……あゝ、なんかよくわからんがまずいことしたか?」

「……………いえ」

フィロは目を伏せてボソボソと呟く。

「夢が叶いました……」

「お、おお、そうか。良かったな。……じゃあ、落ちないようにし
がみついててくれよ？」

「……………はい」

フィロは俺の首に手を回す。

密着した胸から感じる心臓の音がかなり早い。

本当に大丈夫か？　なんともなければいいんだが……。

四日目(5) (前書き)

一応りゅう君の簡易データです。読み飛ばしOK

名前 神崎 竜斗

年齢 16

種族 黒竜の竜人(詳しくは作中で)

もこの幼なじみで元弟分。もこの両親が死んだことをきっかけに離ればなれになってしまったがとても仲が良かった。

子供の頃はやんちゃな子だったがとある理由から年齢に合わない程大人びた考え方をするようになっていく。

また、もことの再開時等にとんでもないことをやらかしたが、これにもやむにやまれない事情があった。

四日目(5)

side 浅倉 もこ

フィロちゃん大丈夫かな……。

地面に腰を下ろして空を見上げながら、あたしはそんなことばかり考えていた。

一緒に行けなかったのが悔しい。本当なら自分で助けてあげたいのに、りゅう君に頼るしかないなんて……。

もっとあたしが強かったらよかったのに。というか大丈夫だったのかなあ、あいつに任せて。変態だしあいつ……もしかしたらあいつがフィロちゃんに……

「どうしたのじゃ浅倉？ そのような怖い顔をして」

恋ちゃんがちょっと心配そうにあたしを見てくる。

「なんでもないよ」とごまかしながら、草場の向こうに見える砦の方を見た。

あたしたちは砦を脱出して近くの森に隠れていた。少し肌寒くて、針葉樹みたいな葉の尖った植物が多い。

待っているだけだと心配になる。無理やりでも一緒に行けばよかったかも……。

「大丈夫かな……」

「心配するでない。女の一人も助けられんようなやわな鍛え方はしとらん」

「……恋ちゃんはいつのこと信頼してるんだ？」

「もちろんじゃ。わしの自慢の弟子じゃからの！」

えっへんとばかりに胸を張る恋ちゃん。かわいいんだけどなんか変わってるのよね。しゃべり方おじいちゃんみたいだし。

「おお！ 来たぞ！」

「ホントに!？」

恋ちゃんが指差した方向を見ると、りゅう君が学ランを着たフィロちゃんをお姫さま抱っこして走ってきて、そのままあたし達が隠れてる草影に飛び込んだ。できた。

「お待たせしました。師匠。もこ姉」

息を弾ませてそう言いながら、りゅう君はフィロちゃんを下ろす。

「フィロちゃん!!」

「も、もこさん!？」

あたしはフィロちゃんの胸に飛び込んだ。

よかった……よかったあ……！　またフィロちゃんに会えた！

潰れちゃいそうなぐらい、力いっぱい抱きしめる。伝わってくる体温さえ本当に嬉しい。フィロちゃんもくすりと笑うと「やっぱり甘えん坊なんですネ」なんて言って抱きしめ返してくれた。

本当に……一時はどうなるかと……

そうだ。りゅう君にもお礼しな——げっ？！

ビクッてしてしまった。

りゅう君の腕からどくどくとたくさんの血が出てて、着ているワイシャツを真っ赤にしている。

「ちょ、ちょっとあんた大丈夫！？」

「ん？　……ああ、舐めときゃ治るだろ」

い、いや！？　あり得ないでしょ！？　てかなんでそんな平気な顔してんのあんた？！　そ、そうだ！　牢屋で回復魔法習ってたんだ！

「ヒ……【ヒール】！！」

あたしの手から白い光が溢れる。

それがりゅう君の腕に触れるとみるみる内に傷口が塞がっていく。

「「お、お——」」

二人で思わずそんな声が出た。

光が消えるとそこには元通りの手があった。

「い、今の回復魔法ですか?! け、けどあんな傷を治せる回復魔法なんて……」

フィロちゃんが驚いてる。

反応から見るとどうも普通の回復魔法ではあの怪我を治すの厳しいみたい。

——たぶんこれもゲーム脳の効果かな? ゲームじゃHPさえ回復すれば回復だし、折れてようがえぐれてようが関係ないもんね。……やっぱなにげに凄いわねゲーム脳。

「と……で、あんたは大丈夫? 痛くない?」

りゅう君は手の具合を確かめるように手をグーパーさせてる。

「大丈夫だな。サンキュ、もこ姉」

「お礼を言うのはあたしの方だよ」

あたしは姿勢を正して、できるだけ丁寧に頭を下げた。

「ありがとう。あんたのおかげで……その……なんとなくあったわ。本当にありがとう」

心からの感謝の言葉だった。もしあの時こいつと恋ちゃんが来てくれなかったらと思うと……ゾツとする。フィロちゃんとまた一緒にすごせるようにしてくれただけでいくらお礼してもし足りないぐらいだ。

「なに、気にするなよ」

そう言ってりゅう君はニカツと気持ちいい笑顔を返してくる。

お？　ちょっとかっこいいじゃん。そういえばりゅう君小学生の頃からけっこうモテてたっけ？　懐かしいなあ

「ああ、けど俺とした“言うこと聞く”って約束は忘れるなよ？　きっちり守ってもらうからな？」

——忘れてたああああっ？！　しまった！　こいつ変態だった！　なに見直したとかかっこいいかもと思ってんのあたし？！　どうしようどうしようどうしよう！？

落ち着け……落ち着けあたし。落ち着いて素数を数えるんだ。どうする？

1. 逃げる……逃げてどこ行く？　この世界危ないらしいし、フィロちゃんの安全も考えると……

2. ごまかす……実力行使されたら無理。

3. 殺す……よっぽどじゃない限りあたしが無理。

うゝ……、どうしよう。

諦めるしかないのかなあ。実際こいつが助けてくれなきゃもっと悲惨なことになってたかもしれないし……。

それに、こいつのことだから下手したらフィロちゃんに手を出しかねないし……

それならもう……あたしが身代わりになってでもフィロちゃんを護るしか……

それに身体は許してもあたしの心はフィロちゃんに捧げ「あの、リュウトさん！」

フィロちゃんがりゅう君に近付いていく。

……あ、あれ？ 何か顔が赤い気がするけどなんで？

「この度は……その、本当にありがとうございました！ ま、まだちゃんとお礼を言ってなかったの！」

「ああ、お前も気にするなよ。俺はもこ姉に頼まれただけだからな」

りゅう君がそう言うと、フィロちゃんは少し不安そうな顔であたしを見た。な、なに？

「もこさんとリュウトさんってどういった関係ですか？ もしかして……恋人……ですか？」

「ち、違う！ 冗談じゃないわよそんなやつ!!」

あたしが叫ぶとフィロちゃんはホッと息を吐いた。

え？ いや、なんでそこで安心するの！？　なんでしっぽパタパタ揺れてんの！？

「あ、そ、そういえばちゃんと自己紹介してませんでしたね！　わ、私は狼人族のフィロって言います！　15歳です！　こ、ここ……恋人はいません！！」

だ、だからなんでわざわざ恋人はいないなんて言うの？！
おかしいよフィロちゃん！？

「おう。これからよろしくな」

「は、はい！　え、えっと、こ、今回のお礼もありますし私にできることなら何でも言ってくださいね？　そ、その……何でもしますから！」

フ、フィロちゃあああああんっ？！

「ほう、これはこれは」

恋ちゃんがニヤニヤしていた。りゅう君の隣に行くと「このっ」と脇腹を小突く。

「てっ！？　な、何してんですか師匠！？」

「いやいや、弟子の成長が嬉しくてのう。僕念仁じゃと思っておったが……まったく、こんなかわいい娘さん相手に……」

「い、いやなんのことっすか？」

きよとんとするりゅう君。その前でフィロちゃんは顔を真っ赤にしてあわあわしてる。

もしかしてりゅう君……気付いてない？

「よいか？ わしから言うことは一つ。手を出すのなら責任は持て、じゃぞ」

「は、はあ。よくわからないけどわかりました」

「い、いや！ わ、わわ私はべべ別にそんなつもりじゃ……！
……け、けど……その、どうしてもっていうなら……その……」

「おいフィロ？ 大丈夫か？ 顔真っ赤だぞ？」

「は……はうう……」

なんなの、このコント……

あたしは大きいため息を吐いた。

——そして日も暮れた頃

砦からさらに離れ、あたしたちは綺麗な水の流れる大きな川の河原でたき火を囲んでいた。薄暗くなった中で火の粉を散らしながら燃えるたき火はすごく綺麗だ。

りゅう君と恋ちゃんはここに荷物を置いていたみたいで、布団や食べ物、着替えなんかが置いてあった。

あたしとフィロちゃんは水浴びして汗を落とした後に少し仮眠して起きたところ。

りゅう君は食材の幾つかを鍋に入れて料理をしていて、恋ちゃんは刀の手入れをしていた。

「それにしても本当に信じられないです。まさかこうやって外に出れるなんて……特にもこさん、恋さんと二人でよく脱出できましたね？」

「あはは……」

——実はあたしの方は思いの外簡単に脱出できた。というか恋ちゃんやんがチート過ぎた。

兵士相手にリアル○国無双するのは刀で壁を切り刻んで道を作るは、あたしを背負って砦を囲ってる塀を飛び越えるはでやりたい放題。

確かにさ。ゲームとかに出てくるロリっ娘がチート性能だったりすることはよくあるけどさ。あたしとの性能差ひどくない？ 泣くよ？

「んで、これからどうする？ 行きたい場所とかあるか？」

りゅう君が鍋をかき混ぜながら言った。
なんかいい匂いがしてくる。

——そういえばこれからどうすんのかな？ 脱出ばかり考えてたけどその後はノープランなのよね。この世界のこと自体ほとんど知らないから当たり前だけど。

……あのマキナの試練もあるから、レベルアップはしとかないといけないし。

「あんた達は？ 行きたい場所とかないの？」

りゅう君と恋ちゃんに聞いてみたけど答えはあたしと同じだった。

「それじゃフィロちゃんは？ 行きたい場所ある？」

「私ですか？」

フィロちゃんはちよつと目を伏せる。

「できれば故郷に……帰りたいです」

「故郷？」

「はい。私は行商人のお父さんと一緒に旅してる時に拐われて奴隷にされたのですが……。できれば故郷に帰って家族と再会したいです……」

「よいのではないか？ わしは賛成するぞ」

恋ちゃんが刀の具合を確かめながら言った。目付きがまるで職人みたいだ。

「けど、オオイグに乗って行っても二〜三週間かかるんです。さすがにお願いするのは……」

「二〜三週間か。なら急がないとね」

「もこさん？」

オオイグ……馬みたいな乗り物かしら？ 何にせよマキナが言っていたゲームの期間にけっこうギリだ。明日からでも急いでいかなないと。

「二人も良いよね？ 目的地会った方が張り合いあるし、フィロちゃんを故郷に連れてってあげよ？」

「うむ、わしは構わん」

「俺も。……おし、そろそろできたかな」

りゅう君が作ってた料理ができたみたいだ。野菜スープみたい。

「あのニンジンみたいな野菜は抜いてくれ」という恋ちゃん。

その言葉を見捨ててニンジンみたいな野菜を山盛りに器に入れ、

「『好き嫌いはするな』ですよ？」と渡すりゅう君。

涙目になる恋ちゃん。

兄妹みたいで和んでしまった。そういえばこの二人本当はどういう関係かな？ 武術の師匠と弟子って聞いたけど正直納得できないし。

……いかがわしい関係だったらと思うと怖くて深く聞けない。

「ほら、もこ姉とフィロも。口に合えばいいけど」

そう言ったりゆう君はあたし達にも器を渡してきた。

二人でお礼を言って受け取った。

野菜のスープ。いい匂い。

フウフウと冷ましてひとく——『スキル。ゲーム脳発動』

……忘れてた。器の中身が一瞬で消える。

ヤバイなこれ……食べ物を味わえないって意外と精神的にくる。

あれ？　けど砦でりゆう君がくれた飴は普通に食べれたよね？
あれ？

「おお！？　もこ姉早いな？　どうだった？　旨かったか？」

「あ、う、うん。美味しかったよ」

あまりに無邪気に聞いてくるからついそう答えてしまった。すごく嬉しそうな笑顔を返してくる。

実際どうなんだろう？　もこちゃんの方を見ると——「おい……
……しい……」

フィロちゃんがすごく驚いた顔をしていた。

「す、すごいです。素材が完璧に調和してるというか、フユキビの

実の甘味とナツマトの実の辛味がいいアクセントになって……こんな美味しいもの初めて食べました!」

「んな大げさな……。ま、ありがとな。そう言われると作ったかいがある」

——そんなに美味しかったんだ……。

やば、また泣きそう……。なんか泣き虫になっちゃったなああたし。これくらい我慢しないと。こんなので泣いてどうする。我慢我慢。

「お料理がうまい男性……。いえ、お料理がうまいリュウトさん、素敵です……」

——泣いた。

おまけ フィロの遠話魔法“声便り”

――前略

この空の続くどこかにいるお父さんへ。

私は元気です。心配かけてごめんなさい。このメッセージが届いていることを祈って毎日あちこちに遠話魔法“声便り”を飛ばします。

あの日、行商先の街で誘拐されて、奴隷として売られそうになってしまいました。奴隷商の牢屋で知り合ったもこさんと、そのお友達のリュウトさんとレンさんという方々に助けていただき、今は自由の身です。

しかももこさん達は私を故郷の村まで送ってくれると言ってくれます。こんな素晴らしい方々に出会えたことには感謝しないといけませんね。

えっと、せっかくなのでもこさん達のことを紹介しておきますね。どんな人か知ってもらった方がお父さんも安心できると思いますし。

まずもこさんのことから。

人間なのに狼人である私ととても仲良くしてくれる心の広い方です。

少し変わってたり常識知らずなところが多いですけど……すごく

いい人です。それと私より年上なんですけど、たまに甘えん坊で妹みたいでかわいいです。

ああ、あと一瞬でご飯を食べる『早食いの魔法』とか、何もないところから物を取り出す『アイテムボックスの魔法』っていう一風変わった秘伝の魔法を使えるんですよ。将来、行商の旅に役立ちそうだから教えてくれるように頼んでるんですけどなかなか首を縦に振ってくれません。けど頑張ります。

次にレンさん。

東方の国の『和服』っていう珍しい服を着た女の子です。

まだ幼いんですけどすごくしっかりしていて頭も良いんですよ。

なんだか話していると私の方がずっと年下みたいに思えてしまいます。

……こう言っていると怒られそうですけど少し爺臭い感じも……ほ、本人には秘密ですよ？

ただ、意外と恥ずかしがりみたいで、水浴びに誘ったら「お、おなごがそのようなこと言うでないわ！」って逃げちゃったんですよ。まだ馴染めてないんでしょうか？ ……今度また誘ってみようと思います。

……さ、最後にリュウトさんっていう方の紹介ですね……。

え、えっと……とっても強くて優しくてかっこよくて誠実な素晴らしい方です！

そ、その……わ、私のこと助けてくれたのはこの方で……えっ……、あの、あ、お料理がすごくお上手です！ 一緒に行商に出れば毎日美味しいもの食べれますよ！ そ、それに家事全般が得意らし

いですから一緒に来てくれたら私も助かるな！、なんて……あ、あれ？ 私何を……

そ、それと……あの……も、もうすぐ私たち狼人族の発情期の時期ですよ？ い、今までは魔法薬で抑えてましたけど、今はその魔法薬がありません。ですから……その……も、もし我慢できなくて……あ、い、いや……べ、別に普通だったら魔法薬無しでも我慢できる自信は有るんですけど。も、もしも……もしもですよ？ もし素敵な男性が現れたりしたら我慢できずに……そ、そういうことしちゃうかもって……

け、けどその時はちゃんと責任取ってもらいますから！ そうなったら三人で一緒に行商の旅しましょうね？

そ、それではこれで！

P S . 料理道具、新しいの揃えといってください。

おまけ フィロの遠話魔法“声便り”（後書き）

おまけです（笑）

シリアス続きっぱなしだからちよつとぐらい息抜きしたかったんです

あゝ、早くほのぼのシーン書きたいです……

一応 説明

遠話魔法“声便り”

自分の声を魔力で包み、遠く離れた相手に飛ばす魔法。ようするに手紙の声版みたいなもんです。

外に出れたのでどこかにいるはずのお父さんに宛ててあっちこっちに飛ばしてるんですねww

これが届いた時お父さん……どんな顔するでしょう（笑）

五日目(1)

「……きれい」

夜空を見上げると満天の星空。たき火にあたりながらそれを堪能する。

手を伸ばせば届きそう。それぐらい近くに感じる。
プラネタリウムでは見たことあるけど、本物は圧倒的だった。

文明万歳な生活してたあたしだけど、この星空を見ただけで心が震える。自然も悪くないな、なんて思ってしまう。

時刻は深夜。もうすぐ日付が……変わった。

少し様子を見てみるけど今日も試練は無いみたい。ホッとして白い息を吐く。

「とはいえ問題が先送りされただけじゃがのう」

恋ちゃんがボソツと呟いた。

なんか恋ちゃんはこういうところ妙に大人びてる。

クーデレ？　こういう子が思い切りデレてくれたらかわいいだろ
うなあ……『お姉ちゃん』とか言って甘えてきて欲しいなあ……あ
！？　いや！　あたしはフィロちゃん一筋だよ！？

……フィロちゃんは椅子がわりの丸太に座ったまま、りゅう君にもたれ掛かって眠っていた。

もたれ掛かるならあたしにすればいいのに、どうしてわざわざりゅう君の隣に行って寝るかな……。寝てるのになんか顔が嬉しそうだししっぽパタパタ振ってるし。

「……もこ姉？　なんか俺を見る目やたら鋭くないか？」

「気のせいでしょ。それよりフィロちゃん起こさないようにね」

にしても、こいつは本当にりゅう君でいいのかな？　確かに笑った顔とか昔の思い出とかはりゅう君だったけど、少なくともりゅう君は変態ではなかった。

それにあたしの覚えてる限りではちよつとカッコついで、背伸びしたがるタイプ。元気な弟って感じのかわいいやつだった。

いくら五年経ってるって言ってもこんな落ち着いた感じになるかしら？　一応もう少し警戒しといた方がいいかも……。ってこら！　あたしのフィロちゃんの頭撫でるな！　というか代われ！

——NPC……元からこの世界にいた人は深夜0時に必ず寝ちゃうようだ。

それまで普通に話してたのにいきなり「眠たくなってきた」って言って眠ってしまった。

りゅう君や恋ちゃんに聞いたけど、二人が見て来た限りでも深夜0時までにはNPCはいきなり眠たくなって寝ちゃってたらしい。つまりはマキナの試練にはNPCは気付かないようになってるってこと。

なんともご都合主義というかなんというか。神様には何でもあり

みたい。

「さて、フィロを故郷に帰すのはいいとして、これからどうするのじゃ？」

「ちょっと北に行ったところに町があるらしいから、そこでフィロちゃんが言ってたオオイグって乗り物を探しましょ」

恋ちゃんに携帯に表示したマップを見せる。

「ほう、地図か。便利なものを持っておるのう」

「レベルアップのボーナスでもらったの」

「ふむふむ、……いい機会じゃしそれぞれ持っておるスキルや道具、それにこの世界に来てからの経緯を話し合わんか？　これから一緒に行動するなら知っておいた方がよからう」

確かにそうね。二人がどんなステータスかも気になるし。

りゅう君を見ると棒付きの飴を舐めながら頷く。飴　何個目だあいつ。

——とりあえず一番シヨボそうなたしから話した。

奴隷のことにフィロちゃんとの出会い。後はあたしのへんてこなスキルとか。

「ゲーム脳……また変なスキルだなもこ姉も」

りゅう君は苦笑いを浮かべる。実際変なスキルだから言い返せない。

「けど変じゃないか？ 砦じゃ普通に俺があげた飴舐めてたろ？」

「なのよね。さっき試しにりゅう君の飴食べてみたけど消えちゃったし、なんでだろ？」

「ふむ」

恋ちゃんはじっと手に取った飴を見つめている。

「浅倉、口を開けてみよ」

「へ？」

「ほれ、アーンじゃ、アーン」

そう言いながら飴をあたしに近付けてくる。

——ヤバイ！？ かわいいよ！？ アーンってしてくる恋ちゃん
かわいいよ！？

本当は『お姉ちゃん、アーン♪』とか希望だったけどこの『浅倉、アーンじゃアーン』ってのも普通にあり！ むしろクーデレっぽくて正義！ ああ、もう恋ちゃんの方を美味しくいただきたい！

「あ、あゝん」

パクツと口の中に飴が入った。あれ？ 消えてない。口の中に素朴な甘さが広がる。

恋ちゃんは満足したように笑った。

「ふむ、どうやらおぬしのスキル。能動的に何かする場合には発動するが受動的に何かされる場合は発動せんらしいの」

あ、なるほど。だから砦でも普通に食べれたんだ。
というか恋ちゃん頭いいなあ。難しい言葉も知ってるし子供とは思えないわね。

口の中で飴をコロコロ転がす。

そうなると誰かに食べさせてもらえばいいわけね。フィロちゃんに『アーン』って……うふふふ。

「さて、次は俺が話すか」

りゅう君がくわえていた飴の棒をたき火に向けて吹き捨てながら言った。

携帯を操作してステータスの画面を出すと携帯をあたしに渡してきた。

神崎 竜斗 LV. 14

1stジョブ 過守護者

2ndジョブ 武道家

3rdジョブ なし

スキル

過守護（守護対象を護るのに特化する）

拳闘術LV. 5（中級拳術使用可能。格闘の威力に補正）

料理上手LV. MAX

クスツと笑ってしまった。

料理はステータスのお墨付きなんだ。あとけっこうレベル高い。

「この過守護っていうのはどんなスキル？」

「あゝ、悪い。それは言えないんだ。スキルの目的に反する結果になる危険があるから言えないらしい」

らしい？ スキルの目的に反する？ なんかよくわからないけど

まあいいや、そこまで興味無いし。

ステータス画面を消してりゅう君に渡す。お、待受画面初代ガン

○ムだ。好きなのかな？

「さてと、じゃあ話すぞ。

俺の方は旅の商人のテントで行き倒れとして扱われてた。あゝ、俺の方はちょっと特殊でな、異世界ってのはすぐにわかって、もこ姉

や師匠がこの世界にいるのもすぐ教えてもらった」

「教えてもらった？ 誰に？」

「悪い。それも口止めされてるんだ。言ったら“面白くない”らしい」

「だからその“らしい”って何よ？」

「すまん。本当に言えないんだ。口止めたやつが性格悪くて……うごっ?!」

いきなりりゅう君が、まるで誰かに後頭部を殴られたみたいに顔面から地面に突っ込んだ。

けど見回したけど誰もいない。一人芝居？ なにしてんの？

というか口止めか、こいつ話さないこと多いわね。

その後のりゅう君の話でもたびたび“教えてもらった”ってのが出てきた。

話終わってもかなり納得できない部分が残った。要約するとその誰かに教えてもらって恋ちゃんと合流して、あたしを助けにきたってことらしいけど。

「次はわしじゃな」

恋ちゃんが見るからに不馴れな動きで携帯を操作してあたしに渡してきた。さてさて、恋ちゃんはどんなステータスかしら？

赤川 恋次 L V・ 6 3

——はい？

赤川 恋次 L V・ 6 3

1 s t ジ ョ ブ 武帝

2 n d ジ ョ ブ 英雄

3 r d ジ ョ ブ なし

スキル

武帝（剣術、拳闘術、練気術の L V・ M A X）

英雄（魔王討伐ボーナス。全ステータス二倍十名声効果）

一騎当千（対多数でステータス上昇。戦闘による疲労無し）

装備品スキル

神龍の太刀（魔王討伐ボーナス。防御無視攻撃）

天狗の下駄（魔力消費により身軽さを上昇）

なんぞ?!

いやいやいや、63!? 魔王討伐!? なにこれ!? 何が起きてんの!?

「わしの方じゃが、まず目を覚ました場所が魔王とやらの城での中」

——恋ちゃんが話始める。……って魔王の城?! 難易度ルナティックモード?!

「少し様子を見てたんじゃが魔王というのが人々を奴隷として使っておっての。あまりにもその扱いが酷かったので決闘を挑んだんじや」

挑む普通!?

「で、倒したのじゃ」

倒すなああああつ!?

「魔王のやつめ、わしを甘くみてまるで本気を出しておらんの。不用意に近付いてきたところを居合で仕留めた。まったく、慢心は身を滅ぼすと言うに」

いやいや魔王様は悪くないよ?! 本気だったら普通は大人げないって言われるよ!?

「そして魔王を倒したらその配下の連中が『やつを倒せば俺が次の魔王だ! ヒャッハー!』とか言いながら襲ってきた。で、それらを返り討ちにしてじゃの」

もうツツコミ疲れた……。

「気付いたらこのレベルじゃった。ふふ、ボーナスを渡しにきたマキナとやらが口をあんどりさせておるところはなかなか痛快だったわい」

そりゃあんぐりするでしょ……。初日で魔王討伐て……。ん？

なんか一瞬、焚き火から離れた暗闇の中で何か光った気がした。目を凝らしてみる。けど何も見えない。気のせいか……。「危ないっ！！」

いきなりりゅう君に突き飛ばされた。直後にさっきまであたしの頭があつた場所を何かが通つて地面に刺さる。

——矢？ え？ なに？

りゅう君にもたれ掛かっていたフィロちゃんが地面に頭を打って悲鳴を上げた。恋ちゃんが自分に飛んできた矢を刀で弾いた。

——何？！ 何が起きてんの？！

「敵だ！ もこ姉！ フィロ！ しっかりしろ！」

「大勢いるようじゃ！ 気をつけよ！」

りゅう君と恋ちゃんが声を張り上げる。フィロちゃんが跳ね起きてたき火を背にして身構えた。

敵？！ 敵ってなに？！ 何が襲ってきてんの？！

たき火から少し離れると完全な暗闇。敵の姿は見えない。音も無くなり、焚き火だけがパチパチと枝が弾ける音を鳴らしてる。

——怖い。敵はどこ……!?!? どうなんの!?!?

呑み込まれそうな暗闇が怖くて、あたしはりゅう君の背中に隠れていた。我ながら情けない。けど身体が動かない。怖くて、勝手にガタガタ震える。

「まつろわぬ光精よ」

しんと静まり返った中でフィロちゃんの澄んだ声が響く。

「求むは光。照らせ! 太陽の如く! 【トーチ】」

フィロちゃんが呪文を唱えて手を上げると閃光弾みたいな光の玉が空にうち上がった。それが破裂して太陽みたいに辺りを明るく照らす。

「ひっ!?!」

ずらりと、周りを覆い尽くすぐらいの数がいた。あたしたちを襲って来てたのは武器を持った半魚人みたいなやつだった。

全身がヌメヌメした鱗に覆われた、人の形をした怪物。飛び出た丸い目がギョロギョロ動いてあたしたちを見る。

「水妖……! モンスターです! 気をつけてください!」

フィロちゃんが叫ぶのとはほとんど同時にそいつらは向かってきた。
——こっち来る?!

「きゃああああっ!?!」

「もこ姉下がれ!」

りゅう君があたしの前に立ちそいつの顔面を拳で叩き潰した。青みがかった血が飛び散る。

「蹂躪せよ炎! 【フレイム】」

フィロちゃんの手から大きな炎が出て半魚人を燃やす。

恋ちゃんが半魚人の塊の中に飛び込んで縦横無尽に太刀を振り、次々と敵の首を切り裂いていく。

辺りに半魚人の悲鳴が響いて、血が、肉が、飛び散る。

「う……あ……」

りゅう君が蹴りで半魚人の頭を割った。

恋ちゃんが何匹かを連続で胴切りにして真っ二つにする。

フィロちゃんが呪文を唱えて何体かまとめて吹き飛ばした。

周りに飛び散る血、内臓、身体のパーツ、生臭い臭い。

「あ……あ……いや……」

「もこさん! 水妖は炎に弱いです! もこさんも!」

フィロちゃんが炎でできた剣を振り回しながら叫んだ。

そ、そうだ。みんな戦ってるんだ。あたしも……あたしもや、やらないと

「フ……ファ……うーあ……」

声が震えて発音できない。一匹の半魚人があたしに気付いて向かってきた。

「ひ……！ ファ……【ファイア】」

手から炎が飛び出す。炎は半魚人をそれであさっての方向に飛んでいった。

「う……く……！ 【ファイア！】 【ファイア！】 【ファイア！】」

無茶苦茶に撃ちまくった。けど炎は全部それで当たらない。なんで！？ なんて当たらないのよ！

半魚人が手に持った剣を振り上げた。

「ひいっ?!」

「もこ姉！」

りゅう君があたしと半魚人の間に飛び込んできた。

肉が切られる音。りゅう君の肩から飛び散る赤色。回し蹴りで半魚人を吹き飛ばす。

「大丈夫か!? 怪我は無いか!?」

りゅう君はあたしの方を見て、怪我が無いのを確認するとホッと息をついた。

肩からポタポタ血を流しながら……

五目(2) (前書き)

間違えて一度消しちゃって、書き直したら妙に文字数が少なくなつた件↑

早くほのぼのパートに入りたいのになんか入れないorz

五目(2)

+

「はぁ……」

ため息が漏れた。

半魚人がいなくなった後、りゅう君の手当てをして朝まで睡眠を取ったあたしたちは近くの町へ向けて川沿いに歩いていた。

朝の空気は冷たくて、ため息も白い息になって消えていく。

先頭を恋ちゃんとは並んで歩くりゅう君を見る。

肩には布が分厚く巻いてあって赤く血が滲んでいる。平気そうにしてたけど傷はすごく痛そうだった。

気持ちが重くなる。本当は回復魔法で治したかったけど、魔力が尽きてて使えなかった。あたしがバカみたいになんか魔法で治したせいで。

ホントに……なにやってんのよあたし。役立たずで、護られてばかりで、怪我させて、治すこともできなくて。

溢れてきた涙を袖で拭いて無理やり止める。泣くな。これ以上迷惑かけたくない。

「もこさん、まだ魔力は回復しませんか？」

フィロちゃんがそう聞いてきた。あたしは首を振る。

魔力の量はなんとなく自分でわかる。なんか魔力が減ってるとお腹の辺りがキュウってなるんだ。

「そうですか……ちょっと遅いですね。いきなり詠唱破棄までできたもこさんなら、もう回復したかと思ったんですけど」

「フィロちゃんはもう大丈夫なの？」

「はい、もう全回復してます。私は元々魔力の量が多い方ですので」

——フィロちゃんの口振りからするとあたし魔力少ないのかなあ……詠唱破棄とかできたのもゲーム脳のおかげだし。今も全然回復した気がしない。

「ちなみにさ。魔力を増やすにはどうすればいいの？ やっぱり修行？」

「そんなことできませんよ？」

——え？

「魔力の量はほぼ生まれつき決まっていますから。いくら頑張っても魔力の量自体は変わりません。……ああ、一応、魔族の心臓を食べ、て魔族になったり、悪魔の奴隷になる契約で魔力を増やせるという話を聞いたことがありますけど……そんなこと考えちゃ駄目ですからね？」

「う、うん」

魔力を増やす方法が無い。……もしあたしの魔力が少ないんだっ
たらあたしは弱いまんま？

さらに気分が沈んできた。

りゅう君は強くて料理上手で。

恋ちゃんは反則的に強くて頭が良くて冷静で。

フィロちゃんも意外に強くて、この世界のこととかいろいろ教えてくれる。

——このメンバーの中であたし……足手まといにしかないんじゃないん
じゃ……

「浅倉、少し水をくれぬか？ のどが乾いた」

「あ、うん」

ゲーム脳の効果を発動。見えないアイテムボックス（そう呼ぶことにした）から水筒を取り出して恋ちゃんに渡す。フィロちゃんはかなり驚いてたけど説明する気力が無くて適当にごまかした。

恋ちゃんが飲んだ水筒を受け取ってまたしまう。

あたしの役目、アイテムボックス……かなあ。

「お、町が見えたぞ」

りゅう君がそう言って遠くを指差した。ああ、本当だ。なんか煙突っぽいが見える。

町ならりゅう君の傷の薬とか買えるかな？ それか魔力を回復で

きる葉。

……それに替えの服とか下着なんかも欲しい。……この世界って生理用品とかあるのかなあ……？ 無いとかなり困るんだけど。

ああ、町なのにテンション上がらない。

町が近付いてくる。周りが3mぐらいの分厚い石の壁で囲まれて、入り口らしい大きな鉄の門の前には鎧を着た門番が四人いた。けっこう警備が厳重。夜に襲ってきたモンスターみたいなのがいるし当然か。

あたしたちが門の前まで来ると目の前で門番二人が長い槍を交差させてあたしたちの道を塞いだ。

「止まれ」

無愛想な言い方で兵士の一人が言った。あたしたちを見て、そのあとフィロちゃんを見て、眉をひそめる。

「狼人族を連れている……何者だ貴様ら」

何者だって……何者って言えばいいんだろ。というかなんでフィロちゃん？

「ま、待てお前たち！」

壁にもたれ掛かっていた門番が慌てて二人を止めた。どうもこの中ではランクが高いらしい、鎧に勲章みたいなのが付いている。

そいつは恋ちゃんの前まで来て腰を90度に曲げてお辞儀した。

「失礼いたしました英雄 恋次様！ なにとぞ……なにとぞお許しください！」

「わしを知っておるのか？」

恋ちゃんが門番を不思議そうに見る。

「は！ 当然であります！ 魔王討伐の英雄“ 恋次” この名は大陸中に知れ渡っておりますよ！」

——これが恋ちゃんのスキル “英雄” の名声効果ってやつかしら？ すごいわね。

「で、そっちの狼人族の女は……」

「む、この子は……」

恋ちゃんは一瞬フィロちゃんを見た。何かアイコンタクトみたいなのが有った気がした。

「……近くの奴隷市で買ったわしの奴隷じゃ」「恋ちゃん？！」

思わず叫んでしまった。だけどフィロちゃんがあたしの隣に来て何か訴えるようにあたしの目を見てくる。

話を合わせろってこと？

「頭も良くて魔法も使える。なかなか優秀なやつでの。丁寧に扱ってもらえるかの？」

「……わかりました。英雄様が言うのであれば。ささ、どうぞ中へ。」

旅で疲れたでしょう。私の自腹で最高の宿を用意させていただきま
す。もちろんお連れの方々も」

兵士の人が合図を出すと重い門がゆっくりと開いていく。恋ちや
んが歩き出すとフィロちゃんもそれに付き従うように後を追って
いった。

「もこ姉はまだ知らないのか？」

「え？」

「この世界では純粋な人間以外の“人”は差別や迫害の対象らしい。
場合によっちゃ町に入れないってこともある」

「そんな……」

「まあ師匠がいる限りは手出しできないさ、あまり心配するなよ」

五日目(3)

用意された宿屋の部屋。最高って言うだけあってかなりいい部屋だ。広くて、清潔で、元の世界でも十分通用するレベル。

あたしは窓からぼんやりと町を見下ろしていた。

中世ファンタジーっぽいれんが道。石造りの建物。綺麗な水が湧き出る噴水。

ホントはあちこち観光したかったんだけどフィロちゃんに『買い物は私と恋さんでやりますからもしさんは魔力の回復に集中してください』って言われて宿屋に残ることになった。

たぶんフィロちゃんの方には悪気は無い。だってフィロちゃんにはこの世界が普通なんだから。……それとも、もしかしてフィロちゃんに恨まれてるのかな……りゅう君怪我させたから。

——ダメだ。今、かなり鬱だ。なんでフィロちゃん疑ってるのよ。そんなこと、フィロちゃんがするわけないのに。

あたし最低だ。

なんで最初こっちに来た時はあんなはしゃげたんだろ……。

帰りたい。元の世界ではあたしどうなったことになってんのかな……。学校の友達はどうしてるだろ……。

ラーメンとかパフェとか食べたいな……今のところまともにご飯

味わえてないし……。

ホームシックまで出てきた。ダメだなあたし。役に立てない上に暗くなってどうすんの。せめて明るくしなきゃダメでしょ。

——と、その時部屋の扉がコンコンとノックされた。

「もこ姉、開けてくれ」

「あ……、う、うん」

慌てて目に浮かんできてた涙を拭いた。化粧台の鏡を見る。ちょっと目の周りが赤いけど大丈夫。

せめてみんなの前では笑ってよう。

笑顔を作って扉を開けた。

そこにはふたを被せた丸いお皿を持ったりゆう君が立っていた。

「お、サンキュ……ってどうしたもこ姉？　もしかして泣いてたのか？」

「ふえ？」

一目で気付かれた。そんな酷い顔してるのかなあたし。

「……なんでもないよ。それより何の用？」

「お……ああ、これ持ってきたんだ」

りゆう君はそう言うと言ったお皿のふたを取った。

——カレーライス？

それは間違い無くカレーライスだった。

白いご飯にかかった茶色いルー。食欲をそそるいい匂い。

「あゝ、その、あれだ。なんかしょげてたから気晴らしになるかな
つと。好きだったろたしか」

「どうして……」

意識せず、自然とそんな言葉が漏れていた。

「どうしてそんなことしてくれるの……？ あたし、足手まといだ
し……、りゅう君、腕けがしてるのに……」

「それでしょげてたのか？ なら気にするなよ、あんなの」

「けど……」

「これは命令だ。俺の言うこと聞く約束だろ？」

りゅう君はそう言ってあたしのおでこを小突いた。

スプーンを手に取り、カレーライスをすくってあたしに向ける。

「ほら、ちょっと味見てくれよ。それなりのできばえだと思うから」

「い、いいよ。自分で食べるから」

「自分で食べたら消えるんだろ？」

「け、けど……」

「じゃあこれも命令だ」

——卑怯だ。

仕方なく口を開けて食べさせてもらう。

口に入れた瞬間絶妙な辛さとコクが口の中に広がる。——おいしい。

おいしいなあ、ホントに。家庭的なカレーライス。なんかすごく懐かしい味。

こんなこともできるんだ。

「う……ふ、あ……」

涙がボロボロ溢れてきた。

「お？　ちょ？！　もこ姉？！」

——惨めだ。あたしはなんにもできなくて、心配されて。わざわざご飯食べさせてもらって。こいつは強くて優しくて、フィロちゃんにも好かれて……

「なんで……なんであたしなんか優しくすんのさ……！　それでいい人ぶってんの！？　優しくされる方が辛いよあたしは！」

気がついたらそんな言葉を吐いていた。

「い、いや俺はもこ姉が心配で」

「そうやってあたしのこと哀れnderの!? それともあたしの身体でも欲しいの!? だったらそう言いなさいよ!」

「お、おいもこ姉?」

「あたしは弱くて! 何もできなくて迷惑ばかりで! それに……」

——違う。ホントに言いたいののはこんなことじゃない。ホントは……
“ありがとう” って言いたいの……

なのに……悔しくて、悔しくて……涙が止まらない。

『あなた、うざい』

——突然だった。

かわいらしい“あの声”がしたかと思うといつの間にかあたしと
りゅう君の間に白いマキナが立っていた。

息を飲む。マキナは不機嫌そうにあたしを睨んだ——瞬間。マキ
ナの髪が生き物みたいに動いてあたしに襲いかかってきた。

「ひっ?!」

瞬く間にマキナの髪はあたしの両手両足を絡め取った。動けない
!? 礫にされたように大の字にされ、宙に浮かされる。髪の毛の
先端は刃物みたいに鋭い。あたしの肌に押し付けられて、少し動い
ただけで肌に刺さり、皮を切った。

『あなた、面白くないのよ』

「え……?」

面白く……ない? 何それ……どういう意味……? マキナは髪であたしの身体を持ち上げながら、あたしの胸元、ちょうど心臓のある辺りに指を当てて円を描く。背筋がゾクゾクした。

『りゅう君はこのゲームでの私のお気に入りキャラなのよ。それを困らせるあなたうざい。』

あなたみたいなの私 大嫌い。弱い? 何もできない? 何もしないだけじゃない。うじうじぐじぐじ、見えてイライラする。だからさっさと死んで、消えて、リタイアして』

「マキナ!」

りゅう君がマキナの頭に拳を振り下ろした。けどそれはマキナに触れる直前、見えない壁のようなものに阻まれて止まる。

『りゅう君への重力を五倍に変更』

マキナは振り向きもせず指を鳴らした。

次の瞬間、りゅう君の身体がまるでとんでもなく重い物に乗せられたかのように床に突っ伏した。

「ぐう……くそ……」

『やっぱり十倍に変更』

マキナが手を下げるような動作をするとりゅう君が悲鳴を上げた。

地面に貼り付いたようになり、まったく動かなくなる。バキバキと木の床にヒビが入った。

『そ〜だ♪ いいこと思い付いた』

マキナはにたあ、と口を歪ませて笑うと、手招きをするような動作をする。するといきなり天井が割れた。割れ目の先にあるのは何も無い真っ暗な空間。そこからいくつもの赤い目がじっとあたしを見ていた。

『この向こう魔界なんだけどさー。魔界って面白い怪物がいっぱいいるんだよ？ 女の子をめちゃくちやにしちゃう触手とか』

まるで悪戯をする子供のようにはマキナは笑みを浮かべる。

——寒気がした。天井の割れ目からジュル、ジュルと水っぽい音がして、ゆっくりと白い三本の触手が垂れてくる。

「う……そ……」

触手の一本が頬に触れる。ぬるぬるして、熱く脈打ってる。

触手はまるでいたぶるようにゆっくりと、粘液を引きながら首筋をたどっていき、襟から服の中に入ってきた。

「ひ……い、や……あ」

胴体にうねうねと触手が巻き付いてくる。気持ち……悪い……。寒気がする……。やだ……。やだ……。やだ……。

そのまま触手はあたしの下腹部を通して下りていく。内股を擦られて思わず身体を反らせた。

『ふふ、このままりゆう君の前でめちゃくちゃにしてあげようか？
幼なじみの前でってシチュエーション萌えない？ 良かったね？
凌辱ゲーに興味有ったんでしょ？』

「や……、やめて……やめてえ……お願い……お願いだから……」
必死で声を絞り出した。マキナはニヤニヤとあたしを見ている。

『やーだよー。私はもっと大嫌いなもこちゃんが泣いて、叫んで、
壊れていくのが見たいんだもん。というわけで触手ちゃん達、犯っ
ちやって』

「や、や……、いやあああああっ!!」
身体に巻き付いて蠢いていた触手が一斉に動き出す。

「や! やあっ!! こんないや! いやあっ!」

『……なんちゃって』

——瞬間、触手が全部消えた。……え? 訳もわからずマキナを
見る。

『残念ながらあたしが直接プレイヤーに手を下すってのはこのゲー
ムのルールに違反することになるんだよね。私たちはルールは守る
の。……だから私はこうするんだ』

さらにパチンとマキナは指を鳴らす。

瞬間、部屋の中が暗くなった。……夜?! 窓から差し込むの
は柔らかい月の光だ。さっきまでであった街の喧騒もなくなっている。

机に置いてあった携帯電話が鳴り始めた。

それが勝手に通話モードに切り替わる。

『もー、いきなり時間変更なんて何するのよ白マキナー！ まだ準備中だったのにー！ ……まあ、いいや、それじゃ始めようか』

「っ?!」「マキナ!?!」

携帯からもあの声がした。

白いマキナはにたりと笑う。

『『第二の試練、開始します』』

二つの声が重なった。

五目(3) (後書き)

この話ノクターンに持っていったら需要あるでしょうか(ボソツ↑

最近面白い作品に飢えてます。このサイトの小説で面白い作品と
かあったらおすすめしてくれると嬉しいです(二次創作もok)m

(m

六日目(1)

周りの風景が変わっていく。

いつの間にかあたしを拘束していた髪は解けていて、りゅう君も自由になってあたしの隣まで走ってきた。

「もこ姉！ 無事か!?」 「大丈夫よ!」

またこいつは……あたしよりヤバい目に合ってたのはあんたでしょう。氣遣われるのがやっぱり悔しい。

周りを見回す。最初の試練の時と違って、空間がぐにやぐにやとモザイクをかけられたようになりながら変わっていく。やがてそれが収ま——「うっ?!」 「見るな!」

りゅう君があたしを抱き寄せて片手で目を塞ぐ。

けど一瞬見ただけでそれはあたしの目に焼き付いていた——死体が山積みになっていた。

あたしはりゅう君の手をどかした。りゅう君は一度それを拒否したけど無理やり引き剥がす。

見ないでいる方が……よっぽど怖い時もある。

あたしたちがいたのはどこかの町の、大きな広場のような場所だった。“夕日”が石畳に覆われた道路や建物を真っ赤に染めている。まるで戦争でもあったみたい。見える範囲の建物はほとんど崩れて瓦礫の山になっていて、道路にもあちこち大きな穴が空き、剣や

盾、鎧の破片なんかが散らばっている。

そして、広場の角に積み重ねられた死体の山がいくつも。子供も女の人も関係なしに、身体中生々しい傷が付いてて、池を作るぐらいの血が流れ出していた。

生暖かい風と一緒に漂ってくる死臭。酸っぱいものが胃から口に昇ってくる。

ただでさえさっきので気持ちが折れかけてるのに、追い討ちをかけるようなその光景に意識が遠くなってくる。気付いたらりゅう君の方に一步寄って腕を固く握っていた。恥ずかしい、情けない。

これ以上迷惑かけるな。心配させるな。必死に自分に言い聞かせてアイテムボックスからナイフを取り出して握りしめた。

魔力は……まだ【ヒール】は無理だけど物を浮かせる【サイキクス】ぐらいは何回か使える程度に回復してる……と思う。

できるだけ死体を見ないようにしながら周りに注意を払った。

——その時、目の前の空間が二ヶ所、ぐにやりと歪んだ。そこからさっきの白いマキナと、炎みたいに赤く光る髪に、赤いドレスを着たマキナが出てきた。

赤いマキナは優雅にスカートの端をつまんでお辞儀する。

白いマキナは楽しそうに爛々と光る目であたしを見ていた。

『『ようこそ、第二の試練の場へ』』

二人の声が重なった。

『ごめんなさいね。白マキナがいきなり試練を前倒しにしちゃった

からまだ片付けが終わってないの。とりあえず臭う物は先に燃やすわ』

赤いマキナがそう言って指を鳴らすと広場にあつた死体の山が一斉に火柱に包まれた。

炎は空に届くようなものすごい勢いで燃え上がり、死体はあっという間に消し炭に変わる。

……大丈夫。あたしはまだ冷静だ。前みたいなパニックにならない。なるもんか。

りゅう君の学ランの袖をぎゅっと握った。
悔しいけど、誰かが一緒にいてくれるってだけですごく安心できる。

そんなあたしを見て白いマキナはフンと鼻を鳴らすとニコッと一度笑みを浮かべてどこかに消えてしまった。

『ああもう！ 掃除ぐらい手伝いなさいよ白マキナーっ！ ……あゝっ！ もういいや。それじゃ第二の試練のルール説明するね。とはいってもとっても簡単で、二時間後まで生きてたらクリア。わかりやすいでしょ？』

うん、とってもわかりやすい。この試練が相当危険だってことも。

『ま、ルールはそれだけだから好きなようにやって生き残ってよ。生き残れば何でもあり。ああ、それと、あなたたち二人以外にもあと三人、他のPCがこの町にいるから』

「他のPC？」

『そ、あなたたちと同じでこの世界に召喚された人たち。もちやんの携帯にマップ機能付いてるでしょ？ あれで探せるからさ。じや、頑張って』

そう言うとき赤いマキナは消えてしまった。

「……どうする？」

あたしはりゅう君を見上げる。

「この広場に居座るのが無難だろうな。視界が開けてるし、何か来ても逃げ道がある」

「け、けどあたしたち以外にも三人いるんだよね？ その人達探した方がよくない？」

「ならそうするか」

「……あっさり意見変えるのね」

「どっちにしる初手の判断材料が少ないんだ。俺が言ったのもあくまで“無難”っただけ。

もしかしたら他のプレイヤーと協力しないとクリアできないかもしれないし、俺達が居座るのを見越してこの広場に仕掛けをしてあるってのも無いとは言いきれない。

重要なのは何か起きた時にどう対処するかだ」

りゅう君はさらりとそう言うてのけた。なんかすごく頼もしい。

「それよりも姉、マップに他のプレイヤーは？」

そう言われてあわてて携帯を取り出し、マップを開いた。ん……と、マップの表示範囲にはいないみたい。

りゅう君も横から覗き込んでそれを確認すると静かに頷く。

「じゃあとりあえず通りを真っ直ぐ行こう。俺から三步以上離れないようについてきてくれ」

言葉少なく言ったりゅう君が歩き出した。それにぴったりついていく。

道の瓦礫や穴に気を付けながら周りを見回した。

人の気配がしない。動く物も無い。風に乗ってくる血の臭いが気持ち悪い。

夕日に照らされる誰もいない町をただ進んでいく。

ところどころで食べ物が少し入った鍋や、野球のボールみたいなのが転がっていた。

ほんの少し前まではここにも人が普通に生活してたんだ。

そう思うとやるせなくなってくる。

もしかしたらマキナは、試練に使うためだけにこの町をこんなにしたんだろうか？ そうだとしたら……

「もこ姉。近くに人いないか？」

「え？！ あ、……いや、いないみたい」

「……余計なことは考えない方がいい。今は俺たちが生きるか死ぬかなんだからな」

……なんでこいつはこんなに冷静なんだろう。なんでこんな状況であたしに気を使えるんだろう。

まるで生き残ることしか頭に無いような……いや、違う。その……まるであたしを護ることしか考えてないような……。

だけど、そうだとどうしてそこまでする？　そこまでするよ
うな理由が無い。

確かにあたしたちは幼なじみで、すごく仲が良かった。

けど、小学校高学年になった頃からはしょっちゅう喧嘩してたし……。

おまけに5年近く会ってなかった仲だよ？　いくらなんでも……
「きゃっ?!」

りゅう君の背中にぶつかってしまった。りゅう君はじっと立ち尽くしている。

——というかこんな時に何を考えてんのよあたしは!？
こんなんだからりゅう君たちに迷惑かけてんでしょ!？

ぶつけた鼻を抑えながら、りゅう君が見ているものを見た。

——人だ。

身体のあちこちに付いた生々しい傷から、いっぱい血を流した男の人がノロノロした動きであたしたちの前を横切っていくところだった。

生きてる人がいた?!　酷い怪我してる!　早く手当てしないと

……「待て！」

その男の人に近寄ろうとしたらりゅう君に腕を掴まれた。

「どうして止めるの！？　もう少しで魔力も回復するし【ヒール】で治してあげれるはずなのに！」

「う……あ……ひとお……？」

男の人がぐりんと首をひねってこちらを向く——顔が半分無かった。

「ひっ……？！」

その人の顔は何かに挟られたみたいに顔の右半分、口から上が無くなっていた。傷口からばたばたと血肉が落ちる。

「ひと……おんな……にくう……」

そいつはあたしを見てにたりと笑った。

背筋がゾクリとする。りゅう君に腕を引っ張られ後ろに回された。

「にくう……にく……おんな……にく、おんな、にく、にくう……」

男はへらへら笑いながらあたしたちに近づいてくる。

「……にくかあ……？」

——建物の瓦礫の中から掠れた声が聞こえた。

「おんな……おんなあ……」

「はら……へったあ、くいたい……くいたい……」

「くひ……、くふひひゃひゃ」

周りにあった瓦礫の中から次々に別の男が立ち上がってくる。

まるでどこかのゾンビ映画のような光景。瓦礫の中から現れた男たちはみんなぼろぼろで、全員身体に致命傷があった。血を滴らせながら、あたしたちの方を見る。

「くい、たい……くいたい……」

「おんなだあ……おかす……おか……ひはひゃはは」

気付けばあたしたちは数十人の男達に囲まれていた。

うわごとみたいな言葉を言いながら、ノロノロとあたしたちへの包囲網を狭めていく。

「……もこ姉。俺の学ランの裾掴んで絶対離すな」

「う、うん」

あたしは学ランを固く握った。りゅう君が足元に転がっていた剣を蹴り上げて掴む。

「くう……おかす……くう……くう……」

男達が一斉に走り出し、襲いかかってきた。

「ひっ!?!」 「絶対に離すなよもこ姉!!」

りゅう君の声が響く。同時に正面から来た二体のゾンビの首を剣で跳ねた。

飛び散る血肉。その一欠片があたしの頬に当たってべちゃりと広がる。

身体中、鳥肌が立った。――怖……い……。

「くう……くわ、せろお」

「おんな……おんなあ……」

「くひ、ひゃひひ……おんなあ……おかす……」

「に、くう……」

まるで欲しい物を見つけたようにへらへらと笑いながら、次々に襲いかかってくるゾンビ。足がガタガタ震えて膝から崩れ落ちそうになる。気付いたらりゅう君の学ランにしがみついたまま、またぼろぼろ泣いていた。

その間にりゅう君は次々に敵を倒していた。

相手の手が届く前に縦横無尽に剣を振るって腕を断ち切り頭を潰す。

身体をひねってあたしに向かって来ていたやつを胸を貫く。

その動きに必死でついていく。カタカタと歯が鳴った。

りゅう君が剣を振る度に血肉が飛び散ってあたしにかかる。気持ち、悪い。

もう、やだ。お願い、お願い、だから。終わって、早く、早く!

固く目を閉じて、すぐるようになりゅう君の学ランにしがみついた。

——何分か、何十分かもわからない時間が過ぎた。

りゅう君はまだ戦ってる。剣を振る風切り音がする度に肉を切る音が聞こえる。それに混じって呼吸が弾む音も。

りゅう君の動きはあたしから見ても遅くなっていた。疲れてきてる……？ ——ひぐっ？！

いきなり髪の毛を引っ張られた。

「つか、まえたぁ……」

ゾンビがあたしの髪を掴んでいた。さらに何体かのゾンビがあたしの髪を掴み、引っ張る。

「いやあああ！？ やめ、やめて！ 離して！ りゅう君！ りゅう君！ 助けて！！」

「もこ姉！？」

りゅう君がこちらを振り向く。けどその瞬間にりゅう君の肩にゾンビが噛み付いた。学ランごと肩の肉を食いちぎられる。そのまま何体かのゾンビに抱き付かれた。

「おんなぁ……！！」

思い切り髪を引っ張られて学ランを離してしまった。瞬く間にゾンビの集団の真ん中に引き摺り込まれる。

怖くて、視界が涙で歪んだ。

「いやっ！ いやあっ！ りゅう君！ りゅう君！」

ゾンビに囲まれてりゅう君の姿が見えない。あたしは石畳の地面に引き倒された。

ゾンビが我先にとあたしに覆い被さってくる。

「や！ やだやだやだあっ！！ やめて、やめてよう……」

引きはがそうとしたけど両腕を他のゾンビに押さえ込まれた。

あたしに覆い被さったゾンビはあたしを見下ろしてにへらと笑う。頭が欠けていて、あたしの顔に血が滴った。涙と混ざったそれをべロリと舐められる。鳥肌が立った。

荒々しい息が顔に当たる。

悲鳴も上げなかった。怖くて、怖すぎて、舌が回らない。声が出ない。

だって

だってこいつら

あたしを犯すって……

「や……やあ……た、けて……たす、けて、誰か……おね、がい……」

服の胸元が引き千切られた。露になった白い肌、柔らかな膨らみ。ゾンビはそれにしゃぶりついてくる。心の中で致命的な何かが崩れる音がした気がした。

や……やだ……たすけて……たすけて……いやあ……

頭がぐらぐらして、痛くて、視界が暗転していく。

ゾンビの肩越しに見えた夕焼けの空高くで、白いマキナがあたしを見下ろしているような気がした。

六日目(2)

side 神埼 竜斗

次々に湧いてくるゾンビをかき分けて進む。身体中に噛み付かれ、ブチブチと服ごと肉を食いちぎられた。

「ぐ……う……!!」

歯を食い縛って耐え、両腕を振り回して無理やり振り払う。足にしがみついていたやつの頭を拳で叩き潰し蹴散らした。

「もこ姉! 返事しろ! もこ姉!!」

返事は返ってこない。ゾンビに視界を埋められてもこ姉の姿が見えない。けど死臭に混じってもこ姉の匂いと声にもならない悲鳴は聞こえた。その方向に向かってひたすら進む。

喉笛に噛み付こうとしてきたやつを顔面を掴んでそのまま振り回し、何体かまとめて吹き飛ばして道を作る。

掴んだやつが奇声を上げて暴れ始めたのを、顔面を握り潰して黙らせる。――絶叫、ぐちゃぐちゃと生暖かい肉の感触。……気持ち悪い。

………けど、ほんの少し、ほんの少しだけ“楽しい”と感じている自分がいて、思わず身震いした。

——嘘だろ？　こんなに簡単に？　マキナには俺の“衝動”は誰かに殺意を抱いたりすると制御が効かなくなると聞いていた。けど……まさかこんな……。

頭は冷静さを保とうとしてるのに、身体が勝手に熱くなる。俺の意識を無視して、身体が戦いを求めている。

それでも、戦うのをやめる訳にはいかない。護りたい、今度こそ、もこ姉のことを護って側にいたい。

道に転がっていた槍を拾い上げて周りのやつ足をまとめて払う。視界が開けた。

進行方向にいたやつを胸を突き刺し、その身体を乗り越える。

「もこ姉！　もこ姉どこだ！？」

——見付けた。何体ものゾンビがもこ姉を地面に押さえ付けていた。

もこ姉は泣いていて……一体がもこ姉に馬乗りになってへらへら笑い声を上げながら服を引きちぎっていて……。

頭に一気に血が昇るのを感じた。

ぶっ殺す……！　プツン、と何かが切れてしまった。

身体の血の回転が速くなるような感覚。酔ったような軽い多幸感

で頭が痺れる。

気が付けば俺は笑みを浮かべていた。

もこ姉の胸にしゃぶりついてたやつ顔面を足のレガースで思い切り蹴りあげた。トマトのように弾け、吹き飛んでいく。

壊した瞬間の感覚、降り注ぐ血の匂いが心地いい。沸き出してくる悦びが収まらない。

「はは、ははははは……」

口から笑い声が出ていた。もっと、もっと。もっとだ！ 全員叩き潰す！

感情に任せて次のやつに向かう。腕を軽く振っただけでみんな壊れていく。顔面を叩き潰し、胸をえぐり、四肢を引きちぎる。辺りに飛び散る血と臓腑。

……気持ちいい。身体の血が沸騰するような感覚。熱い、けどとても気分がいい。

心地いい。ぼうとした頭のまま拳を振るった。ベキリ、グシヤリと敵を潰す小気味いい音が響く。気付けばもこ姉にまとわりついていたやつはみんな潰れていた。……けど、足りナイ。

もっと……もつと壊したい。もっと血ニまみレたい……モツと……モツト……

女に視線ヲ落としタ。怯エタような表情デ俺を見上ゲテる。ああ、マダ壊せるやつガいた……。

にいつと笑って拳を振り上げた。

「や、やめて！ りゅう君！」

——っ?!

拳をそらした。もこ姉の顔を掠めた拳が道を舗装するれんがを粉々に叩き割る。サアツと、熱くなっていた身体が冷めていった。

——今、何をしようとした？ 背筋が凍る。俺を見上げるもこ姉の怯えた目。ち、ちが……俺は……。なんとか言い訳しようと言葉を探す。

だがその時、ゾンビに足を掴まれた。

「しまっ——?!」

思い切り引っ張られ前のめりに倒れた、口の中に血の味が広がる。そのままゾンビの群れの中まで引きずられた。

振り払っても振り払っても次から次に湧いてくる。立ち上がる隙が無い。自分の不用意さに歯ぎしりした。

「り、りゅう君！」

もこ姉の悲鳴が聞こえた。もこ姉も他のゾンビに襲われてまた見えなくなる。

く、そがあ——!! もこ姉が……。ざけんなよ！俺が護らないといけないのに……護れない？ また何もできないのか？ くそ、くそ！ くそ！ くそおっ!!

まわりついてくるゾンビ達を引きずりながら進もうとした。ほんの数歩分、それが果てしなく遠い。
く、そ……。

「その状況で他人のことを見ますか、やはりなかなか面白い人ですねえ……。神埼 竜斗君」

——っ?! 声がした。瞬間に俺にまわりついてたゾンビ達の頭に次々とナイフが突き刺さった。
なんだ?! 何が起きた?!

俺を拘束していた手から力が抜ける。まとめて払いのけ、そばに立っていた男を見た。

ひよろりとした、背の高い細身の外人。短い金髪に赤いレンズの色眼鏡。

古びたスーツを着こなす紳士然とした男は俺を見るとこりと笑いかけてきた。……誰だ? 今 俺の名前を呼んだ? いや、今はそれじゃない!

跳ね起きてもこ姉の方に向かう。

もこ姉にまわりついているやつの首根っこを掴んで無理やり引き剥がした。

「もこ姉! 大丈夫か!?’ 「っ!!’」

俺と目が合った瞬間、もこ姉は息を飲んだ。俺の差し出した手を取ろうとしない。恐がられた？　ズキンと胸が痛む。

……違う。今はそんなこと気にするな。気持ちを切り換えろ。もこ姉の前に立ち、護ることに重点を置いた戦い方に戻した。

さっきの男の方を見る。両手にナイフを握り、長い腕をまるで鞭のようにしなせながら向かってくるゾンビを切り裂いていく。――とんでもなく強い。まるで赤ん坊の手を捻るように簡単に敵を切り刻んでいく。さらに離れた場所にいる相手にはナイフを投げつけ、正確に眉間を射抜いていた。

どういう訳か、いくら投げてもナイフは無くならないらしく、その手には常にナイフが握られていた。

――数分後にはもう動くゾンビはいなくなっていた。もこ姉の脇に膝まずく。

「もこ姉……、その、大丈夫か？」

「……うん」

たぶんほとんど無意識に、もこ姉は腰を浮かして少し俺と距離を取った。……正直そうとうキツイ。

――けど俺からは何も言えない。もしあの時、もこ姉が声を上げなかったら俺はもこ姉を殺さなかった自信がない。

「ひとまず落ち着きそうですね」

さっきの外人の男が言った。パンパンと手を叩いて手招きすると、物陰から白衣を羽織った女の人とアロハシャツを着たおっさんがこちらに走ってきた。思わず体を強張らせる。

「その子大丈夫？　かなりショックを受けてるみたいだけど」

「おいおい、勘弁してえな……」

白衣の女の人とアロハシャツのおっさんだ。白衣の女の人はおこ姉の脇に座ると心配そうにもお姉を見つめる。……危険は無さそうか。

「これは……そうね……」

白衣の女の人はその言うとうと手を前に出す。その手が淡い光に包まれたかと思うと液体の入った茶色い小瓶が現れた。

「これを飲みなさい。気持ちちが落ち着くわよ」

おこ姉は手渡されたその小瓶を受け取るとその人の顔と小瓶を順に見る。今の……スキルか？

「あの……どうも……あなたは？」

おこ姉は小さな声で聞いた。

「おう、ワイは大阪出身の馬場っちゅう」「あんたじゃない」

でしゃばってきたアロハなおっさん 馬場の方は俺がぼっそり切り捨てる。白衣の女の人は柔らかくにこりと笑った。

「永森よ。あなたと同じこの世界に連れて来られたプレイヤーで元は町医者をやっていたわ。そのゲイツさんに助けてもらったの」

そう言っつて永森さん……いや、永森先生はさっきの外人の男を指差した。……観察するような目でこっちを見ている。なんか、あの目は苦手だ。

「ゲイツ……さん、ですか？」

「ええ、よろしくお願いしますよ神埼 竜斗君」

「どうして俺の名前を？」

俺がそう言っつとゲイツさんはにやりと笑った。

「それはもちろん、貴方は有名人ですからね。このゲームに参加してる一部、情報に通じている者ならみな知っていますよ。貴方ご自身もよくご存知でしょう？ ご自身の特異性について」

なんだこの人は――まあいいか、同じプレイヤー同士なら危険は無いだろ。今はもこ姉だ。

……馬場がもこ姉の破れた胸元をガン見していた。よくわからな

いがなんかこいつはいろんな意味で危険な気がする。気をつけよう。永森先生はそんな馬場を害虫でも見るような目で睨み、もこ姉に自分が着ていた白衣をかけてくれた。この人はいいい人そうだな。医者だって言ってたし頼りになりそうだな。

——そして最初の外人、ゲイツさん……か。

さっきからずっと黙って俺達のことを見ている。得体が知れないしなんか……嫌な感じだ。

けど、敵意は感じない。こちらの世界に来てから殺意や敵意には敏感になったようで、これにはかなり自信がある。少し気にしすぎか？

「さて、皆さん」

ゲイツさんが近付いて来た。さっきまで手に持っていたナイフはいつの間にかどこかに消えている。

「ここで話すのも危険でしょう。どこか安全を確保できるような場所でも探すとしませんか？」

まあ妥当な意見だ。もこ姉を休ませたいっていうのもある。

永森先生と馬場もそれに同意した。……とりあえず考えるのは後に回すか……。

立ち上がったもこ姉を引っ張り上げてやろうとする。けどもこ姉は明らかに俺の手から逃げて永森先生に助け起こしてもらった。チラリと俺を見る怯えた目。心が、痛い。

——俺、こんなナイーブだったかな？

自嘲気味に笑ってゲイツさんの後についていった。

六日目(3)

——俺達は辛うじて壊れず残っていた建物を見つけ、そこに籠城することにした。

元は食堂だったらしく、一つの広い部屋にいくつもテーブルと椅子が並んでいた。

そのテーブルや椅子を運んで扉や窓を塞ぎ、とりあえずの籠城の形が整う。床に適当に見繕った布を敷いてその上に座った。

「さて、まずはこうしてプレイヤー五人、欠けることなく揃えたことを喜びましょうか」

ゲイツさんはそう言って俺達を見回す。気のせいか……まるでこの状況を楽しんでいるように見える。ゲイツさんは周りを見回しも姉に目を止めた。

「もこさん……でしたね。どうです？ 落ち着けましたか？」

「あ……はい。その、ありがとうございました……」

「いえいえ、それよりそちらの彼氏にねぎらいの言葉でもかけてあげればどうですか？ 貴女を助けようとする姿は大変美しかったですよ」

「……………」

もこ姉はチラリと俺の方を見た。……怯える子供みたいな目だ。

またズキンと胸が痛む。――わからない。なんでこんなに辛いのがわからないんだ。

この世界に来て……、そしてこの体になって、あのスキルを得て、俺はいろんなことを忘れたみたいだ。特に……なんでこんな風にもこ姉を護りたいと思ってるかがわからない。思い出せない。

ただ、もこ姉のことを思うと何が何でも護りたいと思ってしまった。幼なじみだから、親友だったから……、違う。もっと何か……強烈な……。

「大丈夫？ 顔色が悪いわ」

永森先生が俺の様子を見ながら近づいて来た。

「さて、あなたの怪我、今のうちに応急処置しておきましょうか。奥の部屋に行きましょう？ こんな不潔な環境だし、怪我を放置するのは場合によっては命に関わるわよ」

「う……」

思わず苦い顔をしてしまった。この人もプレイヤー……俺の今の身体について知ってるかはわからないが、確実に変な顔はされる。いや、変な顔をされるぐらいならまだいいんだ。別に死ぬ訳でもないし、もこ姉以外とはこの試練つてのが終わったら縁がない限りもう会うこともないだろう。けど、もし俺のことについて知っていれば……最悪ここから追い出される。

そんなことを考えていると永森先生は子供を叱るような目で俺を

見た。

「見くびらないで。私はあなたが患者でいる限りは決して差別はしないしさせない。できるだけの最高の治療を施すことを約束する。それが医者としての私の信念よ」

——この人、俺のこと知ってる？

永森先生は俺の目を見る。瞳が僅かに光っているように見えた。

「私のスキルはね、扱ったことのある薬品や簡単な医療器具を自在に生み出す能力と、患者の状態やステータスを一目で見極めることができる目なの。安心なさい。これでも腕にはそれなりに自信有るから」

「……わかりました」

この口振りからして俺の秘密にしていることにも気付いているだろう。観念して先生と一緒に奥の部屋に行った。

元は生活スペースだったらしい小さな部屋。倒れていた椅子を拾って座り、学ランのボタンを外して服を脱ぐ。——皮膚にぼつぼつとまばらに付いた黒い竜鱗と、噛まれた傷痕が外気にさらされた。永森先生はもこ姉にやった時みたい薬の入った小瓶、脱脂綿やピンセットを出すと、脱脂綿を薬に浸して俺の傷に当てた。——痛っつ？！

「少し染みるだろうけど我慢なさい。男でしょ」

少してレベルじゃない！ 噛まれた時の痛みの方がまだましだったぞ！？ 必死に歯を食い縛る。

「……あなた、自分の種族……黒竜の竜人について彼女に話してないの……？」

永森先生が静かに言った。普通の人間じゃまともに聞き取れないほど小さな声だ。思わず息を飲む。

「反応しない。他の人には聞かれたくないんでしょ？」

ここまでやるかと内心 感動しながら首を横に振る。

「私の目の力であなたのスキルの効果……あなたが何故、彼女や私たちを“殺さず”にいられるかは理解したわ。でもかなり危険なのに変わりない。これ、持っておきなさい。精神安定剤よ、毎食後に飲めば気休めにはなると思うわ」

そっとカプセルが入った瓶を握らされた。それをポケットにつっこむ。

「どうも……」

その時だった。

「おう、邪魔するで」

突然 馬場が入ってきた。先生が勢いよく立ち上がる。

「ちょっとあなた！ 今は治療中……」 「まあまあ、用が済んだらすぐに戻るさかい」

馬場は俺に近付いて来る。おもむろに手を伸ばして俺の竜鱗に触

れると、いきなり一枚むしりとった。

「痛っ!!」 「何してるの!？」

永森先生が怒鳴る。だが馬場は素知らぬ顔で俺の竜鱗を見つめる。

「ええやないか。なんか銭の匂いがぷんぷんしてなー。鱗人間の鱗なんて珍しいし綺麗やから高く売れるかも知れんやろ？」

「なっ?!」

売る?! 冗談じゃない! ……実際俺の竜鱗はかなりの高値で売れるらしいのだ。聞いた話だと宝石並みの値段で。

もし、その竜鱗の持ち主が俺だとわかったらどうなる? この世界にはそういうやつを狩るハンターまでいるらしい。おそらくはもこ姉と一緒にいるどころではなくなる。

学ランを羽織って元の部屋に戻って行った馬場を追った。扉をくぐるとそこには――

「なあなあ、もこちゃんやつけ？」

「は、はい……」

馬場はもこ姉に声をかけていた。先生にかけてもらった白衣の間から見える破れた服を見てニタニタ笑いながら舌舐めずりする。

もこ姉の表情に怯えが走った。

「あんな鱗の兄ちゃんよりさ、ワイと仲良くせえへん? ワイこれ

でも銭はあるんや。もちゃんかわいいし、あの兄ちゃんよりはワイと一緒にいた方がいい思いできると思うで」

「け、けっこうです！」

「つれないこと言うなや。仲良うしようやって」

馬場がもこ姉の腕を掴んだ。そのまま強引に自分の方に引き寄せ、て肩に腕を回す。

胸の中で抑えていた黒い感情がふつふつと沸いてくる。訳のわからない怒り。さっき竜鱗をむしり取られた事より遥かに上。ただもこ姉にちよつかいを出してただけなのにぶち壊したい程馬場が憎らしかった。永森先生があわてて後ろから抑えてくれなかったら馬場に殴りかかっていたかもしれない。

「そこまでにしときましようか」

その時、ゲイツさんが馬場の肩を掴んだ。

「醜いですねえ。金、色、欲望に走る人間というのは。……やめませんか、これ以上は黙って見ている訳にもいきません」

「なんやあんたの言うことはようわからんわ。固いこと言わんといてえな」

「亡者に囲まれ、私に必死に助けを求めて来たのは誰でしたかねえ」

馬場は小さく舌打ちするともこ姉から手を離れた。そのまま近く

にあった椅子を蹴飛ばして建物の奥へと歩いていく。

「おや？ どこへ？」

「小便や小便！」

そう吐き捨てるように言って馬場は建物の奥へ消えて行った。

「もこ姉、大丈夫か？」

「う、うん。ちょっと怖かったけど……あ……ゲイツさん、ありがとうございます」

「いえいえ、お気になさらず……どれ、私も少し用を足してきますかね」

ゲイツさんもそう言って建物の奥へと消えていった。

俺はもこ姉のそばで膝をつく。

「……本当に大丈夫か？ 顔、真っ青だぞ？」

「う、うん。……大丈夫、だよ」

そう言ったもこ姉の体は小さく震えていた。俺がそれに気付いたことに、もこ姉も気付いたようで、抱き締めるように自分の肩を抱く。

「はは……なんか、ゾンビに襲われたの、トラウマになっちゃったかも……。男の……そういう目が、すごく怖い……」

もこ姉の声はひどく小さくて、震えていた。乱暴に触れれば壊れてしまいそうで、できるだけ優しくその頬に触れた。

「その……俺も怖いかな？」

もこ姉は少し驚いたような顔で俺を見て、頬に当たった俺の手に自分の手を重ねながら、静かに目を閉じた。

「怖く、ないよ……今は」

俺はそつともこ姉の背中に手を回して抱きしめた。ひっぱたかれるのも覚悟していたけど、もこ姉は抵抗もせずに俺を受け入れてくれた。

なんでだろう。それがすごく嬉しい。嬉しすぎて胸が温かくなってくる。

「ねえ……、なんで……ゾンビに襲われた時、あんなこと、したの……？」

「……………」

「なんで、あたしを……殺そうとしたの？ 変、だよ……今はこんな優しい、のに……」

腕の中で、もこ姉は俺を見上げる。本当に小さな子供みたいな、親に怒られるかもと怯えながら親にしがみつく子供に似てる。――護りたい。もこ姉を……絶対に。

なら、話さないと……けど話してどうする？ 本当に話していいのか？ 話したらきくと、こうやって抱きしめることなんてできな

い。こんな目で俺を見てくれたりしない。もしそうなった時、俺はもこ姉を護りたいと思えるか？　俺はもこ姉を……殺さずにいられるか？

——カタン、と。もこ姉のポケットから携帯が落ちた。けどもこ姉はそれを気にする素振りは見せない。代わりに俺が拾った。

携帯の画面にはマップが表示されたままになっていた。俺、もこ姉、永森先生が青白いマーカーで表示されていて、少し離れたトイレの場所にゲイツさんと馬場の二人のマーカーが……ん？

「これは……？」

「……え？」

ゲイツさんと馬場、マーカーはたしかに二つ有る。ただ、二つのマーカーの内一つが赤く点滅していた。

その点滅がやがて収まり、マーカーが黒く変わっていく。

『馬場　正昭　死亡』

画面の右上にそんなメッセージが表示された。

六日目（4）（前書き）

読んでくださってる皆様お待たせしました。

夏風邪こじらせて寝込んでました。普段風邪ひかない分辛かったです……。

皆さんも夏風邪にはお気をつけて

六日目(4)

「死、亡……?」

思考が停止しかけた。黒く変わった馬場のマーカーの前でじっと動かないゲイツさんのマーカー。ゲイツさんが殺した? けど何故? 確かに馬場は嫌なやつではあったけど今はこの試練を乗り越えるために協力し合う仲間だ。仲間であるべきだ。それを殺したとなれば圧倒的にデメリットが大きすぎる。聡明そうなあの人ならそんなことわかっているはずだ。殺す理由が見当たらない。

頭の中を色々な考えが巡る。けど答えが出る前に携帯に表示されたマーカーは動いていた。

「ただいま戻りましたよ」

携帯に表示されたマーカーと同じタイミングでゲイツさんが戻ってくる。さっきまでと同じ声色、同じ口調、同じ笑顔、けど俺の嗅覚は一つだけさっきと違うものを感じ取った。この臭いは……

真新しい……血の臭い……。

「……馬場は一緒じゃないんですか?」

「ああ、彼はもう少しかかりそうでしたね。それが何か?」

紳士的な笑顔を浮かべてそう返してくる。その穏やかな目かもこ姉の方に向けられる。びくりともこ姉の身体が震えた。

――まずい。とっさにもこ姉の腕を引いて背中に隠す。

それを見てゲイツは眉をしかめた。

「おやおや、感づかれましたか」

そう呟くと、俺ともこ姉に向けられていた視線が永森先生の方に移った。心臓が跳ねる。

「先生！ そいつから離れ――」

瞬間、ゲイツの持った銀のナイフが先生の喉を斬り裂いた。

「――あ？」

本当に一瞬だった。真紅の血が吹き出し、ゲイツを紅く染める。

先生は何が起きたのかも理解できないように、大きく見開いた目で自分の血を浴びるゲイツを見上げていた。

「貴女の医者としての姿勢は美しかった。できれば貴女は最後にしたかったのですがね」

ゲイツはナイフを逆手に持ち変え、無慈悲に先生の眉間に突き立てた。ガスツと骨が碎ける音。先生の身体が力無く後ろに倒れた。目は見開かれ、天井を向いたまま光を失っていく。

ゲイツは先生の脇まで行くと膝を付き、そっと開いたままの目を閉じさせる。

なんだ……なんでそんなことができる？ どうして自分が殺した相手をそんな恍惚とした表情で見ることが出来る！？

背中にもこ姉の体温を感じる。ひどく震えていた。

ゲイツは黙祷を捧げるように永森先生の前で目を閉じる。そして十字を切り、静かに目を開けると俺たちの方を見た。

「彼女は美しく、誇り高い人物でした」

まるで自分の言葉に酔うように、ゲイツは言った。

「このような世界に放り込まれながらも医者としての信念を失わず、行動した彼女は敬意を表するに値します」

なん、なんだこいつは……？　なんで？　どうして……こんな……。

出会って一時間も経ってはいなかったけど、俺のことを知りつつ患者として受け入れてくれた先生。それをこいつは……！

「なんで殺した！？　馬場はまだわかる……いや、わからないけどまだ理解できる。けど先生が何をした！？　何のために殺した！？」

「その質問への答えは二つといたところですかねえ」

銀の閃光が走った。ゲイツが俺たちに向けてナイフを振るっていたのだ。知覚するよりも早く身体が反応してガントレットで受け止めていた。ゲイツがニヤリと口元を弛める。

「あれを止めますか、さすがと言っておきましょう」

「くっ?!」

もこ姉を脇に抱え、扉を塞いでいたテーブルを蹴り飛ばして外の通りに飛び出した。左右に視線を走らせる。幸い見える範囲にゾンビはいない。

――瞬間、建物の中から無数のナイフが飛んできた。狙いは……もこ姉か！ ナイフの軌道ともこ姉の間に腕を割り込ませてガントレットで払うように弾き飛ばした。だがその隙を狙ったナイフが一本、俺の肩に刺さる。

「りゅう君?!」

齒を食い縛ってナイフを抜いた。道に投げ捨て、建物の方を睨む。

「逃げるのはいただけませんねえ。貴方も衝動に従い、闘争を楽しもうじゃありませんか」

コツコツと足音を立ててドイツが建物から出てくる。その両手には刃渡り30cm程の短剣が握られていた。

「お前はいつたい……何なんだ？」

「おっと失礼。そういえば先程の質問にも答えていませんでしたね」

ドイツはそう言うのと芝居がかった動作で両手を広げた。

「まず、何故こんな事をするのかという理由。それは私たちが殺す側、神であるマキナの言葉を借りるならPKとしてこの世界に召還されたからですよ」

「P……K……?」「たぶん……【プレイヤー キラー】ってことだと思うよ……」

もこ姉が静かに言った。

「オンラインゲームとかで、他のプレイヤーを殺すプレイヤーのこ
と、そう言うの……」

他のプレイヤーを殺す……か、そうかこいつが……いや、こいつ
も……

「そうです。私はプレイヤーを殺すために召喚されたプレイヤー。
神の意思に従って殺し、殺すたびに強くなり、また新たな標的を殺
す。そんな存在です」

「……じゃあ、お前は生き延びるために他の人を殺したのか？」

僅かな望みに賭けてそう聞いた。けどゲイツは笑って首を振る。

「いいえ、確かに誰かを殺すようには言われていましたがこの試練
でのノルマは一人。馬場を殺した時点でそれは達成しています」

「じゃあ何故……！」

「もう一つの理由、それはただ楽しいからですよ」

胃に重い物が落ちたような感覚だった。

「たの……しい？」

「そうです」

ゲイツはニヤリと口元をゆがめる。

「昔から好きなんですよ。命が散る瞬間を見るのが。生前が美しい者であればなおいい。高貴な命が壊れ、散りゆく様、美しい者をこの手で壊す背徳感、壊れ、動かなくなった身体、そこに漂う虚無感、それはもはや芸術だとは思いませんか？」

狂ってるのか……？ いや、違う。こいつは正気だ。正気で言ってる……。

「お前は……普通じゃない……！」

「ええ、もちろん理解していますよ。私は異常者だ。ですがそれがどうかしましたか？ 私は“普通”の中に埋没して死んで生きるよりは、異常者として生きて死ぬことを望みます」

——こいつは、殺す。殺さなきゃいけない。生かしておいちゃいけない！

「そして私が何者かという質問、申し訳ありませんがこれは私にもわからないのですよ。」

この世界に召還され、マキナに様々な情報や知識を脳に刷り込まれる課程で記憶が混乱してしましましてね、元の世界でのこともほとんど思い出せないんです。

ゲイツという名前もマキナに与えられた名前で、本当の名前すら思い出せません」

ゲイツは肩をすくめて小さく首を振った。

「ですが、おぼろげな記憶の中に一つ、私の愛称らしきものの記憶が有りましてね、今はその愛称とゲイツという新しい名前を組み合わせたものを使っています。」

ですから私が何者かと聞かれればその名で答えましょう」

ゲイツは芝居がかった動作でうやうやしく礼をした。

「我が名はゲイツ・J・リップー。神の意志により、貴方々の命を切り刻む者です」

背筋をゾクゾクと寒気が伝った。顔を上げてこちらを見るゲイツ。漂ってくる明確な殺気。

——俺は師匠の元で何年間も武道の鍛練を積んできた。そのおかげか、戦う相手と向き合った時にだいたいの相手の力量や自分が勝てる相手かが感じ取れるようになった。

……とんでもない相手がきたもんだ。けど……ちようどいいのかも知れない。もこ姉の脅威になるこいつを潰すか、潰されるかして、別れよう。

俺は一緒にいない方がいい。俺と一緒にいたらきつともこ姉を傷付ける。だからここで別れよう。

「もこ姉……走れ」

「え？」

呆けた顔をするもこ姉の背中を突き飛ばす。

「いいから走れ！ 死にたいか！」

もこ姉の顔に怯えが走る。

「だ、だって……まだゾンビが……」

「ああくそ！ わからないか！？ もこ姉じゃ足手まといなんだ！早く行ってくれ！ 今すぐ！！」

もこ姉の表情が固まった。

目を伏せて、小さく一言呟くと俺に背を向けて走り出す。

『ごめんなさい』それがもこ姉の呟いた言葉だった。どういう意味で言ったのかな……。

思わずほくそ笑んでしまった。たぶんもこ姉のことだから俺の言葉通りに受け取ってんだろうなあ……昔からそういう所は妙に素直だったから。

「それで彼女を護ったつもりですか？」

ゲイツはため息混じりに言った。俺の行動に失望した、そんな感じだ。

「だとすれば貴方の彼女を護りたいという想いは酷い自己満足だ。貴方の庇護無しに、彼女がこの先生き残れると思いますか？」

「自分が勝つ前提で話すなよ」

「すでに貴方にも結果は見えているはずですよ」

ゲイツは悠然と構える。そうだ、俺とこいつがやり合ったら……ほぼ確実に俺が負ける。それももこ姉を逃がした理由の一つだ。

「本当に彼女を護りたいなら、貴方は自分もどうにか生き残ることを考えねばならなかった。自己犠牲、聞こえはいいですがそれは彼

女を一人、この世界に放り出すという残酷な行為であり愚かな自己満足です。美しくない」

——好き勝手いってくれる。……けどそうだな。そうだよ。自己満足、そんなの理解してる。

「……絶対無いだろうけど、もこ姉が俺の後を追って死んでくれたら、たぶん俺は嬉しいなんて感じると思う」

「……ほう？」

「俺なんかが何もかもからもこ姉を護れるなんて思っていない。より確実にもこ姉を逃がせる手があるっていうならそれが俺の最善手だ。……俺はただ、目の前でもこ姉が死ぬのは、傷付くのは、悲しむのは……死ぬより辛い。だから命に代えても護る……！」

小指から順に指を折り、固く拳を握った。

「だからお前はここで、死んでも止める！……」

ゲイツの表情が変わっていた。侮蔑から、とても嬉しそうな、楽しそうな表情へ。

「歪んだ愛ですねえ。……いや、逆ですね。綺麗事を並べる人間より貴方の方がよほど真っ直ぐだ。面白い！ 実に好感が持てますよ。……ならば」

ゲイツがもこ姉の背中に向けて投げナイフを構える。一気に踏み込んでその手を掴んだ。

「簡単にやらせるわけないだろ！」

「健気ですねえ。そして実に美しく、愚かです」

ゲイツの口元が歪む。組み合ってるだけで気持ち悪い。腹に蹴りを入れて吹き飛ばした。

向こうの武器はナイフや短剣だ。それなら師匠との訓練で何度かやったことがある。とにかく間合いを保って……この試練が終わるまでの時間を稼げれば――突然 胸に鋭い痛みが走った。

「え……？」

視線を落とす。長い三股の刃が俺の胸に突き刺さっていた。

視線を上げる。ゲイツの手に握られていたのは長さ3mはある長槍だった。

なん……こんなの……さっきまで……

「ここは元の世界とは違うのですよ？ 私はどういった能力を持っているか考えなかった貴方が迂闊でしたね」

能……力……？

胸に刺さった刃を抜いて数歩下がった。喉を血が上がってきて口から溢れる。

ま……ずい……。

ゲイツが口元を歪めて笑うと長槍が一瞬で消えた。代わりにまたナイフがゲイツの手の中に現れる。

「冥土の土産……というわけではありませんが、この能力について教えてあげましょうか」

ドイツがそう言うとな이프は消え、その手には代わりに大鉈が握られていた。

「どうです？ 面白いでしょう？ ……私の能力の一つは【狂喜の宴】この世界のありとあらゆる刃物を作り出す能力です」

武器を作り出す能力？ ああくそ、キチガイに凶器持たせんな。

ドイツの振り下ろした鉈を避けた。

刃物を作り出せるとは言っても使う人間はあいつ一人だ。隙を突ければどうとでもなる！

ドイツが鉈を戻す前に体勢を低くして踏み込んだ。

一撃ぐらいならかまわない。どうせ俺の今の身体は簡単には死なない。けど向こうはどうだ？ 相討ちならこっちに分がある！

「おやおや、誰が手にしか出せないと言いましたかね？」

——全身を貫かれる痛み。

ドイツの肘から、膝から、腰から、全身から飛び出した刃が俺を貫いた。

六日目(5)

side 浅倉 もこ

――走る。

日が沈んで薄闇に包まれた廃墟の中をひたすら走る。
胸が苦しい。息ができない。けど走った。

――二人死んだ。あの人に……殺された。逃げないと、逃げなきゃ。けどりゅう君は……、わかんない、わかんないよ……。なんで逃げないのよ……。なんで戦うのよ……。あたしを護ってよ！

……邪魔……。だから？ あたしのこと邪魔なのかな？ 足引っ張ってきたから……。

その時、何かが足に引っ掛かった。バランスを崩して地面に顔を打ち付けた。痛い。口の中に血の味が広がる。

「に……。く……。だぁ……」

「ひっ?!」

瓦礫に半分埋まった状態のゾンビがあたしの足を掴んでいた。ゾンビはニタァと笑うとあたしの足を両手で掴んで瓦礫の中から這い出てくる。

「や……やあ……」

振りほどこうとするけどほどけない。カラン、と 手が落ちていた剣に触れた。

「——っ！」

気が付いたらあたしは血塗れになっていた。目の前には何度も頭を叩き潰したゾンビ。ぼんやりと、あたしはそれを見ていた。

手に残った頭を叩き潰す感覚。……吐き気がする。

『お、敵初討伐だね。童貞卒業おめでと。……ん？ 女の子で童貞卒業って変かな？』

目の前に白いマキナが現れた。あたしはそれを見上げる。

『うわ、ぶっさいくな顔。死んだ魚みたいな目してるよ？ というかまたそんな状態？ほんとメンタル弱いね』

マキナは大きな鏡を取り出した。そこに映ったあたしは本当にぶっさいく。目に光が無くて、髪ボサボサで、泣きすぎて顔はむくんで身体中 血塗れで。

『あんまぶさいくなのは見たくないよ。せめて汚いのは勘弁ね』

マキナは軽く指を振る。すると鏡に映ったあたしの身体はきれいになった。血の跡は消えて、破れた服もボサボサの髪も、むくんだ顔も元に戻る。けど光の無い目だけは変わらない。

『でさ、でさ、どうお？ 初の敵討伐の気分はさ？』

マキナはそう言ってあたしの顔を覗き込んだ。

『もしも〜し？ パニクるのは別にいいけど無視はしないでよ〜』

あたしの前で手を振る。しばらくすると小さくため息をついてパチンと指を鳴らした。

なんでこいつはこんな……。こいつだ……。こいつさえ、いなければ……。あたしはこんな目に……。！

「うあああああつ！！」

『おっ！？』

剣を握りしめてマキナに斬りつけた。ざくりと肉を斬る感触が手に伝わる。

『きゃあああああつ？！』

マキナの胸元から血飛沫が上がった。空中に浮いていた身体が落ちる。

力無く大の字に伸ばされた手足。血がゆっくりと道に広がっていく。

「や……やっ『ってない』」

ひょいと反動をつけてマキナは立ち上がった。パンパンと自分の服を払うと、あたしが斬った傷も血の跡も消え失せる。

『やれやれ、こうでもしないと話もできなさそうだったからね。あ、おめでと。私にダメージ与えたプレーヤー、もちやんが初めてだよ』

「なん、なのよ……。次は何しにきたのよ！ ……いいよ……もう……好きにしてよ……」

手から剣が滑り落ちた。もうやだ……。たとえ何をやっても、こいつには絶対通用しない。頑張れば頑張るほど辛くなる。ならもう何もしたくない！

けどマキナはあたしの反応に不満そうに顔をしかめた。

『別に今は何もしないよ。だってここであなたに何かしたら、あなたのために死ぬりゆう君が可哀想じゃない。……いや、可哀想なのは別にいいんだけどお気に入りキャラが犬死にっつのは嫌なのよね』

——え？

『携帯のマップ画面、見ってみて』

あたしは言われるがままに携帯を取り出した。マップ画面。表示されるゲイツとりゆう君、二人のマークー。

——りゅう君のマーカーが赤く点滅してる。心臓がドクンと縮み上がった。

『もうわかってると思うけど、赤の点滅はもう死にかけてるってことなの。ちなみにりゅう君はこのまま放って置いたら……えーと、32分と17秒後に出血多量で死んじゃうから』

ゾクゾクと上がってくる悪寒。マップに表示された点滅する赤いマーカーから目が離せなかった。

「うそ……だって……そ、そんな……」

『ん？ なに？ りゅう君は死なないとも思ってた？ んなわけ無いじゃない。そもそも、ゲイツのレベル33だし、あいつのスキル接近戦ではかなり上位のランクA相当だし、りゅう君が勝てる見込みあんまり無いのよね。』

りゅう君もそれがなんとなくわかってたみたいだよ？ そうじゃなかったらこんな危ないところをもちゃん一人で行かしたりしないよ。今まで馬鹿みたいにもこちゃん護ろうとしてたの忘れたの？』

死……ぬ……？ りゅう君が？ そんな……だめ……。だめ……！ 絶対だめっ！！ あいつは……あいつは……。

あれ？ あいつは……なに？ なんてこんな動揺して……なんで、あいつは、変態で……お節介で……幼なじみで……。

あたしの……幼なじみで……弟分で……親友だった。大切な、大

切な親友だった。

「お願い……します……」

『ん?』

あたしは土下座していた。頭を地面にすり付けて、心からお願ひする。

「お願い……します! あいつを……りゅう君を助けて! 何でも……何でもするから! 何でもしていいから!」

そうだ。あいつは幼なじみのりゅう君だ。ずっとまた会いたいと思つてた大切な親友だ。あんなことが有つて素直に喜べなかつたけど、本当はすごく嬉しかった! だから……だからこんなお別れなんて絶対嫌だ!

マキナはニヤリと笑つた。楽しそうにふわふわ浮かびながらあたしを見る。

『りゅう君が死ぬつてなつたらずいぶん態度変わったね♪ ふふ、何でもか。なら自分で助けなよ。何でもするんでしょ?』

「そ、それができないからあんたに頼んで……!」 『だからそういう考えが嫌いな』

バチンとマキナはデコピンした。目の前に星が散つて仰向けに倒れる。

『できない? やらないだけじゃない。できないなんて誰が決めた

の？　あなたでしょ？』

「だ、だってあたしにはあいつを助けられるような力なんて……！」

『考えた？』

——え？

『もこちゃんはりゅう君と出会う前、必死に自分の能力の使い方を考えてたはずだよ。』

正直言うならね、もこちゃんの状況への適応力と頭の回転の早さは全プレイヤー中トップクラスだった。

あの時は私も“この子はすごい”って期待してたんだよ？　……けど、りゅう君や恋ちゃんと出会ってからあなたは考えなくなった』

マキナはふわふわ浮いて仰向けに倒れたあたしの真上に来た。

『楽だもんね、誰かに頼るのって。楽して怠けて、結果がこれ。さ、どうする？　諦める？　それとも頑張る？』

何も言い返せなかった。そうだ……こいつの言うこと……間違っていない。

あたしは考えるのを止めていた。自分で何とかしなきゃって思ってた時は必死に考えてたくせに……。りゅう君と再開してから……。あいつは護ってくれるから……。あたしは甘えて……。

「……あと、何分？」

あたしがそう聞くとマキナはニツコリ笑った。

「28分。回復魔法が間に合うのは25分ってとこかな？」

あたしは身体を起こした。――考えないと。

なんでマキナがこんなことを言いに来たかとか、疑問は尽きないけど、それは全部 後回し。

考えないと。今頑張らなきゃ絶対に後悔する。あいつは……あたしの幼なじみで弟分みたいなやつなんだ。

他のどの友達よりも身近で、大切に、大好きだったりゅう君。

……あたしは、また昔みたいになりたいんだ。昔みたいに仲良くなって、けんかして、昔みたいにあいつを大好きになりたい。

こんなところで……こんなところで死なせるなんて絶対にやだ！

――あたしはどうすればいい？ どうやったら戦える？ どうしたらりゅう君を助けられる？

……ダメだ。考えがまとまらない。違う、こんな考え方じゃダメだ。あたしの武器になるのは魔法や変な能力なんだから。

たとえば……そう、ゲーム。ゲームでならあたしはどうする？

目的は友達を助けること、敵は格上、プレイヤーはあたし。こんなシチュエーション腐る程クリアしてきた。だからきつとできるはず。正攻法でやるのがダメなのはわかりきってる。なら……。

――っ！

ある！ あった！ あたしの戦い方！ あたしにしかできない戦い方！

上手くいくかはわからないけど、絶対に意表は突ける！ もうこれしか思い付かない！

あたしはすぐに立ち上がり元来た道を走っていた。

六日目(6)

——マキナが言った、りゅう君が手遅れになるまであと8分。あいつが何を考えてるかわからないけど今はマキナの言葉を信用することにした。

ぎりぎりまで仕込みに時間を使って、りゅう君のところへ走る。魔力は……ほぼ全回復してる。回数で言えば回復用の【ヒール】一回、これはりゅう君の治療に絶対使うとして、それに加えて遠隔操作の【サイキクス】一回分か攻撃の【ファイア】三回分ってところか。

頭の中で必死に考えた魔法の使い方をシミュレーションする。大丈夫……絶対大丈夫！ 自分に言い聞かせながら走った。

——見えた。そして絶句した。

地面に倒れたりりゅう君、身体から溢れ出した血でりゅう君の身体が浸っているような状態だ。

そしてそれを見下ろすドイツ。手の中で血の付いたナイフを弄びながら愉悦に満ちた表情で死にかけているりゅう君を見ている。

酸っぱい唾を飲み込み、足を止める。ドイツがあたしに気付いて顔を上げた。

「おやおや、これはこれは」

ゲイツはにやりと笑って丁寧にお辞儀する。ぞくぞくと背中の筋肉が強張るのを感じた。

「貴女のことは諦めていたのですが、まさかそちらから来ていただけるとは思いませんでしたよ」

ゲイツの手の中でナイフが光る。

「う……」

一歩下がってしまった。覚悟を決めて来たはずなのに足がガタガタ震え出す。

——怯えるな！ そう、あんなやつ何でもない。

いつもゲームでは格上のやつでもワクワクしながら行ってるでしょ！
ああそう！ これはゲーム！ いっそそう思え！

……そうやってゲームをプレイしてる自分を想像したら本当に落ち着いてきたあたし、どうかしてると思う。

深呼吸。ゲイツの位置とりゅう君の位置を確認する。手を後ろに回した。

「装備、変更」

小さく呟くと手にボウガンが現れた。マップに表示された武器屋の跡地で見つけたやつだ。ボウガンなのにマガジン式で、何発か連射ができるようになってる変わったやつ。某狩りゲームみたいだしっかりとグリップを握りしめる。ゲイツを睨んで細く息を吐い

た。――行く！

「これでも食らいなさい！」

素早くボウガンを構えて引き金を引いた。矢は真っ直ぐに飛んでゲイツの頬を掠める。

「……面白いですねえ。本当に私とやり合う気でしたか」

ゲイツはニヤリと笑った。ゆらりと身体を揺らしたかと思うとあたし目掛けて突進してくる。

「くっ……！」

あたしは矢をでたらめに連射した。けどその矢は全て外れるか、避けられた。

「そんな腕では私は仕留められませんよ！」

ゲイツがさらに速度を上げた。遠距離武器を使う相手には接近戦に持ち込む。ゲームと同じだ。

向こうもそれがわかってるみたいだ。狂った笑みを浮かべ、手に持った血塗れのナイフを振りかぶる。

……そう、やっぱりだ。遠距離武器相手には接近戦。それは現実でも同じだった。“ちゃんと接近戦を仕掛けてきてくれた”。ボウガンはあくまでも仕込み！ あたしに突進させて、本命をぶつけるための！

ナイフが届く距離まであと五歩、四、三、———かかった!!

ボウガンをしまって両手を前にかざした。頭の中のアイテム欄に一気にチェックを入れる。

「アイテム!!　まとめて取り出す!!」

あたしの視界が鋼色の壁に包まれる。——ここに来るまでに拾い集めた剣　31本、それをまとめてあたしの目の前に取り出した。

「【サイキクス!】」

さらに目の前の剣の切っ先を全てドイツに向けた。

「なっ——?!」

驚愕の声。ドイツが止まりきれずに剣に突っ込んだ。上がる血飛沫、剣の壁を突き破って来るのを反射的にかわす。

ドイツの身体が地面を滑った。

少し遅れ、激突の衝撃で弾き飛ばされた剣が盛大に音を立てて舗装された道路にぶつかる。

「や……やってくれましたね……」

震える声でドイツは言った。ふらふらと立ち上がりこちらを振り向く。

「うわ……」

思わず声を漏らしてしまう。ゲイツの右目に大きな傷が走り、潰れていた。身体中傷だらけで、血がボタボタ滴っている。

「ふ……ふふ、良い、良いですよ。貴女は美しい……恐怖に打ち勝ち、私にこれ程の傷を負わせたことは驚嘆に値します……」

ゲイツは嬉しそうに顔を歪めた。手に持っていたナイフがいつの間にか鋸に変わっている。

「是非とも……是非とも切り裂きたい！」

——頭の中で装備にチェックを入れた。

「装備変更！ フルアーマー！」

次の瞬間あたしの身体はぶかぶかの全身鎧に包まれていた。鋼の肩当てがゲイツの鋸を弾く。

「お願い！ 動いて！」

ゲイツの足元に散らばった剣の内一本、まだサイキクスの効果の切れていなかったやつを操る。それでゲイツの足に思い切り斬りつけてやった。

「ぐあああああっ！？」

崩れ落ちるゲイツ。あたしはすぐに鎧を解除してりゅう君の元へ走る。

「りゅう君！」

「も……こ……姉……?」

まだ生きてる！ 滑り込むようにりゅう君の身体に覆い被さった。お腹に空いた穴に意識がクラクラしたけどそこに手を当ててありったけの魔力を込める。

「お願い！【ヒール】」

手から光が溢れた。傷の周りがシュウシュウ音を立てると見る間に傷がふさがっていく。りゅう君の目も少し光が戻った。

「りゅう君！ 大丈夫？ 立てる？」

「お……う……。っ！ 後ろ！」

りゅう君の言葉に後ろを振り返る。ゲイツが投げナイフを構えていた。

「く！ もこ姉下がれ！」

「りゅう君邪魔！」

装備を変更してボウガンを取り出す。

あたしの前に回ろうとしたりゅう君を突き飛ばしてゲイツが投げたナイフを空中で射ち落とした。

りゅう君とゲイツが驚いたように目を見開いて弾かれたナイフを目で追う。

その間にゲイツに照準を合わせ、連射する。

「むうっ!？」

ほとんどが短剣で弾かれたけど一発がゲイツの肩に突き刺さった。ゲイツはそれを無理やり引き抜き、さらに凄絶な笑みを浮かべる。

「ふふ、なるほど、最初に矢を外したのは私の接近を誘うためのブラフでしたか……。ナイフを射ち落とすとは……見事な腕前です。まさかそこまでボウガンの扱いに長けていたとは」

あたしは内心で舌を出す。クロスボウの扱いなんて知るわけないでしょバーカ! あたし普通の高校生だよ!？ けどゲームで仕組みを知ってるとか必要ある? FPS(一人称ガンシューティング)でキルレート20越えるあたしを舐めんじゃないわよ! 心の中でやけくそで叫んだ。

ゲイツはくつくつと笑いながらまた立ち上がる。足を斬ったはずなのにまったく堪えた様子がない。なにこいつ? こいつもゾンビじゃないでしょうね……。

「……今日は敗けを認めましょうか。さすがにこの出血量、これ以上はこちらも無事では済まなそうです」

「……え?」

「では、ご機嫌よう」

ゲイツはそう言うにあたしたちに背を向ける。

……これ射つといった方がいいかしら? 捨て台詞の後だけどころの方が安心よね? ゲイツの後頭部に照準を合わせる。

その時、りゅう君があたしの前に立った。

「止めとけ……もこ姉。行かせた方がいい……」

りゅう君がゲイツから視線を反さず言った。ゲイツはそのまま足を引きずりながら歩いていき、やがて見えなくなった。

「……………」

「……………終わった？」

ゲイツが見えなくなったとたんいきなり足が身体を支えられなくなった。カクンと足が折れてしりもちをつく。

「も、もこ姉?! 大丈夫か?! どこかやられたのか?!」

「い、いや、別に……ん、あれ？」

立とうとしたけど全然立てない。え? 腰抜けた?

りゅう君が膝を付いてあたしの状態を確認するとキツとあたしを睨む。

「なんであんな無茶したんだよ! もう少して死んでたんだぞ!」

……無茶? もう少して死ぬところだった?

何を言ってるのこいつ? 思い切り自分のことじゃん。あたしが必死に使える武器を探してる間どれだけ心配したと……。

さっきまで心配してた分がそのまま怒りに変わってく。拳を握っ

た。

「ばかっ！」

「ぶっ?!」

ぶん殴った。

「思い切りこっちの台詞よばっ! あんたあと少し遅かったら死んでたんだよ! ? どんだけ心配したと思ってんのよばかあああっ!」

「ちょ! ? やめ……! グーはやめろグーは!」

両手首をがちり掴まれた。腕を広げられた状態で顔を見られる。

「わかった! わかったからもう止めろって!」

……こいつは全然わかってない。涙がぼろぼろ溢れてきた。

「うおっ?! ちょ?! 泣くなよ! ?」

おろおろし出すりゅう君。もう知らない。慌てるだけ慌てればいいんだ。ちょっと反省しろ。

声を上げてわんわん泣いてやった。おろおろしたままあたしをなだめようとなんか言ってる。

……本当は、謝ったりお礼したりしないといけないんだけど、それは後にしよう。今はたっぷり慌てさせてやる! 後悔させてやる! —もうこんな無茶しないように……ね。

六日目(7)

ああ、そういえば昔もこんなこと有ったっけ。

あたしがりゅう君に泣かされて、りゅう君はずっとおろおろしてて。

女の子に泣かれるのが苦手なのは変わってないね。

涙を拭く。大きく息を吸って、吐いてりゅう君を見上げた。

窓から見える大きな月をバックにりゅう君は頬をポリッと掻く。

あたしたちは元の宿屋の部屋に戻って来ていた。月明かりが部屋を青白く染めている。あたしはベッドに腰掛け、りゅう君は窓枠にもたれ掛かってあたしを見ていた。

「あゝ、その、落ち着いたか？」

「ん」

りゅう君の言葉にあたしは短く返事する。再び沈黙。いっぱい話したいことが有るのに言葉が見付からない。

……いや、言わなきゃいけないことは一つはっきりしてる。うん、これから言おう。言わなきゃ始まらない。

「りゅう君……今までありがとう。それと、ごめんなさい」

りゅう君は驚いたように顔を上げた。

「りゅう君、ここまですごく頑張ってたしのこと護ってくれたよね？ フィロちゃんを助けてくれて、半魚人から庇ってくれて、落ち込んでるあたしを氣遣ってくれて。本当に、本当にありがとう。すごく感謝してる」

「お、おう」

りゅう君の顔が赤くなった気がした。あはっ、照れてる照れてる。あたしはさらに続ける。

「それから、ごめんなさい。あたしはずっとりゅう君に頼りっぱなしだった。自分で頑張らないで、りゅう君に依存して、嫉妬して、八つ当たりして、ごめんなさい。りゅう君だっていきなりこんな世界に連れて来られたのに……本当にごめんなさい」

「べ、別に俺は気にしてないからいい……俺が好きでやったことだしな」

よし！ 言った！ 胸のつかえが取れた気分。思わずホッと息をつく。

りゅう君はあたしに背を向けるとポケットの中を探った。けど目的の物は見付からなかったらしい。りゅう君がこういう時に欲しがるのは……これかな？

「アイテム取り出す……と、りゅう君？」

「ん、ああ、サンキュ」

アイテムボックスに入れといった飴を投げ渡した。りゅう君はそれを受け取って口に放り込むとようやく人心地付いたみたいに表情を弛める。

「ねえ、りゅう君？」

「ん？」

「りゅう君、何か隠してるよね？」

りゅう君の身体が強張るのを感じた。視線が泳ぎ始める。……たぶん、ここで聞き逃したらもうちゃんと聞く機会は無くなる。なんだかそんな気がする。あたしはベッドを降りてそつとりゅう君の手を取った。

「もこ姉？」

「あたしに話せないこと？」

「それは……」

「あたしだって、ちゃんと謝ったんだよ？　女の子に言わせてりゅう君は黙ってるつもり？」

りゅう君は小さくため息をつくベッドの方に歩いて行って、深く腰掛けた。あたしもその隣に腰掛ける。

「……そうだな。話さないとな」

そう言うのとガントレットを外して、おもむろに学ランを脱ぎ始め

た。

学ランを脱いで現れたのは――鱗？

よく日焼けした筋肉質の身体にちりばめたように鱗が有った。指先で触れてみる……本物だ。

「黒竜の竜人。別名は【殺戮竜】今の俺の身体の種族名だ」

りゅう君はおもむろに言った。竜人？ 殺戮竜？

「種族としてはこの世界で最凶最悪。生まれついた時から破壊衝動の塊みたいな生物。見る物全て破壊し、殺し尽くす。大昔に、本来敵対してる人間と魔族が手を組んでまで滅ぼした種族……だとさ」

破壊……衝動？ それって……もしかしてあたしがゾンビに襲われた時の……。

「勘のいいもこ姉なら察しは付いただろ？ 俺もその破壊衝動ってのを持ってる。現に一度、本当にもこ姉を殺しそうになった。……だからゲイツと戦った時、もこ姉から離れようとした」

そうか……だから、だからあの時りゅう君はあたしを……

「け、けど！ 別に今までは平気だったじゃない！」

「それは……」『スキルの“過守護”が働いてたからだよ』

この声？！ そう思った瞬間いきなり後ろからマキナに抱きつかれた……ってちょ？！ 胸触るな！？ 揉むなつねるな引っ張るな？！？！

『ふんふん、普乳っと。良かったねりゅう君、これならいろいろ挟んだりとかできそうだよ』

「な、何を言ってるのよあんたは?!」

『だってだって、こういうのって男の夢なんでしょ? できるかできないかでプレイも全然変わるし』

こいつ何を言ってるの?! ……チラリとりゅう君を見してみる。全く無反応。変な気を起こされるよりはいいけどなんか複雑だ……。

りゅう君はマキナを睨んだまま微動だにしない。

「何しに来た?」

『もこちゃんに“過守護”の説明をね。りゅう君話せないでしょ?』

マキナがそう言うとりゅう君は黙った。

過守護? たしかりゅう君のスキル……効果は【守護対象を護るのに特化する】だけ?

マキナはふわふわ空を飛んであたしたちの正面に回るとパチンと指を鳴らした。マキナの周りに黄色っぽい球形の空間ができた。なにこれ? バリアみたいなもの?

『過守護って言うのはランク…A++の防御系スキル最高峰の一つ。平たく言っちゃうと護りたい人の最高至高のボディガードになれるスキルかな? ちなみに今私の周りに有るのは視認できるようにした過守護領域ね』

「……ボディーガード？ 過守護領域？」

『そ、行動や思考速度の加速とか痛みの緩和、判断力向上とか効果はいろいろ有るけど、目玉はこの過守護領域。“守護対象に迫るありとあらゆる脅威を無効化する結果を展開する”って能力。使用者の心の強さ次第だけど、脅威であればそれが剣だろうが毒ガスだろうがウイルスだろうが隕石だろうが、果ては敵意や殺意まで無効化しちゃうチートスキル。それが過守護だよ。』

ちなみに私も普段は似たようなのを常時展開して周りから敵意を向けられにくくしてるの。ボーナスあげに行く度に攻撃されちゃかなわないしね。実際ももちろん私も私に敵意向けにくいでしょ？』

——そういえば。

最初にこの白いマキナに会った時も今も、あんなことが有った直後なのにこいつを憎めない。子供のイタズラみたいな感じで心が済ましてしまっている。これが過守護領域の効果ってこと？

……殺戮竜の破壊衝動と、あらゆる脅威を無効化する過守護……それってつまり……

「りゅう君の破壊衝動を過守護が打ち消してるってこと？」

そう言うとマキナは驚いた顔をした後、普通の子供みたいに表情を輝かせた。

『正解正解！ その通り♪ さっすがゲーム脳は理解が早い！
そこにシビれる！ 憧れるう♪』

「なんでここでジョ○ヨネタ？！」

『なんとなく！ いや、そのツツコミ嬉しいな、ってマキナはマキナは感動に涙ぐんでみたり』

「……あんだ、オタ？」

『YES！』

そう言っマキナは親指を立ててスツゴいい顔でサムズアップ。

まさかオタな神さまなんて……って馬鹿あたし！ なんてちょっと親近感感じてるのよ！？ こいつに何をされたか忘れたの！？ こ、これも過守護の効果……？ なんて恐ろしい……。

『うあ、なんかもこちゃんのこと好きになってきたかも。うん、やっぱり主人公の隣にはヒロインがいないとね。ちなみにちなみにこちゃんは戦うヒロインと護られるヒロインならどっちが好き？』

「え？ あ、戦うヒロイン……かな？」

『だよねだよね、やっぱりヒロインだって頑張らないとね。戦場で育まれる愛ともうクッッてなるよね？』

「ん……まあそれは同感ね。あたし的には特に——」

「……話進めてくれないか？」

りゅう君が呆れ顔で言った。あ……しまった。マキナはケラケラと笑う。

『ごめんごめん。っと、もちやんの言った通り、りゅう君の破壊衝動は過守護のスキルが封じてるの。いや、最初はさすがの私も驚いたよ。』

ラスボス的なキャラとして殺戮竜の身体に、特に潜在能力高かった人の魂放り込んだら固有スキルで自分を封じちゃったもん。

とはいえ黒竜の竜人としての心の根幹を占める破壊衝動と力を封じちゃったリスクはけっこうあったんだけどね。根っこが変われば枝も変わる。もちちゃんも気付いてない？ りゅう君の変なところ』

……変なところって言われたら変なところだらけだ。いきなり胸わしづかみにされたり、全然怪我を気にしなかったりやたら冷静だったり。

『破壊衝動と力を封じた影響でりゅう君の心、感情、記憶、欲望なんかも影響がでてるのよ。特に性欲関係は過守護の元々の性質もあってほぼ消えてるわ』

りゅう君の方をみる。……………なるほど、思い当たる節は多々あるわね…………。

『ま、結果完成したのが殺戮竜の破壊衝動と力を封じ込めちゃって、封じ込めるのに過守護の全能力を使ったうえに心まで変に歪んじゃった、特に何の能力も特徴もない普通の人間のりゅう君ね』

「…………けど」

りゅう君が静かに言った。マキナとは打って変わって真剣な表情だ。

「頭に血が昇った時、破壊衝動を抑えきれなくなっただ……。もう少しでも姉を殺しそうに……だから俺はも姉から離れよう……」

『それ、やめた方がいいよ』

「……なに？」

『今、りゅう君の最優先守護対象はもちゃんでしょ？ そのもこちゃんが近くにいるからこそ過守護が最大限効果を発揮して破壊衝動を封じられてるの。リアルな話、離ればなれになったら一週間も持たずに破壊衝動が勝っちゃうよ』

啞然とするりゅう君。けど、ぶっちゃけあたしはそれほど応えなかった。むしろおかげで楽に決心できる。道が一つなら迷うこともない。

りゅう君の手を取って、反論できないぐらいにっこり笑いかけてやる。

「それじゃ改めて、よろしくねりゅう君」

「は？　ちょ？　もこ姉っ?!」

勝手にどっか行かせてたまるもんか。あたしやっぱりメンタル弱いんだよ？　友達もないしゲームも無いこの世界、その中で再開できたとっても大切な人。絶対離してやるもんか。

『おおっ！　ナイスプレイもこちゃん！』

マキナは子供みたいに嬉しそうに言った。こいつに敵意を持たないのはやっぱりこいつのスキルの影響なのかな？

けど、こいつがりゅう君のことを好きっていうのは伝わってくる。どういう好きかはわからないけど……少なくともこいつはりゅう君が不利になる嘘は言わない。と思う。たぶん。

——ん？

突然、マキナの頭上の空間が割れた。そこからぬうっと、子供の身体ぐらいの刃が付いた大斧が現れた。

「え？　ちょ？　え？　なに？」

『ん？　もこちゃんどうし……ひでぶっ?!』

大斧がマキナの後頭部に振り下ろされた。頭に斧が刺さったままうつ伏せにばったりと倒れるマキナ。白い髪が血で赤く染まっている、手足がピクピク震えている。——え？　いや、ちょ!？　な、なんかマジで死にかけてる？

するとさっきの空間の割れ目から青い髪と青いドレスを着た、別のマキナが出てきた。

あたしたちの方を見てぺこりとお辞儀すると白いマキナの方に視線を落とす。

『白マキナ、個人への干渉とルール違反多すぎ、みんなで裁判してお仕置きする』

青いマキナはそう言う白いマキナの足をむんずと掴み、自分が出てきた空間の割れ目の中に放り投げた。

『竜斗さんともこさん、お騒がせしました』

青いマキナはもう一度ぺこりとあたしたちに頭を下げるとフツと消えてしまった。

あとに残されたあたしとりゅう君。……えーつと………うん。あはは……とりあえず休もうか。うん。

おまけ マキナ裁判

黒マキナ『静粛に、静粛に、それじゃこれから白マキナちゃんへのお仕置き魔女裁判始まるよっ』

白マキナ『意義あり！ お仕置き魔女裁判って無罪にする気無しですか黒ちゃん！？』

黒マキナ『うん。それじゃ証人の赤マキナさん証言を』

赤マキナ『さらとうんって言ったね黒マキナ……。えーと、白マキナは神埼竜斗と浅倉もこに過剰な干渉をし、勝手に時間操作した上に私の担当する試練に勝手に大量にゾンビとか配置しました。：：：とかあたしのお気に入りだったPCがゾンビに殺されたんだけどどうしてくれるの？』

白マキナ『カツとなってやった。反省はしているが後悔はしていない』

赤マキナ『……黒マキナ裁判官、こいつ極刑にしてください』

黒マキナ『了解』

白マキナ『あ？！ うそうそごめんなさい！ ちょっとふざけただけ！ み、緑マキナ助けて！』

緑マキナ『……私のお気に入りだった女の子、あなたが放ったゾン

ビ30人ぐらいに輪されて狂い死にしたの……』

白マキナ『本っ当にごめんなさい!』

青マキナ『反省、してる? 悪かったって、認める?』

白マキナ『み、認めたく無いものだな。若さ故の過ちというのは……』

黒マキナ『とりあえず有罪でいいよね?』

一同『意義無し』

白マキナ『わー!?!? だ、だから冗談だって!?!? 場の空気を明るくしようとしただけだって!』

黒マキナ『どんな罰を与えようか?』

赤マキナ『火山の火口に放り込むのは?』

青マキナ『重しつけて、海溝に沈める』

緑マキナ『魔界の触手植物使って監禁凌辱調教一週間のあと、身体中に冬獣夏草の菌糸を寄生させてキノコにするのがいいと思うわ……』

白マキナ『みんなひどっ?! とうるか緑マキナが怖い!?!?』

黒マキナ『んゝ、それじゃ火口↓深海↓魔界植物の順番でやるってことでいいかな?』

一同『意義無し』

白マキナ『誰か意義唱えてよ!?　　というか全部やるの?!』

黒マキナ『あ、そういえば意義有る』

白マキナ『黒ちゃん……!』

黒マキナ『私がまだお仕置き決めてなかった。足の爪先から一分間に1cmずつ切断していくのはどうかしら?』

白マキナ『お前ら人間じゃねえ!』

赤マキナ『さくて、それじゃさっそくお仕置きしようか』

青マキナ『緑……そっち、押さえて』

緑マキナ『わかったわ』

白マキナ『ま、待った!　　ちょっと待った!　　少なくとも緑マキナのをやったら管理人っていう最高神のお仕置きが……』

青マキナ『ならノクターンでやる。大丈夫』

白マキナ『だ、大丈夫じゃない。大問題だ!』

緑マキナ『お気に入りの仇をとるのです……』

白マキナ『う……うう、まさかエル○ヤダイカウンターが来るとは……』

黄マキナ 『こんちは、まだ裁判やってるかな？』

白マキナ 『あ！ 黄マキナ！ 助けて！』

紫マキナ 『うふふふ、私のお気に入りに、ゾンビに食い殺されちゃったんだ、だからちよっとお仕置きをね』

白マキナ 『オワタ（＾Ｏ＾）／』

おまけ マキナ裁判（後書き）

実はこれでこの小説の一章終わりだったりするんだぜ……。

はい、という訳で次回からは二章になります。少し中途半端な気もするけど二章です。

一章はけっこうダークな感じでしたけど二章からは少し明るくなるかな？ とりあえずもちゃんのヘタレモードは終わります。

で、こっからが本題ですが二章入る前に一週間ほど更新をお休みさせてもらいます m () m

この前風邪をひいた影響で書き貯めてた分が無くなっちゃった上に、今も少し体力が低下してて夜更かしして書くのが厳しくなっちゃいます f (^ ^ ;

とりあえずもうすぐお盆休みに突入するので、一気に書き貯めて念入りに推敲したいと思います。という訳でご理解とご協力お願いします m () m

それでは皆様、一週間後にまたノシ

七日目——小休止な一日（前書き）

待たせたな！！

というわけで一週間ぶりの更新です。

お盆休みのおかげでゆっくり休めましたし体調も万全です！
書きための方もそこそこ……では行きます！

前回までのあらすじ…2回目の試練から帰ってきました。
もこちゃんへタレ卒業／（＾Ｏ＾）／

七日目——小休止な一日

六日目のあのあとは、あたしとりゅう君はほとんど一日中寝て過ごした。

りゅう君は試練で受けたダメージがキツかったから。あたしの方は久しぶりに走り回って筋肉痛でしばらく寝込んでただけど……たぶんだけどゲーム脳の効果で宿屋でしばらく寝ると体力も魔力も全回復するみたいなのよね。だからりゅう君を回復しては寝て、回復しては寝て、を繰り返して一日過ぎたってわけ。

——ちなみに恋ちゃんも試練やって、PKとも闘ったらしいけどぴんぴんしてた。おまけにオオイグっていう移動用の動物と、これからの旅で必要になるものも買い揃えてくれた。あのちっちゃい体のどこにあんな体力有るんだろ……。

ただ、あたし達に必要な物を買って無かったから、りゅう君を留守番させてあらためてあたし、フィロちゃん、恋ちゃんの三人で町に繰り出すことになった。

「……どうも周りの視線が気になるわね……」

あたし達は町の商業地区を三人で歩いていた。

この辺りはかなり賑やかだ。雑貨屋やら食べ物系のお店、さらに露店や路上販売なんかがあちこちでやって、その分人もやたら多い。その中ですれ違う人（特に男）がかなりの確率であたし達の方を振り返ってる。

なんかあたし達かなり目立ってるみたい。……まあ当然よね。

チラリと後ろを振り返る。

フィロちゃんは狼人族ってことで余計なトラブルを招かないようにフードと上着で犬耳やしっぽを隠している。けどフードから覗く顔はやっぱりかわいい。人混みに緊張してる姿はもう抱きしめたくなってくる。

そしてそれとは対照的に下駄をカラン　コロンと鳴らしながら堂々と歩く恋ちゃん。他の人とは違う東洋系の顔立ちにさらっさらの長い髪、おまけに着物で下駄となると目立つなって方が無理だ。

「ん？　どうしたのじゃ浅倉？　わしの顔に何か付いておるか？」

「あ、いや、二人ともかわいいからやっぱり目立つなく、なんて」

そう言う恋ちゃんは「かわいい……複雑な気分じゃのう」とため息つきながら目を細めてあたしを見る。

「確かにわしらも目立っておるが、一番目立っておるのはおぬしじやぞ？」

「へ？」

「人の視線や気を読むのには慣れておるから間違いない」

いやいや？　なんであたしよ？　明らかにフィロちゃんと恋ちゃんの方が目立つ要素満点でしょ？

「もこさん、女の私から見てもかわいいですからね。ひそひそ周りで話されてますよ？」

フィロちゃんの耳がフードの中でピクピク動いた。

う、噂？　え？　え〜と……あ、そっか……今はあたしもかわいくなってるんだっけ？　そう言われればさっきから視線が……きやつ？！

よそ見してたら誰かにぶつかってしまった。

まずい、謝らない……と？

「大丈夫ですか？　お嬢さん」

目の前にいたのは金髪巻き毛の超イケメンだった。カチンと身体が硬直した。

「申し訳ない。あなたのあまりの美しさについて見とれてしまいました。……よろしければお詫びをさせていただきませんか？　近くにいい喫茶店が有るんですよ」

え……？　あの？　え……？　ちょ、これナンパされてる？　え？　いや、ちょ、待つ……

思考が停止。なんか顔が熱い。耳まで真っ赤だよ。こちらら男慣

れてないんだよ。オタク舐めんな。高校入ってから数えるぐらいしか男子と喋ったこと無いんだよ。

助けてフィロちゃんー！ 恋ちゃんー！

口パクでSOS。恋ちゃんとフィロちゃんが顔を見合わせる。フィロちゃんが慌てたように手と首を振ると、恋ちゃんがやれやれとといった感じでまたため息をついた。テテテと小走りに走ってきてピヨンとあたしの肩に抱き付く。

「おねーちゃん♪ 早く行かなくていいの？ 彼氏待たせちゃうよ？」

かなりビックリした。恋ちゃんは天使みたいな笑顔であたしにしがみついてる。や、やば……可愛すぎ……は、鼻血出そう……。

「彼氏持ち……か」

さっきのイケメンはいきなり興味を無くした顔になった。そのまま恋ちゃんに手を引かれていったん人混みを脱出して路地裏へ。ホッと息をつくと後頭部を恋ちゃんに小突かれた。

「まったく、あれぐらい一人でさばけるようにならんか」

「ご、ごめん。ありがとね？ あんな演技恥ずかしくなかった？」

「この程度のことを恥ずかしいと思うほど未熟でもないわい。むしろ恥ずかしくて弟子の友人を護れん方が恥ずかしい」

地面に着地して「ふんっ」と胸を張る恋ちゃん。なんつうか男前よねこの子。

「……そういえばまだ何を買に行くか聞いてなかったのう。いったい何を買うんじゃ？　わざわざ神埼を留守番させて」

「下着とナプキンとかね」

……………。

ん？　なにこの間。

「……すまん、なんと言った？」

「だから下着類と生理用のナプキン。ちゃんと買っとかないと困るでしょ？」

こっちの世界にも元の世界みたいな生理用品や下着類は有るみたい。マキナも女の子だしそこは気を効かせたのかな？

——ん？　なんか恋ちゃんの表情が凍りついてる？

「私なんか奴隷商の砦を脱出するときのゴタゴタで下着　着けて来れなくて……突然吹いてくる突風がすごく怖かったです……」

フィロちゃんが乾いた笑い声を上げた。恋ちゃんが盛大に吹き出した。

「な？！　つ、つつつまりおぬしは今、はいて……、あ、いや、すまぬ、何でもない」

どうしたんだろ？　なんかいきなり様子が変わったけど……？
慌てすぎてむせて咳き込みだした恋ちゃんの背中を擦りながら顔を見る。なんか赤い。んー、まあいいか。

「あたしももうすぐあれの日だったからナプキン買えそうで安心したよ……。下半身血まみれとかになったら本当に泣くしかないし」

「あ、それじゃ生理痛のお薬も買いに行きましようか。よく効くお薬知ってますよ？」

「ほんと？　よかったー。あたしけっこう重い方だから薬無いとけっこうキツイのよね。……あれ？　恋ちゃん？」

恋ちゃんは顔を真っ赤にしたまま口をパクパクさせていた。

……ははーん、わかった。さてはこういう話が恥ずかしいのね。やっぱりこちら辺は子供だなあ。――ちよっと苛め……じゃなくて、お姉さんとしていろいろ教えてあげないとね。うん。

恋ちゃんの耳元に口を寄せる。

「恋ちゃんって生理まだ？」

「ブッ?!」

「その反応はまだかな。んー、けど旅してる間に来るかもしれないし、一応恋ちゃんの分も買っときましようか。ナプキンの使い方とか知ってる？」

「し、ししし知っているわけ無かろうがそんなもの！」

言った後で恋ちゃんはハッと口をつぐんだ。墓穴を掘ったって感

じの顔だ。なんかこうやって恋ちゃんいじるの楽しいかも。あ、いやいや、あくまでも恋ちゃんのために教えてあげようとしてるだけだからね？

「そっか、それじゃ今度教えてあげるね？」

「い、いらんわ！ わしは……」

「そうだ。恋ちゃんの下着も買つとかないとね。ブラも……一応買つときましようか。着物の上からだと大きさわからないしお店の人に測ってもらいましょうね？」

「だ、だからいらんと……」 「ダメだよ。ちゃんと付けとかないと形が崩れるって言うしあまり激しく動くと見えちゃうよ」

「せっかくですからレンさんの洋服も買いましょうか？ 着物だけじゃないかと不便ですしね」

「フィロちゃんナイスアイデア。せっかくだからうんとかわいいの選んであげよ♪」

——逃げ出そうとした恋ちゃんを後ろから捕まえる。ふふ、いくら強いつて言っても子供だし、力はあたしの方が上ね。

「は、はなさぬか！」

「だゝめ！ これから長旅になりそうだしちゃんと準備しないと。さ、行こ」

そのまま恋ちゃんを抱っこしながら歩いていく。最初は……下着

売ってるお店から行きましようか。

「わ、わしは何をしたああああっ!!」

恋ちゃんの叫びが辺りに響き渡った。

八日目

side 神埼 竜斗

——速い。広大な平原の風景がどんどん後ろに流れていく。

昨日の昼に町を出て丸一日、俺達はオオイグの背に乗ってフィロの故郷目指して移動していた。オオイグってどんな生き物かと思っただが……なんのことは無い、超巨大オオイグアナもどきだ。

俺達四人が余裕で乗れるぐらいの大きさ、背中は平べったくて乗りやすく、しかもあまり揺れない上に速い。おまけに大人しくて頭もいいとまさに乗り物になるために産まれたような……いや、たぶんそのために産まれたんだろう動物だ。

俺はオオイグの背中に取り付けた座椅子の上でそんなことを考えていた。フィロは頭に近い部分で手綱を握っている。元々オオイグに乗るのが好きだったらしくて、気分が良いのかしっばがパタパタ揺れっぱなしだ。さっきまでは鼻歌まで歌っていたんだけど俺がそれを言ったら恥ずかしがって黙ってしまった。

上手かったのに……悪いことしたか？

もこ姉の方はなんか意識が朦朧としてる。どうも爬虫類が駄目だったらしくて、オオイグとの初対面では卒倒しかけていた。——そういうば子供の頃聞いた覚えが有るな、たしか寝てる時にヤモリが背中に入ってきて、そのまま寝返りをうってグチャツってなったのがトラウマって。爬虫類……竜人の俺は大丈夫……だよな？

——で、師匠は……。

「のう……、神埼、わしは……こんなキャラじゃったか……？」

なんか俺の隣で体育座りでいじけてる。昨日、もこ姉たちと一緒に買い物に行って帰ってきてからずっとこんな感じだ。（ちなみに帰ってきた時は白と黒を基調にしたゴスロリファッションだった）

「あの手の話を聞いただけでやたら恥ずかしくなるは、ひらひらした服を着せられて……その……、ほんの少しかわいらしいと思うわ……、のう？　わしってこんなキャラじゃったか？」

「いや、知らないっすけど少なくとも自分のキャラで悩む人ではなかったと思います」

そう答えると師匠は深くため息をついた。暗い顔でオオイグの背中に『の』の字を書き続ける姿はまるで普通の女の子みたいだ。

少なくとも元の世界にいた時の、毎日俺をしごいていた姿とは重ならない。

「もしかしたら……、体に合わせて心が変化していつてるのかのう……」

そう呟いて師匠はぐったりとうなだれた。

体に合わせて心が変化する……？　確かにそれは有るのかも知れない。俺の方も竜人の体になって破壊衝動とかとんでもないものを持つようになったし、肉……とりわけ生に近いレア肉が以前より好きになった。

人間の男女だけでもホルモンバランスとかでかなり違いが有るらしいし、元の世界と違う体になるとやっぱりいろいろ有りそうだ。

……だとしたら、もし人間以外の体にされたプレイヤーがいたら、そいつはどうなるんだろうか？　——ん？

突然、オオイグの速度が落ち始めた。まるで体の筋肉が硬直するように動きが固くなっていく。みるみる内にそれは酷くなり、やがて止まってしまった。

「フィロ、どうした？」

オオイグを操っていたフィロに声をかける。フィロも何が起きたのかわかっていないようでわたわたと慌てていた。

「わかりません。いきなり……おかしいですね」

フィロはペシペシとオオイグに鞭を打つ。しかしオオイグは微動だにしない。

その時、ふと周りの空気が変わるのを感じた。何か空気が重く、冷たく感じる。ゾワリと鳥肌が立った。

「あは♪ 四人も来た♪」

後ろでもこ姉の妙に明るい声がした。振り返るとそこには嬉々とした表情のもこ姉。さっきまでの憂鬱な顔はどこえやら、大好物を前にした子供みたいな表情をしている。

「もこ姉？」

「ふんふんふん♪ ひっさしぶりのご飯♪」

もこ姉は鼻歌混じりにいじけている師匠に近付くとその肩に手を置いた。

「……浅倉？」

「いただきます♪」

もこ姉が師匠に襲い掛かった。

「んな?! 浅倉何を……むぐっ?! っ?!?!」

……あ……なんだったかなこれ……。

——以前マキナに聞いた話だと、過守護が破壊衝動を抑えた関係で幾つかの欲求や知識が巻き添えみたいな感じで抑えられて忘れてるらしい。……けどこれは少し覚えてる。たしか……ディープキスってやつだ。

「むぐっ?!? ん、ん、んんん!!?!」

うわあ、舌入ってる。あれ絶対苦しいだろ。師匠必死にもがいてるし。

けどもこ姉はがっちり師匠を捕まえたまま、師匠の唇を塞いでいた。繋がった唇からピチャピチャと水っぽい音が聞こえる。

しばらくすると師匠の抵抗がやんだ。動かなくなった師匠の唇を貪るともこ姉は手を離す。師匠はその場にヘタリこんでしまった。

「あゝ、おいしかったゝ。つ・ぎ・は……」

視線がフィロの方に向かう。あっけにとられていたフィロは「ふあっ?!」とすつとんきょうな声を上げた。

「うっふふゝ♪ おいしそゝ♪」

今度はフィロに襲い掛かる。んゝ、あゝ、たしかキスってのは愛情表現の一つみたいなんだったよな？ 要はスキンシップだよな？ じゃあほつといていいか、仲が良いことは悪いことじゃないし。

「ちょ!？ もこさ……ん、んんっ」

さて、それはそうとなんでオオイグが止まったかだよな。

おゝい、ちゃんと動いてくれよ？ 歩きとかごめんだぞ？

「だ、ダメですよもこさ……むぐっ！ わ、私たち女の子同士で……は、んあ……」

「よいではないかよいではないかゝ♪ けっこう反応してるくせにゝ♪」

後ろでもこ姉とフィロが取っ組み合ってる。仲良いなあホントに。俺ももこ姉とあれぐらい仲良くなれたらいいんだが……いや、さすがにあれは引くか。

「だ……だめえ」

「うふふ、いただきますゝす」

つと、だからなんでオオイグが動かなくなったかだ。
腹が減ってるのか……いや、フィロがちゃんと食わしてたよな。
……そういや止まる時、なんか足が痙攣して金縛りになったみたい
に止まった。もしかしたらモンスターの攻撃かも……。

「師匠はどう思います?」

そう言ってさっきからへたりこんだままの師匠の方を見る。けど
無反応。

「師匠?」

肩を叩く。するとなんの抵抗もなく師匠の体がパタンと倒れた。
目に光が無い。

「――は?」

フィロの方を見る。もこ姉の腕の中でへたりこんでいた。師匠と
同じように目に光が無くなっている。

もこ姉は口をモグモグさせながら俺の方を見た。

「ムグムグ、さてさて、あとはお兄さんだけだね」

――お兄さん?

昔から、周りからは大抵 俺の方が年上に見られてたけど実際はも
こ姉のが年上だ。もこ姉の方も年下に見られるのを気にしてたらし
く、俺にもこ“姉”って呼ぶように強制してきたぐらいだ。

そのもこ姉が俺を「お兄さん」なんて呼ぶわけがない。

「お前……誰だ?」

「おろ。気付かれた？」

もこ姉の姿をした誰かは面倒くさそうに頭をかいた。

「ん〜とね〜、お兄さんたちもプレイヤーだよね？ 私 幽霊になったプレイヤーなの」

「……はあ？」

「いやだから幽霊よ幽霊。今はこの子の体に憑依してるってわけ」

「いや、わけって言われてもわけわからないからな？」

「あ〜、説明めんどくさいし、見せるわ」

そう言うともこ姉の体から何かが……いや、何かじゃなくて……人魂だ。青白い火の玉がもこ姉の背中辺りから出てきた。あ〜、え〜と、俺、幽霊とか信じてなかったんだがまさかこんな形でご対面するとは思わなかったぞ？

「と、言うわけで私 今は幽霊なわけで、魂がご飯みたいなもので食べないと死んじゃうわけで、ああもう死んでるのか……とにかくお兄さんの魂食べさせてよ〜」

人魂はふわふわ揺れながらもこ姉の体に戻っていく。

「魂食べないと消えちゃうわけよ。だからお願いお兄さんの魂食べさせて？ 一口だけ、いや舐めるだけでいいからお願い！ 同じプレイヤーのよしみで！」

もこ姉の体にとりついた幽霊……一応プレイヤーか。パチンと顔の前で手を合わせてペコペコ頭を下げている。

「……師匠とフィロの魂も食ったのか？」

「うん。そだよ」

「二人はどうなる？」

「魂一口食べただけだから、少ししたら回復するし後遺症もないよ。十人ぐらい食べたけどみんな大丈夫だったから」

小さくため息一つ。まあ……後遺症もなんもないなら少しくらいはいいか。同じプレイヤーのよしみ……いや、似た境遇のよしみだ。今までとまったく違う体に放り込まれて、まったく違う体のルールに縛られてる。その気持ちはとてもよくわかる。

「わかった。いいぞ」

「本当に!？ うっわあありがとう♪じゃあちよつと屈んで、口移しじゃないと魂食べれないの」

「んと……こうか？」

言われた通りに少し屈む。顔が近い。……あれ？　なんだ？　なんか胸が……ドキドキする。

「そうそう、そんなじゃいくよ。変な気起こしちゃだめだよ？」

「変な気ってなんだよ？」

「またまた、わかってるくせに、それじゃいただきます♪」

――その夜

「りゅう君のばかああああっ!!」

鉄拳が飛んでくる。ちょ?! なんで俺こんなぶちギレられてるんだ!? 痛っ!? 痛い! や、やめ!

「よ、よりによってあたしの、……しかもディー……うあああああん!! 変態変態変態っ!!」

「い、いい加減にしてくれ!」

もこ姉の両手首を掴んで動きを止めた。自然と顔が近くなる。今度のもこ姉の顔が一気に真っ赤になった。

「ア、アアアイテム取り出す! おっきな石!」

――次の瞬間、もこ姉が俺の頭上に取り出した大きな石が脳天に直撃した。視界に舞い散る星。目の前が真っ暗になった。

八日目(1. 5)

side ファイロ

いろいろととんでもない目に合いました……。まさかもこさんが亡霊にとり憑かれてあんなことになるなんて……。

——いえ、それはまだいいんです。みんな無事だったし過ぎたことです。……ファーストキスっていうのは少しシヨックではありませんけど、女の子同士でしたしあんな状況でしたからリュウトさんもノーカウントにしてくれるでしょう。

問題なのは亡霊にとりつかれたもこさんに、リュウトさんが自分から魂を食べさせたようだということです。

魂を食べられた時の記憶は朦朧気だけど、リュウトさんがもこさんに憑いた亡霊と話してて、自分から吸魂……。もこさんのキスを受け入れたように見えました。

一歩間違えば死んでたかもしれないのになんでそんな……。

——もこさんが奴隷商に捕まっていた時、リュウトさんは危険を省みず助けに来たんですね。その後も水妖から身を挺してもこさんを護ったり、それでもずっともこさんのこと気遣ってたり、ただの幼なじみのためにそこまでできるでしょうか……？

……まさかりユウトさん、もこさんのことが……。

そ、そういえばもこさんも、私とリュウトさんが話してるとよくチラチラこっちを見てきますよね。今思い返してみると好きな人が他の人と話すのを気にするように見えなくなかった気が……。

三日前は突然いなくなったと思ったら一晩同じ部屋で過ごしてたみたいで……おまけに二人共やけに疲れ果ててましたし汗臭かったし……、ま、まさか……まさか……！ あわわわわ！？

「どしたのフィロちゃん？　なんか悩み事？」

「ひゃい?!」

あ……あうう、変な声出ちゃいましたよ。もこさんが私の顔を覗き込んできてる。

「悩み事なら何でも相談してね？　話聞くから」

「は……はい」

相談……ですか。……一人で悩んでるより……ちゃんと聞いた方がいいかもしれませんね……。

……でもこれでもこさんと喧嘩したりしたくないし………いえ、隠しごとするのはもっと悪いですよ。お父さんも友達には隠しごとはいけないって言ってました。深呼吸。もこさんの目を見る。

「もこさんはリュウトさんのこと好きなんですか？」

……少しストレート過ぎましたか。もこさん目が点になってる…

…。

「え？　ちょ、な、なんでそんな話になってんの？　この間も言ったでしょ？　あいつとあたしはただの幼なじみだって」

「ただの幼なじみ……ですか」

もこさんならやっぱりそう答えますよね。これがもこさんが教えてくれたツンデレってやつでしょうか？　……真相を確かめるにはもっと踏み込まないといけませんか……。仕方ありません。恥ずかしいですけど……。

「少し耳貸してくれませんか？」

「え？　こ、こう？」

他の人が聞いてないかを確認。無言詠唱で音漏れ遮断の陣も展開。もこさんに近付いてそつと耳打ちした。

「実は私……もうすぐ発情期なんです……」

「……………は？」

「私たち狼人族は年に数回発情期が有って……その間は……その……、Hなことをすごくしたくなるんです」

もこさんの顔が赤くなっていく。聞こえてくる心臓の音がすごく早くなった。私のほっぺたも熱いです……。

「ふ、普段なら魔法薬で抑えるんですけど、今はそれが無いから……

…あ、いえ……それでも我慢できるとは思いますが、万が一、万が一ですよ？　その、もしかしたら我慢できなくなって……その時はリュウトさんと……」　「そんなの絶対だめえっ！！」

……予想以上の反応ですね。もこさんはあわてて口元を抑える。けどこれで確信が持てました。

「やっぱり……もこさんもリュウトさんが好きなんですね……」

「は？！　ちょ？！　ち、ちが……！　あたしが好きなのは……」

「隠さなくてもいいですよ。……私もリュウトさんが好きです。愛しています」

ガーンと効果音が鳴りそうな程ショックな顔したもこさん。やっぱりショックですよ、友達がライバルなんて……でも、これだけは譲りません！

「もちろん何があるとうとうという結果になろうと私はもこさんの友達でいたいと思ってます。……でもこの恋は譲る気はありません！　ですから、これからは友達でありライバルです！」

「いや！？　だからあたしは……！」

「それでは、正々堂々よろしくお願いします！」

もこさんに背を向けて歩き出す。な、なんかついカッとしている。いろいろ言っちゃった気もしますが……大丈夫ですよ？

とにかく発情期が近いのは確かですし、どうしよう……。さ、

さすがに本当にしちゃうのはちょっと……その、やっぱりちゃんとお付き合いしてからというか……、最初は痛いっていうし怖いですし……。

けどもこさんってライバルがいる以上、うかうかしてられませんし……。

あれ？　　そういえば竜人にも発情期ってあるはずですよ？　　亜人や獣人はみんな発情期が有るって聞いたことがあります。

で、発情期があるとすれば赤い月が昇る日の前後、私と同じ時期のはずですよ？

……どうしよう、ドキドキしてきました……。

と、とにかく頑張りましょ「おおフィロ、神埼を知らんか？」

——レンさんがやって来た。

肩には白い手拭いをかけ、キヨロキヨロと周りを見回している。

「かんざき……ああ、リュウトさんのことですね。知りませんよ」

「そうか……どこ行っただんじゃあいつ、一緒に水浴びでもしようと思っただのじゃが……」

「……一緒にですか？」

「うむ、髪も解かしたいのじゃがこの髪を解かすのが一人じゃなかなか大変でう。綺麗でなかなか気に入ってやるから切りたくはないしの」

レンさんは自分の髪をご機嫌で撫でる。本当にさらさらして綺麗……。レンさんって少し男っぽい気がしますけどこういうところはやっぱり女の子ですね。……って、い、一緒に？——ま、まあレンさんまだ子供ですしね。あはは……。

「なら私と一緒に水浴びしましょうか」

「え、遠慮する！ 神埼と行く！」

あれ？　なんで私とだとこんな必死に？　普通逆じゃないですか？

「けど恥ずかしくありません？　そろそろまずい気がしますけど……」

「……別に恥ずかしくなどない」

……なんかお兄さんになついた妹みたいです。

「うふふふ」

「な、なんじゃ？」

「あ、すいません。なんだかやっぱりレンさんも子供なんだなくて」

レンさんが少しムツとした顔をした。ちよつとまずかったですかね？　これぐらいの女の子って子供扱いされるの嫌がりますし。

「し、失礼な！　誰が子供じゃ誰が！」

ああ、案の定ですね。けどなんかかわいいです。

「ごめんなさい、けど子供でいれる期間ってすごく貴重なんですよ、ですから……」

「じゃ、じゃから子供扱いするでない！　わしの方がおぬしらなどよりよっぽど大人じゃ！」

「はいはい、ごめんなさいごめんなさい。レンさんは大人ですね」
なんかもこさんがレンさんを弄るのが楽しいって言ってた気持ちがわかりました。むきになってくるところがすごくかわいいです。

「……少し耳貸せ」

「はい？」

言われた通り少し屈む。レンさんは私の頭の上の耳に顔を近付けると何かを話し始めた。

「……………の……………じゃから……………」

……………え？

「……………に……………勃……………して……………」

え？　ちょ？　え？

「……………男は……………で……………じゃから……………X……………」

ちょ？！ え！？ いや！？ あの！？ え、ええ？！ な、な
んでその歳でそこまで知って……というかなんで男性心理までそこ
まで詳しいんですか？！

顔を真っ赤にしながら「どーだ」と言わんばかりに胸を張るレン
さん。逃げるみたいに私から離れて行って……少し離れたところで
頭を抱えて何か悩み始めました……。

いや、でも本当に私以上にいろいろ知ってましたよ？！ ……ま、
まさか、リュウトさんと水浴びに行ってるのは……！

……強力なライバルが増えましたか……。

これは……本当にうかうかしてられませんか……。

九日目〜十二日目

side 浅倉 もこ

青白い月が照らす中、あたしとりゅう君は二人で焚き火にあたっていた。

風が少し肌寒い。上着をギュッと寄せて、手を擦り合わせる。手がかじかんじょうのはまずい、ボウガンで狙撃するにはけっこう致命的だ。

そんなことを考えてたらりゅう君がピクリと体を震わせた。

「もこ姉、モンスターが来てる。鳥系で数は一匹」

りゅう君は夜空を指差す。また来たのね……。たき火に近付けて手を暖める。

「ん、了解っと。……装備変更」

あたしの手の中にボウガンが現れた。それをりゅう君が指差す方向に向けた。——一瞬、月明かりを反射して大っきな怪鳥の影が見えた。距離は70mぐらい。狙いを合わせるあたしの視界の中に十字の照準マークが表示される。重力とかの影響を考えて、照準を怪鳥の少し上に合わせ、引き金を引いた。ビュンと空気を裂いて矢が飛ぶ音。ちよつと遅れて怪鳥が地面に落ちるのが見えた。

——幽霊騒動から四日経った。

あのあとはずいぶん平和に……いや、魔物の襲撃とか何回も有ったし普通に考えたら全然平和じゃないんだけど、この世界に来てからの日々の中では一番心穏やかな日々だった。

まあ、あれよ。自分で言うのとあれだけどあたし、少しは成長できたと思う。

特に自分でもすごいと思ったのが飛び道具の腕前。元々戦争ゲームなんかも好きで、廃人プレイとかもしてたんだけど、その腕前がこちらの世界ではそのまま適用されてるらしい。……具体的に言うとなんか100m以内なら確定でヘッドショットできるぐらいの腕前。

おかげで魔物との戦闘にも参加できるようになったしレベルも順調に上がって14までできた。

……レベル上がってるんだけど白マキナがボーナス渡しに来ないのよね。二回目の試練の後に頭叩き割られたせいかしら？

それと、あたしのゲーム脳もなかなか役に立ってると思う。ああ、ゲーム脳って言うってもスキルじゃなくて考え方ね。

例えば夜眠る時の役割分担。魔物の襲撃に備えて二人ずつ見張りや休む側に分かれることになったんだけど、そのチーム分けはあたしが決めた。

まず、鼻と耳で広範囲の索敵ができる竜人のりゅう君と狼人のフイロちゃん。この二人は別チームにしとくべき、ゲームでも索敵が強いキャラが一人いると何かと便利だし。（フイロちゃんが悲しそうな顔してたけど）

さらに松明の魔法で辺りを明るくできるフイロちゃんとあたし（あたしはフイロちゃんに教わった）も別チーム。フイロちゃんと一

緒のチームになれないのは残念だけど背に腹は変えられない。曇り空の夜とか、索敵できても真っ暗なままじゃ意味薄いし、視界を保つのはゲームでもとっても大切だ。そして何が起きても問答無用で対処できる恋ちゃんが一番モンスターの襲撃が多いっていう丑三つ時には必ず起きてもらうことにした。

ちなみに今はあたしとりゅう君が見張る番で、恋ちゃんとフィロちゃんはテントで寝てる。

うんうん、我ながらいい布陣だ。

やっぱり役に立ってる実感が有ると充実感が違うわね。後は……

「一万円と二千円出したら愛してる〜♪」

「……なんの歌だよもこ姉……」

「別に〜」

ん、この歌にも反応しないか。

りゅう君と仲良くなるための計画として、あたしが小声で歌うアニソンに反応するかのテストを実行中。とりあえず再会した直後に見たりゅう君の携帯に有った待受画面から、りゅう君が初代ガン〇ムを好きなのは確かだ。

けど残念ながらあたしは昔のガン〇ムにはあまり詳しくない。とかあたしは平成ガン〇ム派だ。……ガン〇ムファンは大きく分けて二つに分かれると思う。初代ガン〇ムを中心とした旧世代派と、平成に入ってから作られたガン〇ムを中心とした新世代派。

なぜこんな派閥が産まれたかというところ……ああ、まあいいや。要するにあまり仲がよろしくないんだ。

もちろん両方好き、とかあたしみたいに向こうには向こうの良さが有るって割り切ってる人は良いんだけどりゅう君がそうとは限らない。

もし、りゅう君が新世代アンチだった場合、下手にガン〇ムの話振ると仲良くなるどころか喧嘩の原因になりかねない。

だからあたしは別の方面……つまりガン〇ム以外の別のロボットアニメからアプローチをかけることにした。ガン〇ムが好きなら他のもの好きかも知れないしね。

まあ要するに小さな声であたしが知ってるの歌ってみて反応示したら当たりね。りゅう君は耳やたらいいみたいだから小声でもちゃんと聞こえるみたいだし。

「ふくんふくん、ふんころがし」

……反応無し、と。こっそり携帯のメモ帳に記入。

「給料三ヶ月分、結婚指輪」……………。

……これも違う、と。ん、どの歌なら反応しそうかな……。ちよっとロボット系以外にジャンル変えてみますか。

「ナインボールは、今日も元気、ミサイルばら蒔き飛ぶよ
テ、テ、テ、テ、デストロイ」

……ヤバイ。いくら何でもマニアック過ぎた……。は、恥ずかし

い……。も、もうちょいまともなので……。

「半径く85mはく♪ 超電磁砲射程距離く♪」

（その歌……知って……る……）

「へ？」

突然女の子の声が聞こえた。びっくりしてりゅう君の方を見る。けどりゅう君は別に何事も無いように飴を舐めながら周りを見ていた。え？ 竜人のりゅう君の方があたしより断然耳いいはずなのに……。

（お姉、ちゃん……、マキナ……ちゃんの……、お友……達……？）

途切れ途切れに聞こえてくる声。その声はひどく苦しそうで、息も絶え絶えという感じだった。

（お……願……い……助けて……殺さ……れる……）

「え?! ちょっと! 殺されるって何よ!？」

「もこ姉!？」

突然叫んだあたしに驚いたのかりゅう君が声を上げた。すると聞こえてきた声の声色が少し変わった。

（黒竜の……竜、人……? 良かった……まだ、生きてる人、いたんだ……お願い、助けて、こっち……）

「っ?! もこ姉今の声は!？」

今のはりゅう君にも聞こえたみたいだ。
周りを見回す。けど人影らしいものは無い。

「あなた誰!? どこにいるの!？」

見えない誰かに向かって叫ぶ。するとテントの中からフィロちゃんが出てきた。

「……どうしたんですか? こんな夜中に……」

目を擦りながらあたしたちの方に近付いてくる。……りゅう君以上
に耳がいいフィロちゃんにも聞こえてない?

「わからないの、突然声がして……」 「……え!？」

突然あたしたちの目の前で空間が裂けた。まるで空間を無理やり
押し広げたような穴。その穴の向こうは真っ暗で、何も見えなくな
っている。

(おね……がい、助け……て、ぼく……、死にたく……ない……)

——この声はフィロちゃんにも聞こえたらしい。驚いた顔であた
しを見る。

……この穴に入れってこと? でも見るからに怪しいし……。

「もこ姉とフィロは待っていてくれ、俺が行ってくる」

「ちょ!?! りゅう君何をあっさり決めてんのよ!?! 何が有るか

わからないでしょ!？」「俺は……」

りゅう君はあたしを見てニカッと笑う。

「助けてくれて言われたからには助ける。もし罨か何かでも……、その時は俺が死ぬだけだ」

——その言葉を聞いて、あたしは鳥肌が立った。過守護の効果で心が影響を受けてるのは知ってたけど、こんなにも簡単に、普通に“死ぬ”なんて言えるりゅう君に戦慄した。……再開した時からそうだ。りゅう君は自分自身の優先順位が低すぎる。死ぬことを気にしてないんだ。冗談抜きで誰かのためならあっさり命を捨てちゃうぐらいに。

「行ってくる」

「あ! 待って!」

りゅう君は迷うことなく穴の中に飛び込んで行く。——一人で行かせるのは……まずい!

「ちょっと! 待って!」 「リ……リュウトさん!」

あたしとフィロちゃんは後を追って穴の中に飛び込んでいった。

十二日目（2）（前書き）

前回の話……本当は替え歌を仕込もうと思って頑張って作ってたのに……（お察しください）

ナインボールの歌詞と曲両方わかった人いたら友達になりたい↑

十二日目(2)

——勢いで飛び込んではみたけど何にも見えない。……いや、遠くに小さな光が見える。トンネルみたいな構造になってるみたい。そして光に向かって走っていきりゆう君の後ろ姿も見えた。

「もこさん！　だ、大丈夫ですか!？」

フィロちゃんがあたしの手を掴んだ。フィロちゃんは呪文を詠唱して光の玉を打ち上げる。

……けどフィロちゃんが見えるようになった以外は見えるものは変わらない。というよりは周りが完全に真っ黒で光を出そうが出すまいがあまり関係無いみたい。

「何……？　ここ……」

真っ暗な何も無い空間に浮かんでるような、それでいて地面はしっかりと感じられる不思議な感覚。フィロちゃんは目を鋭くして周りを見回した。

「空間連結魔法みたいですけど……本物なんて初めて見ました……」

「……そんな珍しい魔法なの？」

「珍しいなんてものじゃありませんよ。時空間へ干渉する魔法はあ

らゆる魔法使いの最終目標なんて言われてて、使える人だって世界中探しても100人いないって言われてるんですよ？」

時空間への干渉ねえ……なんかマキナは普通にやった気がするけど……。あれ？　そういえばあたしを呼んだ声、あたしに『マキナちゃんの友達？』なんて聞いてきてたっけ……。恋ちゃん起こして連れて来なかったの失敗かも……。

後ろを振り返ってみてもあたし達が入ってきた入口は見えない。うー、ちゃんと戻れんのかなこれ……。

そうしてとりあえず歩いてる内にあたし達はトンネルの終点に着いた。通り抜けた先は小さな泉だった。周りはいっそうとしげる樹海。木々が空を覆い隠してとても暗い。

けど、その中で泉の近くだけはキラキラと明るくなっている。泉が自分から光ってるのかな？　えっと、りゅう君は……いた。

泉の近くにりゅう君がしゃがみこんでいる後ろ姿が見えた。あたしとフィロちゃんは駆け寄って……って、うわっ？！

りゅう君の前に一人の女の子が倒れていた。身体中に刀で切られたようなひどい傷が有って、息をするのも苦しそうだ。

「もこ姉！？　ついて来たのか！？」　「いいからどいて！」

早く回復してあげないと！　りゅう君を押しつけてその子の体に手を当てる。

「【ヒール！】」

淡い光が女の子を包んで傷を治していく。その間にあたしはその

子を観察した。歳は……恋ちゃんと同じぐらいかな？

足元まで届くほど長くて、透き通るような淡い水色の髪で、右目は前髪で隠れてる。肌はびっくりするぐらい白くて、お人形みたいな顔立ちも合わせてなんか人間離れしてる。その小さな体に付いたたくさんの刀傷が痛々しい。

体はローブみたいな薄い布で覆われてて、濡れてびしょびしょだ。濡れた布のせいで体のラインがはっきり見えてエロ……ごほん。

……着ている布から出た細い手や足に、飾りみたいなヒラヒラした魚のヒレっぽいのと、小さな蒼い鱗が付いていた。この鱗……なんかりゅう君の竜鱗と似てる。

りゅう君の方を見る。女の子の体に付いた鱗を見つめて、じっと何か考えてる。

りゅう君の反対側で見ていたフィロちゃんも心配そうにその子を見ていた。

「この子も竜人……みたいですわね。伝説の竜人と二人も会うなんて……となるとこの傷はハンターに付けられたものでしょうか……？」

「ハンター？」

「竜人や悪魔を狩るっていう組織の総称ですよ。……竜人と同じで半分伝説みたいなものなんですけどね。けど竜人にここまでの傷を負わせられる人なんてそうそういるとは思えませんし」

ハンター……ね。ゲームとかでのモンスター側の気持ちってこんななのかしら……。

もう一度女の子に視線を戻す。体の見える傷はある程度回復して

きた。けど顔色は相変わらず悪いし息も苦しそう。

……あ、目開けた。

女の子の薄く開けたまぶたの中で、青色の瞳が動いてりゅう君の方を見た。

弱々しいながらも表情が明るくなる。震える手がりゅう君の学ランを掴んだ。

「お？」

「仲間……間……、まだ……いた……」

女の子は掠れる声でそう言って、にっこり笑った。なぜだかわからないけど……なんだか見ていると切なくなってくるような笑顔だった。

「仲間……、いた。ぼく……、一人ぼっち、じゃない……」

「……えっと、あなたの名前は？ よかったら教えてくれない？」

女の子はこっくり頷く。何か言おうと口を開くとゲホゲホと咳き込んでしまった。ってうわわ？！ 口から血が？！ と、吐血って内臓破裂とかでヤバいって聞いたことあるよ？！

「ご、ごめん！ 喋らないでいいから！」

女の子はもう一度頷くと静かに目を閉じた。それでもその小さな手はりゅう君の学ランをギュッと掴んだまま離さない。

……ヒールが切れた。レベルは上がったけど相変わらずあたしはヒールを二連発はできない。やっぱりフィロちゃんが言ってたみたいに魔力の量は変わらないみたいだ。えーと、確か前計った時だと魔力満タンからヒール一回使ってもう一回使えるまでは5分強ぐらいよね……。回復したらすぐに使ってあげよう。

とりあえずこの子を運んで……。何か来ます。リュウトさん……。もこさん」

「っ！」

周りの樹海を警戒していたフィロちゃんが静かに言った。

敵！？ あたしはすぐにボウガンを取り出して構える。りゅう君も鋭い目で周りを見回した。クンクンと鼻を鳴らす。

「……別に変な臭いはしないぞ？」

「臭いがしないから問題なんです。こんな樹海の中なのに……。何か所か臭いが来ない場所があるんです。たぶん……。消臭剤を撒きながら移動してるんでしょう」

——消臭剤？ となると何かってのはモンスターじゃなくて人間？ 周りに注意を払いながら携帯のマップを開く。……。反応は無し。PCがいれば表示されるはずだから周りにいるってのはPCじゃないし、この女の子もNPCってことね。……。NPCとかモンスターも表示してくれればいいのに……。

『警告スル！』

「ふえっ?!」

突然茂みの中から聞こえてきた声の方向にあわててボウガンを向けた。

茂みから出てきたのは……マネキン？

あたしの膝ぐらいの身長の白いマネキンが茂みの中から出てきた。小さいのに八頭身の体、色の付けられてない顔、それがカチャカチャ音を立てながら歩いてくる様はちよつと……いや、かなり不気味だ。

『警告スル！』

マネキンが機械的な甲高い声を上げた。

カチャカチャと手が動き、さっきの女の子を指差す。女の子は怯えた様子でりゅう君にしがみついた。

『リリー＝ウエルメイド。ソノ娘ハ邪悪ナル竜人ノ血ヲ引ク者トシテ、我々【光ノ教団】ノ駆除対象トナツテイル。速ヤカニコノ場ヲ立チ去ルベシ。警告ニ従ワナイ場合、命ノ保証ハシナイ』

——リリー＝ウエルメイド……それがこの子の名前か……。にしても光の教団？ なにその名前からして厨二っぽくて怪しいのは。

……たしか、この世界では純粋な人間以外は差別や迫害の対象になるってりゅう君が言ってた……。そしてりゅう君の種族、黒竜の竜人は人間と魔族に滅ばされたって……。嫌な予感しかないわね。

りゅう君も感づいたみたいで身構える。フィロちゃんは少し戸惑った様子でマネキンを見ていた。

『クリ返ス。コノ場ヲ立チ去レ、サモナクバ……』「その前にこちらの質問に二、三、答えてくれ」

りゅう君が一步前に出て言った。マネキンは『イイダロウ』と頷く。

「まず、この子……リリーをどうする気だ？」

『決マツテイル。我ラガ神ト人間ニ仇ナス存在トシテ駆除スル』

悪寒がした。人間に駆除なんて……害虫みたいな言い方するなんて……。りゅう君の拳を握る手に力がこもった。

「……もうひとつ、この子は何か悪いことをしたのか？」

『竜人トイウ存在ソノモノガ罪。許サレザル大罪。罪人ハ裁カレテシカルベキ。我ラハ神ノ代行者ナノダカラ。我ラノ行イコソガ神ノ意思！ 我ラコソガ……』 「ちが……う……！！！」

リリーが初めて声を荒くした。ゲホゲホと血を吐いたけど、それでもマネキンをキツと睨み付ける。

「神さま……、マキナちゃん、こんなこと……、しない！ ぼくの友達……。変な、こと……言わないで……！」

『貴……様ハ……！！』

マネキンの方の声も荒くなった。

『貴様！ 貴様ゴトキガ神ノ名ヲ呼ブカ！ シカモ……友達ダト！
？ 大概ニセヨ！』

「嘘、違う！　ぼくと……マキナちゃんは……！」　『ナラバ何故！
神ハオ前ヲ助ケニ来ナイ！？』

リリーは言葉に詰まった。ここだとばかりに、マネキンはさらに
まくし立てる。

『ドウシタ？　貴様が神ノ友人トイウナラ、何故神ハ貴様ヲ助ケニ
来ナイ？』

「それ、は……」

『神トハ全知全能！　コノ場デ起テイルコトヲ知ラヌワケガナイ。
モシ神ガ、オ前ニ味方スルトイウナラ！　私ハ甘ンジテ裁キヲ受ケ
ヨウ！　ダガ……神ハ来ナイ！　来ルハズガナイ！　何故ナラ！
貴様ラハ悪デアリ、我々コソガ神ノ代行者ダカラダ！』

リリーは黙ってしまった。下を向いたまま、悔しそうに体を震わ
せている。

『ソシテ！　神ノ代行者デアル我々コソガ正義！　我ラノスル行イ
ハ神ノ意思！　故ニ全テガ許サレル！』

——なんなのこいつ……？　言ってること……無茶苦茶だ。

『貴様ノ母親モ最期ハ救ワレタダロウ。慰ミモノトシテトハイエ、
神ノ代行者タル我々ニソノ身ヲ捧ゲラレタノダカラ！』

………ヒールのことが無ければ、火で炙ってやるのに……。

『ダガ案ズルナ！　貴様モ我々ニソノ身ヲ捧ゲサセテヤロウ！　ソ

レニ貴様ラ竜人ノ鱗ヤ爪ハ魔法使イニ高値デ売レル。喜べ！ 貴様
ハ我が光ノ教団デ……』

——マネキンは全てを言い終えることができなかった。

「こんな子供を不幸にするのがお前の言う正義か……！？」

りゅう君がマネキンの頭を叩き潰していた。手に付いた破片を落
として少し申し訳なさそうにあたしを見る。

「……悪いもこ姉、つい……」

「いいわよ。あたしも我慢の限界だったし」

実際、ファイア唱えかけてたし。たく……元の世界のどっかの新
興宗教真っ青な言い分だったわね。

「……ま……ずい……です……」

——え？ フィロちゃんが真っ青になっていた。あれ？ なに？
もしかして……地雷踏んだ？

「も、もこさん！ リュウトさん！ は、早く逃げましょう！ ど、
どんどん増えています！」

……もしかしてなんかめちゃくちゃバい状況になってたりする
？ ワタワタとリリーを連れて逃げる準備をするフィロちゃんに従
って、リリーをりゅう君に背負わせる。——その時、周りの樹海の
中から何かの気配がした。

「
「
「
「
「
「――神ニ逆ラウ者達ニ裁キヲ!
」
」
」
」
」
」

十二目(3)

……白いのが多すぎて森が緑に見えない。えっと、なにこれ。白が9で緑が1だ！　とでも言わせたいわけ？

樹海の木々の隙間からマネキンがひたすら湧いてくる。行進とかそんな生易しいもんじゃない。わかりやすく言うなら……樹海って言う小さな箱にぎゅうぎゅう詰めになされたマネキンが小さな隙間から溢れだしてくるような捻り出されて来るような……んな感じ。

迫ってくる高さ10m越えのマネキンの壁を見上げれば、数えきれないぐらいの数のマネキンの皆さんがジロリとあたしにメンチ切ってきて……「なにボーツとしてんだもこ姉！！　逃げるぞ！！」

——気付いたらりゅう君の肩に担がれていた。右肩にリリー、左肩にあたしって構図になってる……じゃなくて！！　何よあのマネキン軍団？！　20体とか30体ぐらいに囲まれるとかならまだ想像できるけどあれ何体よ？！　光の教団／＼なんて名乗ってんだからもっと光っぽいことしなさいよ！！　あれもろ悪魔とか闇系じゃない！！

りゅう君に担がれたまま後ろを見る。数m後ろで、マネキンの津波が木々を薙ぎ倒しながら迫ってきて……

「いやああああ！！？　りゅう君！！　もっと！　もっと早く！！　あんなのに吞まれて死にたくない！！」

「こっちは二人担いでるんだ！ 無茶言うな！ というかそんなこと言うなら自分で走ってくれよも姉！」

「無理！ あたしゲーム脳の効果で10秒走ったらスタミナ切れで息切れするもん！」

「それも姉に体力無いだけだろ！」

少し前をいくフィロちゃんに邪魔なツタなんかの障害物を魔法で吹き飛ばしてもらいながらりゅう君は走る。けどこれ……いつか絶対、追い付かれるわよね……。……そうだ！

「リリー！ あなた……えーと、空間連結魔法？ 使えるんだよね！？ それ使えばここから逃げれるんじゃない！？」

「……ごめん、なさい……。この森、ぼくの神域……。外からのお客さんは好きに入れれる……。けど、中から外に出るの……。むずかしい……」

「フ、フィロちゃんなんかいい案無い？！」

「や、やってみます！」

フィロちゃんは四つん這いになると一気に加速してあたし達と距離を開けた。進行方向に有った木の枝に飛び乗り、詠唱を始める。

『阻むは大地の豪腕。高くそびえ天すら隠す。集まり、隆起し、凝縮し、迫り来る愚者に絶望を見せよ！ 【エンシェント クリフ】
！！』

——あたし達のすぐ後ろで地面が盛り上がって、それが瞬く間に空高くそびえる土の壁になった。壁の向こう側で何かが潰れる音が聞こえた。たぶんマネキンが激突したんだろう。

りゆう君が立ち止まって後ろを振り返った。息を弾ませながら土の壁を見上げる。

「おお……。フィロすごいな……」

「詠唱短縮でできるかどうかわからなかったけど、うまく言ってくれたです」

フィロちゃんはりゆう君に誉められて嬉しそうにしっぽを振っている。

確かにこれは……凄いわね。土の壁は物凄く固くて分厚そうで、これならマネキンも……『……………』……あれ？

壁の向こうから何か聞こえた気がした。壁に耳を当ててみる。

『……………深淵……真に……阻むは……闇を駆け……………全ては我ら……………』

………これ、魔法の詠唱？ 何のまほ “ボゴンッ！” ……ボゴンッ？

音がした頭上を見上げる。壁から頭が突き出したマネキンと目が合った。

……………

ボゴンッボゴンッボゴンッボゴンッボゴンッボゴンッボゴンッボ

「痛い……」 「痛くなきゃ殴る意味が無いだろ！」

りゅう君は吐き捨てるように言ってリリーを睨む。

「自分が危ない時に助けを呼ぶことの何が悪い！ 生きたいって思うのは当然だ！ 無事に事が済んだとき、礼をできればそれでいいんだよ、特に子供は！」

……謝るぐらいなら何とかする方法を考えてくれ！ どんな方法でもいいから！」

リリーは頷いて目を伏せた。……何とかする方法、正直あたしにはまったく思い付かない。

数も多すぎ、魔法まで使ってきて障害物も無視……あとはもうリリーしか……。

「……………ぼくと……竜の契り……してくれる？」

リリーがためらいがちに呟いた。チラリとりゅう君を見て、また目を伏せる。りゅう君は首を傾げた。

「……………竜の契り？」

「や、やっぱり……だめ……だよな？ そんな……いきなり……」

「それで何とかできるのか？」

「……え?! う、うん、竜の……契りをした竜人同士なら……力のいくらか、あげたり貸したりできるから……」

「よし！ わかった！ それで頼む！」

りゅう君が言った瞬間、リリーはビクンと体を硬直させた。顔が赤くなって、何かわたたと慌て始める。

「ほ……ほんとに……？ ぼくで……、いいの……？」

「あ？ いいから早くしてくれ！ もうあんまり走れないぞ！」

「う、うん……。じゃあ……フィロ……お姉ちゃん？」

「は、はい?!」

突然自分の名前が出てフィロちゃんはびっくりして振り返る。

「少し……時間稼いで……欲しい。さっきの魔法、もう一度できる……?」

「な、なんとか！」

フィロちゃんが答えるとリリーは満足したように頷いて、あたしを見る。

「……………もこ姉お姉ちゃん？」

「もこお姉ちゃんって呼んで欲しいわね」

「じゃあもこお姉ちゃん……儀式、やるから……必要な宣言、お願いして……いい？」

「なんか知らないけどわかったわ!」

「……もう少し行ったら泉がある……そこで……」

リリーの言う通り少し行くと泉があった。リリーはりゅう君に下ろしてと合図する。フィロちゃんは踵を返してさっきの土の壁をもう一度作り出した。

その間にリリーは泉の水に手を当て、何かの呪文を詠唱する。すると水の中から水晶の玉が出てきた。

「……もお姉ちゃん……儀式……するから……これ、合図したら読んで……」

リリーは緊張気味にその水晶をあたしに渡すと、りゅう君の手を引いて泉の中に入っていく。ああ! 早く早く! 後ろではフィロちゃんの作った壁にマネキンがぶつかる音が聞こえた。

リリーとりゅう君が腰まで泉に浸かったところでリリーからの合図が来た。同時に水晶に文字が浮かんでくる。あたしは何も考えずそれを読み上げた。

『蒼竜の娘、リリー!! ウェルメイド。黒竜の男、神埼 竜斗。汝らは誰に強制された訳でもなく、自らの意思で竜の契りを交わすことを決断したということに違いないか?』

「「違い、ありません」」

りゅう君とリリーが同時に答える。するとキンツと高い音を立て、

りゆう君とリリーの周りの水に魔法陣が浮かび上がった。とりあえずこれでいいみたいね、次は……。

『神埼 竜斗。汝は穏やかなる時も病める時も嬉しき時も悲しき時も、リリー＝ウエルメイドと共に在り、これと歩き続けることを黄昏の竜に誓うか？』

「ああ、誓います」

りゆう君が答えるとりゆう君とリリーの周りにある魔法陣が少し複雑なものになった。よし、次は……

『リリー＝ウエルメイド。汝は穏やかなる時も病める時も嬉しき時も悲しき時も、神埼 竜斗と共に在り、これを支え続けることを黄昏の竜に誓うか？』

「……………はい。……………誓います……………」

さらに魔法陣が複雑化する。あとは……

『ここに竜の契りは成立した。二人の新たな旅立ちに黄昏の竜の加護があらんことを！……………つと』

これで終わり！ 魔法陣が光出して二人にそれが集まっていく。……けどなんかさっきの儀式の言葉どこかで聞いたような……。

「も、もこさあああんっ!!?」

後ろでフィロちゃんの悲鳴がした。振り返った瞬間 フィロちゃんが作った土の壁が崩壊した。

「きゃあああああ?!」

悲鳴。逃げる間もなく、フィロちゃんの体がマネキンの津波に呑まれていった。

十二日目(4)

「フィロちゃん!!」

やだ?! うそ?! マネキンの白一色、呑み込まれたフィロちゃんの姿がどこにも見えない。そんな……………。

その時、後ろでキンツと甲高い音が鳴った。振り返ると……………泉の水が無くなっていった。視線を上げると空に泉の水が全部、球体になって浮いていた。その中心でリリーはゆっくりと手を広げる。まるで人魚みたいに、下半身が魚みたいになって、長い尾びれが水中でなびいていた。

(お姉ちゃん……………どいて……………! あいつら……………水で流し潰す……………!)

「待って!!」

あたしは叫んだ。水で流し潰す?! 冗談じゃない! そんなことしたらフィロちゃんは……………。

(……………あの狼人のお姉ちゃん、もう……………あきらめるしか……………。このままじゃ、お姉ちゃんやリュウトも……………)

「……………リリー!! 20秒でいい! もこ姉を護れ!!」

りゅう君が突然叫ぶと走り出した。え?! ちょ?!

あたしの脇を走り抜けてマネキンに向かっていく。

「あんた！　ちょっと！　待ちなさいよ！」

反射的に追いかけてしようとしたらゼリー状の水の壁があたしを阻んだ。

（リュウト……お姉ちゃん護れって……）

リリーの申し訳なさそうな声。ああもう！　あいつはまた！　いたい今回はどうする気よ！

りゅう君にマネキンの津波が迫る。りゅう君は体を思い切り縮めると反動をつけて空高く飛び上がり、マネキンの第一波を避けた。けどすぐに空中にいるりゅう君にマネキンが群がっていく。

「フィロ！！　聞こえたら叫べ！！　絶対助けてやるから！！」

りゅう君が叫ぶ。一瞬の間が流れる。りゅう君がほんの少しだけ笑った。手に向かって来るマネキンに向けて突き出す。

——瞬間、りゅう君の手元の空気が歪んだ。

りゅう君の手から黄色い光が広がる。その光に触れた瞬間、マネキンは糸を切られた人形みたいに動きを止めた。

——以前マキナに見せてもらったやつとイメージが重なった。今の……りゅう君の過守護領域？！　なんで……いや、今のりゅう君は……もしかして……。

りゅう君はそのままマネキンの中に飛び込み、潜っていく。数秒

の間。フィロちゃんを抱えたりゆう君が顔を出した。

「リリー！ こいつら全部押し流せ！ 俺は大丈夫だから！」

「……え……けど……」

戸惑うリリー。けどあたしの予想通りならここはりゆう君が正解だ。

「リリー！ あたしからもお願い！ 今はあのスキルが働いてるけど時間経ったらどうなるかわからない！」

「え……？ えっと……」

「とにかく早く！」

あたしとりゆう君の声が重なった。

「……わかった……信じるよ？ ぼく、二人のこと……」

リリーは自分を囲む大量の水に手を向けた。
すると水の塊が細長く伸び、一頭の水の竜へ変わる。

「お母さんの……仇……！」

リリーの叫ぶ声を引き金に水の竜が新幹線みたいな勢いでマネキンの群れに向かった。ぶつかりあった瞬間、爆発したような爆音と水しぶきが上がる。

水の竜はまるで滝のような激流になって森の彼方にマネキンを押

し流していく。……りゅう君大丈夫？　これ……。

やがて水の竜が消えると、そこには深々と抉られた地面が残っていた。マネキンどころか周りの木まで根こそぎになっていて跡形も残っていない。

……いや。削られた地面。その中でぽつんと一ヶ所だけ地面がまったく削られていない場所があった。りゅう君はそこにフィロちゃんを抱えたまま立っている。フィロちゃんは何が起こったか理解できてないみたいで呆然としていた。

「リュウト!!　大丈夫!?!」

リリーは地面に降りると一目散にりゅう君に駆け寄って言った。それに応えるりゅう君は……元氣そうだ……。

——マキナ曰く、りゅう君のスキル過守護は相当強力な防御スキルらしい。けど、普段はりゅう君自身の力と破壊衝動を抑えるのに全部が使われてて使えない。

それに対してリリーが言った竜の契約っていうのは竜人同士で力の受け渡しができるようになる儀式らしい。つまり……竜の契約を使つてりゅう君の竜人の力がリリーへ行つて、そしてそれでりゅう君の力が弱まって、過守護を使う余裕ができた……と、そんな感じだと思う。

『そそ、そんな感じ。さっすがもちゃん、説明不要で大助かりだよ』

「わっ?!」

いつの間にか隣にマキナが浮いていた。あたしと目を合わせてに

こつと笑うと『リッちゃん!』とリリーに両手を振る。

……リッちゃん?

リリーもマキナに気付くとパツと表情を明るくして駆け寄ってきた。そういえばリリーが友達って言ってたっけ……。本当だったんだ……。

マキナはリリーを胸に受け止めると頭を撫でながらあたしを見る。

『ちょっとお話しよっか? いろいろ話さなきゃいけないこともあるしね』

そう言ってマキナはパチンと指を鳴らした。

「ご注文はいかがなさいますか? お客様」

『私バケツプリン。生クリームたっぷりね?』

「……んじゃ、俺はサーロインステーキ。焼き加減はレアで」

「ぼくは……、コイキングのムニエル、よろしく」

「いやあんたら?!　なんでそんな普通に注文できんのよ?!　と
いうかりリーの注文ちよっと待て!」

マキナが指を鳴らした瞬間周りの風景が切り替わって……どうやら料理店らしいところに移動した。落ち着いた高級洋食店って感じの雰囲気、あたし達は白いテーブルクロスのかけられたテーブルを囲っていて、なんかやたらピシツとした正装の人が注文を取っていく。

「お客様、ご注文はまだお決まりではありませんか？」

「え、あ……、す、すいません……。じゃ、じゃあせっかくだから
チョコパフェ……」

「かしこまりました。しばらくお待ちください」

なんかもう相変わらず……一気にペース持って行かれたわ……。
ちなみにフィロちゃんはこの中にはいない。NPCは連れて来れない
って言ってたけど……リリーは？

『とりあえず何から話そっかな……。あ、まずはリツちゃん助けにく
れてありがとね?　普段は私がリツちゃんの住んでた泉の周りに結
界張ってたんだけどちょっと事情があって結界張れなくなっちゃっ
て……。ああ、それとリツちゃんとりゅう君、竜の契りおめでと〜』

「ありがと……。マキナちゃん……」

リリーは照れくさそうにお礼を言うときキラリとりゅう君の方を見
た。りゅう君と目が合うとあわてて視線を反らしてコップの水を飲

む。……ん？ ……とりあえず竜の契りっておめでたいことなのかな？ まあそれは後でいいや。せっかくマキナから話そうって言うてきたんだから情報集めないと。

「結界張れなくなった事情って？」

あたしが聞くとマキナはうへえっと気持ち悪そうに舌を出す。マキナがこんな顔するのは初めてだ。

『第2の試練の時ちよーっとやり過ぎたみたいでさー、お仕置きって言うって他のマキナに力封印された上に、火山の火口に大気圏外から叩き落とされるわ海溝に1000tの重りつけて沈められるわ…』

……なんで生きてんの？

『あと、触手に監禁凌辱調教一週間とかされそうになったり……、あ、けどこれは適当なプレイヤー身代わりにして回避したから勘違いしないでね？ みんなのアイドル マキナちゃんはしっかり貞操を守りました♪』

……身代わりにされたプレイヤーは？

『まー、そんなわけで結界張ってる余裕まったくなくて……その間に例の厨二軍団……もとい光の教団がリッちゃんたちの住み処特定しちゃったわけ。ごめんねリッちゃん？』

「仕方……ない。もともと、自分の身は自分で護るのが……本当。……マキナちゃん、ぼくたちを今まで護ってくれた、責めるなんて、できない」

『うゝ、そんなリツちゃんもあたし大好きだよゝ!』

マキナはヒュンとテレポートするとリリーに後ろから抱きついた。すりすりとりりーに頬擦りする姿は本当に仲良さそうだ……。このことも聞きたいけど……。今は他のことについて情報集めるのが先ね。マキナの気まぐれは重々承知してる。話す気でいるうちに聞いとかないと。

「光の教団ってのは？　どういう組織？」

『んゝ、厨二……。もとい元々この世界にいた異能者で構成されたカルト集団だよ。うっとうしい連中でさゝ、私たち“マキナ”の名前を語って、殺人 強盗 強姦 誘拐なんでもござれなやつらだよ。しかもリーダー格のやつがかなり強力な人心掌握系のスキル持ちで、教団メンバーは自分たちが何やってもそれに疑問を持たないようになってる。ぶっちゃけこの世界で一番危険な組織かな？』

——予想以上にヤバいのか関わっちゃったみたいね……。りゅう君が竜人っていうのもバレてそうだし……。

「なんとかならないの？」

『無理ね。私たちのルールで、むやみやたらにこの世界のことに関渉するのは禁止されてるもん。神さまはあくまでも見守る存在ってね』

「……二回目の試練の時はあたしに直接攻撃してきたくせに……」

『だからお仕置きされちゃったのよゝ。私もお仕置きはもうやだよ

？ 今度こそ緑マキナに女の子の貞操奪われちゃうよ』

ため息一つ。もしかしたらマキナを味方に……と思ったけど無理そうね。じゃあ……

「りゅう君はどんな状態？ 過守護が使えるようになってるみたいだけど」

『さっきももちろんが推測した通りだよ。リツちゃんに竜人の力を分けたことで過守護を使う余裕ができた。……とはいえせいぜい二割程度だけどね』

なるほど……つまりリリーがいればりゅう君は過守護を使えるってことか……。ならもう一つ。

「ちなみにりゅう君の心の状態は？ 今までは過守護の影響で心が歪んでたんでしょ？」

『そだね。この状態を維持してればだんだんましになってくると思うよ』

そっか……。よかった……。ならできればリリーには一緒に来て欲しいところね。戦力的にも頼もしいし、りゅう君の方もいつまでも自分の命を簡単に投げ出しちゃうような状態だとさすがに心配だ。そうなる……『うふふふ』

——マキナがあたしのことを見て笑っていた。

「なに？」

『やっぱりもちゃんはすごいな〜って思ってたね。その思考力と適応力、完全に高校生離れしてるわね』

マキナはクスクス笑うと自分の髪を指に巻き付け始めた。

『12日目でこれだけこの世界に適應してるのもちゃんぐらいだよ。今でも「元の世界に返して〜」って嘆いてるのもけっこういるし。それに私から情報を聞き出す時の無駄の無さ、軽く鳥肌物だったよ?』

「……ゲームみたいに考えてるだけよ」

『ゲーム?』

「そ、あたしはものを考える時、ゲーム基準で考えてる。今は最低限どんな情報が欲しい。どんな選択をすればいい。そういうの全部……ね。ある意味現実逃避だけど、けっこう理屈にかなった考え方できてるでしょ?」

マキナは髪を指に巻き付ける動きを止めていた。興味津々といった感じであたしを見つめる。

『現実逃避……ね。けど、その考え方や絶対割り切れない問題、そのうち来るよ』

「その時はその時。先のことなんてあんたぐらいしかわからないんだし、今は今のことだけで手一杯よ」

マキナはもう一度くすりと笑って軽く指を振った。すると最初にあたし達が頼んだ料理が運ばれてきた。

『やっぱり面白いね♪ ま、せっかくだからもう少しお話し
よ。幸い時間はたっぷり有るからさ♪』

——話……か。あたしはマキナを注意深く見ながら運ばれてきた
チョコパフェを受け取った。
何かしら情報は集まりそうね……。

あ……チョコパフェ美味しい……。

十二日目（おまけ）（前書き）

やべえ…スランプ突入きた（――；）
文章が書けないですえ……

ただでさえ遅筆なのにさらに遅くなるかもですORZ

十二日目（おまけ）

side 神埼 竜斗

……このステーキ、肉はいいんだがソースがいまひとつだな。少し甘味が強すぎて肉の旨味を殺してる。そうだな……赤ワインをもう少し追加して煮込む時間も30分増やす。隠し味に醤油を四滴ぐらい垂らせば美味くなるか……。

マキナとも姉が話してる間、俺は料理の方に集中していた。

マキナとも姉の話の中心は俺の心の状態がどうっていうのだ。

正直……あまり聞きたくない。

だってなあ……心が変になってるって言われてもこっちは自覚無いからなあ……あんまい気しないんだよ。というかなんで胸触ったり、もこ姉やフィロの着替え見たら怒られたのかいまだにわからん。着替えとか一緒にやった方が早いだろうに。現に師匠は俺の前でも普通に着替えてるぞ？ それに……この間とも姉の胸 枕にして寝たら本気でぶちギレられたし。いいだろ別に、もこ姉の胸ぶにぶにして枕にすると気持ちいいんだから。

……まあ、マキナが言うにはリリーがいれば心の状態も戻っていいくらいだし、戻ればわかるんだろ。

……それなら俺がもこ姉を護りたい理由もわかるんだろうか？

こっちの世界に来て、俺はすぐに“もこ姉を護らないと”って思

った。

けど、その理由が思い出せない。やっぱり自分の行動の理由は……気になる。——ん？

リリーが椅子を抱えてトコトコ俺に近付いて来た。

俺の隣に椅子を置くと、「えへへ」と照れ臭そうに笑う。

「い、一緒にたべよ……？ ……リュウト」

「おう。いいぞ」

俺が言うとりりーは嬉しそうに、自分の椅子を俺の椅子にくっつけて、腕と腕が触れ合う距離で座る。——おお……。リリーの肌、ひんやりしていて気持ちいい……。さっき走って火照った体にはちようどいい……。

もうちよつと触ってたいけど……腕だと飯食うの邪魔になるよな。なら膝とか……。

そう思ってリリーの膝に手を置いた。ぴくっとリリーの体が震える。……あ、やべ。膝って触ったらいけない場所だったか？

……けどリリーは何も言わない。ちよつと顔を赤くしながらチラリと俺を見て……ん？ なんかちよつと嬉しそうだぞ？

リリーはおずおずと手を伸ばして、膝の上にあった俺の手に自分の手を重ねた。そつと指を絡めてくる。やっぱり冷たくて気持ちいい。

手や足には身体中の血管が集中してるから、体を冷ましたい時はそこを冷やすのがいいんだ。ホッと息をついて力を抜いた。

——けどなんかリリーの方はやたら力入ってるな。リリーを見ると顔が真っ赤だ。それでチラチラ俺の方を見てくる。なんだ？

「そ、そういえば……えっと……ぼく、勢いでリュウトのこと、“リュウト”って呼んでるけど……竜の契り……したし、“あなた”って呼んだほうがいい？」

「んあ？　なんで竜の契りしたからって……とりあえず“あなた”は変だろさすがに」

「そ、そっか……じゃありュウトって呼ぶね……？　ね、ねえリュウト……？　コイキングのムニエル……食べる？　お肉よりこっちの方が美味しいよ？」

「お？　そうか、じゃあ少し貰おうか」

「う、うん……。じゃあ……あ、あーん」

リリーはフォークに刺した料理を俺の方に向けてきた。自分で食べようとしたが……右手がリリーにがちり掴まれてて動かせない。仕方なくそのままリリーの差し出したやつを食べた。

……お、なかなか……

「おいしい……？」

「おう、なかなかいけるな」

なるほど、ここのシェフは魚料理の方が得意なのか。たしかこの

料理……コイキングのムニエルって言ったな。コイって言うわりにはスズキとかに近い味だ。この前の町で食べたマトマの実とかとも合いそうな気がする。

そんなことを考えながら、またリリーが出してきたやつを食べる。コイキングか……けっこうでかそうな魚だけど釣れるのかな？ リリーは普段水の中で生活してたらしい後で聞いてみるか。

ふとリリーを見ると、リリーは俺の方を見てまた照れ臭そうに「えへへ」と笑った。

なんか可愛らしい。フィロとは違う、妹みたいな感じだ。手をほどいて透き通るような水色の髪に指を通した。こっちも少し濡れるような感触で、ひんやりしている。

「ひゃんっ?!」

「お?」

なんかリリーがビクンと体を震わせた。ん? なんだ? そのままもう一度髪に指を通すとまた切なげな声を出して体を震わせる。

「だ……だめだよ……。こんな……で……ぼく、髪……敏感だから……」

髪が敏感? ……そういや、水の中で生きてる生き物の中には体に敏感なセンサーを備えてるやつがいるよな。ナマズのヒゲとか。もしかしたら……。

試しにリリーの髪を一束手に取って指の腹で撫でてみる。

「ひあっ……?! あう……くん……だ、だめえ……」

「つと。すまん」

どうやらリリーは髪の毛にも神経が通ってるらしい。悪いことしたかな？ 手を離す……が、なんかリリーが潤んだ瞳で俺を見上げてきた。おいおい、大丈夫か？ なんか息が荒いぞ？

「やめ……ちやうの……?」

は？ いやおい、さっき「だめ」って言ってたろお前。いやなんだよその何かを期待するような目は？ 何を期待してんだよお前は？

「リュウトの……いじわる……」

——なんだろうか？ 凄まじい地雷を踏んだ気がする……。

まあいいや。とりあえずこのコイキングの調理方を考えよう。とりあえず町で食べたミジュマルって生き物の血のソースと合わせるのはどうだろうか？

十二目(5)

side 引き続き 神埼 竜斗

——うわああああああっ！！

テントの中、頭を抱えて心の中で絶叫した。

うわああああああっ！！ あーくそっ！！ いっそ殺してくれ
ええええ！！

あまりにもいたたまれなくてテントの中でのたうち回った。なん
かもう……今すぐどこかに消えてしまいたい。

——俺たちはマキナの手によって元の場所に戻って来ていた。
師匠にはかなり心配かけたみたいだったが事情を話したら納得し
てくれて、一緒についてきたリリーも歓迎してくれた。

で、疲れただろうし自分が見張りをやるから休めって言われて俺
ともこ姉、そしてフィロとリリーの二組に分かれてテントで休むこ
とになったんだが。

……いろいろ思い出してきたんだ。うん、マキナが言ってたように心の状態が戻ってきたらしい。で、それはつまり今まで自分がどれだけのこともないことしてきたかを理解できるようになってきたってことで……。

うわああああああっ！！ 俺 なにもこ姉の胸わしづかみにしてんだよ！ なにフィロの裸普通に見たりお姫様抱っこしてんだよ！ なにもこ姉の胸を枕にしたり、着替えようとして普通にもこ姉達の前で全裸になったり一緒に水浴びしようとしたり……！！ うあ………そういや前の幽霊騒動の時にもこ姉とデ IPP キ………うわああああああああっ？！ なにやっぺんだよ俺？！ なにやらかしてんだよ俺？！ ああもう誰かいっそ殺してくれえええっ！！

「りゅう君うるさい」

……のたうち回ってたら隣で寝ていたもこ姉が不機嫌そうに体を起こした。――少し胸元がはだけてる。

「あ………悪いもこ姉………」

「……ん。りゅう君も早く寝なよ………？」

もこ姉はかわいらしくあくびをするとまた横になる。少しすると気持ちよさそうに寝息を立て始めた。

――もこ姉は俺に対して少し無防備過ぎると思う。いや、俺がどんな状態だったから警戒心が薄れてるのか？

けどわかってんのかも姉？ 俺、男だぞ？

……ついても姉のはだけた胸元に視線が行ってしまう。……悪いかよ？ 俺、健全な16歳だぞ？

ああくそ、も姉もう少し警戒してくれよ。もし俺が襲い掛かったりしたらどうする気だよ？

とはいえも姉、アイテムボックスに大量に剣持ってるからなあ。もし俺が襲い掛かってても身体中串刺しにされるのがオチか。

いや、けど俺って今は最高峰の防御スキルっていう“過守護”が使えるんだよな？ それならも姉の剣も防げるかも……それに昔よりかなり力も強くなってるから、一度抑え込めたら——ゴツンッ！！ 思い切り地面に頭を打ち付けた。

おい俺、抑え込めたらどうする気だ？ 落ち着けよ？ COOLになれよ？ 額から血をだらだら流しながら乾いた笑い声を上げる。ヤバイ。変だぞ俺。むしろ余計変になったんじゃないか俺？ 少し外の空気吸って来るか……。

なんかもういろいろ悶々して眠れる気がしない。音を立てないように立ち上がってテントを出た。

「……おお」

見上げると満天の星空。満天ってこういうのを言うんだな。そこそこ見慣れてたはずの星空に思わず感動してしまった。

もうこっちに來て半月近く経つのにな何もかもが新鮮に感じる。今の身体も……耳を澄ませば周りの草むらの中で小さな虫が這う音まで聞こえるし、鼻に集中すればテントで休んでるフィロとリリーの

匂いが……ゴホン！ とにかくいろいろ感覚が違う。

よくよく考えたら俺、とんでもない運命歩いてるよなあ……。異世界にいるなんて、高校のダチに言っても絶対信じないぞ。

「神埼、そんなところに突っ立っておらんでこっちに来んか？」

ぼんやり星空を見上げていたら焚き火にあたっていた師匠にそう言われた。どうせしばらく起きてるつもりだったんだ、言われた通り、師匠の隣に腰を下ろす。

すると師匠はじっと俺を見上げてきた。……なんというか……。普通のかわいらしい女の子に見られてるみたいですがごく変な気分だ。

「……ふむ。浅倉達から聞いておったが多少は元に戻ってきておるようじゃの？」

「わかるんですか？」

「なに、お前が小学生の頃からの付き合いじゃからのう。それだけにこちらで再開した時には驚いたわい。元のお前が見る影もなかったからのう」

——見る影も無いってのは思いつ切りこっちの台詞だと思うんだけどなあ……。

「で、浅倉のことは思い出したか？」

「……はい？」

「ふむ、その様子ではまだか」

師匠は残念そうにため息をつく。なんでもこ姉が出てくんだけ？
思い出すって……俺ともこ姉は幼なじみで、姉弟みたいな仲で……
それ以外に何か有るか？

いったいどういう……「リュウト」ガバツと後ろから抱き付かれた。

ひんやりした冷たくて柔らかい感触。首に回された細い腕をそつとほどく。

「リリー、焚き火の前で暴れると危ないぞ？」

「あ……ごめんなさい……」

振り向かずに言うと少ししゅんとしたリリーの返事が返ってきた。

「え……と、リュウト……隣、座っていい？」

「おう、いいぞ」

俺が答えるとリリーはいそいそと俺の隣に腰を下ろす。少し照れたような表情で俺を見上げると俺越しに師匠の方を見た。

「こ……こんばんは……」

「うむ、こんばんはじゃな。確かリリーと言ったの？ 眠れんのか？」

師匠が言うとりリーはあわてて俺の影に隠れてしまった。師匠の

表情が曇る。

「……何か怖がらすことでもしたかのう？」

「ごめん……えっと……そっちは、ぼくのこと……怖くないの？
ぼく、竜人だよ……？」

師匠が首を振るとリリーは目を伏せてギュッと俺の服を掴んだ。

「ぼくは……人間と話すの……まだちょっと……」

「……む？」

「ぼくのお母さん……人間にひどいことされて、殺されたから……」

俺と師匠は顔を見合わせた。これは……重いな。リリーの頭にそつと手を置いた。

「俺は怖くないのか？」

「リュウトは……竜人だし……、契りも交わしたから。フィロお姉ちゃんは、獣人だし優しいし……。もこお姉ちゃんは……ちょっと怖いけどマキナちゃんと仲良かったから……。けど……」

リリーはチラリと師匠を見た。師匠はじっとリリーを見つめる。
リリーはその視線から逃げるようにまた俺の影に隠れた。

「ふむ……」

師匠はゆっくり立ち上がると、俺の影に隠れたリリーを追いかける。

るように回り込んだ。それに合わせてリリーも俺に隠れながら逃げていく。

「やれやれ……これでは鬼ごっこじゃな」

ため息一つ。――瞬間、師匠が消えた。

「は？」 「わきゃあ?！」

リアルに目にも止まらない速さで回り込んで、師匠はリリーに抱き付いていた。いや……本気出すなよ師匠……。リリー半分パニックになってるぞ？

「ええいこら！ 暴れるでない！」

師匠はぐいとリリーに顔を寄せる。その距離数cm、鼻先が触れ合う距離だ。

「あ……うあ……な、なに……？ ぼ、ぼく食べてもおいしく……」
「人と話す時は相手の目を見て、じゃろう？」

そう言うど師匠はリリーと視線を合わせた。――はは、そういや俺も初めて師匠と会った時これやられたな。

師匠はリリーとしばらくの間じっと見つめ合う。そしてふっと表情を和らげた。

「どうじゃ？ わしは怖いか？ おぬしにはわしがどう見える？」

「……………」

リリーはおそろおそろといった感じで師匠の顔に手を伸ばした。
リリーの手が師匠の柔らかいほっぺたに触れ、さらさらした髪に
指を通す。

「ぼくと同じ……、女の子……」

一瞬師匠は複雑な表情をしたがすぐに優しく笑いかける。

「そうじゃ。同じじゃよ。人間だの竜人だの知らんが、わしも神埼
もフィロも浅倉もおぬしと何も変わらん」

「……………けど」

「一を見て全を見たと思っては損をするぞ？ おぬしが見たような
人間が全てではない」

「……………」

リリーはまた視線をそらせてしまった。師匠は小さくため息をつ
くとニカッと笑う。

「よし！ 今日からわしがお前のお母さんになってやる」

「「――へ？」」

いやちよつと待て師匠？ なんでもそうなる？ リリーの方も目が
点になってる。というか“お母さん”ってついに諦めたか？

「おぬしの見たような悪い人間もたしかにおる。それを警戒するの

も悪いことではないじゃろう。……じゃがお前はまだ子供じゃ。子供の内から人を疑い、世界を疑わなければならんのは間違いない不幸じゃ。

じゃからわしがお前のお母さんになってやろう。わしが怖いものからお前を護ってやる」

「……あ……でも……ぼく……」

「それに、形はどうあれお前がわしらと来る以上、嫌でも人と関わらねばならん。……安心せい、それでもわしは人を見る目には自信がある。それに子供を幸せにしてやるのは大人の義務じゃ。遠慮するのは許さんぞ？」

俺は思わず苦笑してしまった。師匠はまったく……相変わらず直球だ。けど——たぶんそれが一番なんだろう。

「リ……リュウト……？」

不安そうなりリーの目。それに向かって俺は静かに頷いた。リリーはキョロキョロと視線をさ迷わせて、師匠の目を見る。

「じゃ……じゃあ……お願い……恋ちゃん……」

「呼び方が違う」

師匠はピシツと言うとリリーの額を小突いた。リリーは額を押さえながら少し頬を赤くする。

「あ……よろしく……お母さん……」

「……自分で言わせといてなんじゃが少々複雑な気分じゃのう」

師匠は照れくさそうに笑うと俺の方を見た。その顔が急に真剣な……元の世界で大切なことを言う時の顔になったから、思わず姿勢を正した。

「わしがこの子を護ると言ったのは、言ってしまったえばこの子の境遇への同情心と子供を護るという義務感からじゃ。じゃが言葉は曲げぬ。約束は決して違えぬと誓っていい」

師匠の目が鋭くなる。心を見透かされるような、そんな気分だ。

「お前の理由はなんじゃ？　なぜ浅倉を護る？　なぜ護りたいと願った？　そしてお前は何を誓う？　……早く思い出せよ……」

静かな、それでいてやけに耳に響く師匠の声。

「……でないと、お前はもう浅倉を護れんぞ」

——竜斗達がいる場所の数百m上空に、その少女は立っていた。

白い法衣に身を包んだ、長い金髪の少女。その髪からは尖った耳が飛び出している。

少女は指先を唇に当てると静かに呟いた。

「教皇様……。黒竜と蒼竜……。発見いたしました……。一緒に、人間の女二人に獣人の女が一人……。了解。準備を整えます……」

少女は一度、自分の遥か下にいる人影に視線を向けると白い翼を広げ、どこかへと飛んでいった。

十三日目

side 赤川 恋二

夜明け前の空に静かに輝く月に虫の鳴く音。それに水のせせらぎ……風情があるのう。これで水浴びでなく温泉であれば完璧なんじやがの。

カラン コロンと歩く度に下駄と川辺の石がぶつかり小気味いい音が鳴る。

夜の月もいいが、わしは夜明け前の少し朧気な月の方が好きじゃ。儂げな光、徐々に明るくなる空に朝の空気。夜には無いなんとも言えん雰囲気がある。

適当に川辺を歩き回る。目的は水浴びじゃ、昨日は神埼達が急になくなってしまい探し回ったせいでできなかったからのう。やはり汗をかいたままは気持ち悪いし、鼻が良いのが二人もおるから流石に気にする。

良さそうな場所で太刀を水に差して深さを確かめる。うむ、ここなら深さもちょうど良いし流れも緩やかじゃ。――さて……いやその前に……。

少し離れた場所に張られた、テントの方を確認する。うむ、ここなら神埼達からは見えんの。

…………なぜ“神埼達”なんじゃ？　なに神埼の名前を真っ先に上げとるのじゃわしは！？

……けっして神埼に見られたら恥ずかしいとかそういうことではない。絶対ない。断じてない。

ただ少し心臓がキュツとして顔が熱くなって嫌なだけじゃ。

……………本当に見えんな？

帯を解いた。シュルルと衣擦れの音がして、着物が足元に落ちる。着物にシワがでкинように慎重に畳んで川に入り、水に足を浸す。

冷たさが足から上がってくる。体がブルツと震えた。

一息つくと手拭いを水に浸してそれで体を拭く。

きめ細かい肌が水を弾く。この肌は我ながらなかなかのもんじゃないと思う。顔もなかなかじゃと思うし将来が楽しみじゃ。……あとは胸がもう少し有ればいいのじゃが。

両手で寄せてみる。……谷間もできん。手にあばら骨の感触が伝わってくる。

いやいや別にまだまだこれからじゃしの？　それに大きくならんでもそちらの方が着物には合うしの？　別に気にしな……………………はっ？！

自分の胸に手を当てたまましばし呆然としてしまった。違う！断じて違う！　これは……………

いや……、違わんの……。

ため息をついて水面に映る自分の顔を見つめた。凜とした、そし

て年相応のかわいらしさを併せ持った少女の顔。

そう、これが現実じゃ。自分をごまかすのはもう止めるとしよう。どのみちこんな体である以上いつかは嫌でも認めねばならん。

……わしの中身……心というべきか？　それがこの体に相応しいものになってきておる。つまり見た目通りの幼い少女のものへと変わっていつておる。

数日前から神埼と一緒に水浴びするのが途端に恥ずかしくなった。……きっかけもだいたいわかっておる。

あの日、水浴びしてた時に川辺で濡れた石で足を滑らせ、神埼に抱き止められた時じゃ。その……なんじゃ……抱き止められた時……その……“男の匂い”みたいなものを感じてしまつて……ここから急に神埼に肌をさらしていることが恥ずかしくなつて……。それに神埼に付いとる……アレを見るのが……その……うあゝっ！！

頭の中に浮かんだイメージをぶんぶん首を振つて振り払う。

……おまけに、最近はどうも浅倉やフィロ達が目の前で着替え始めても気にならなくなつてきおつた。……いやさすがに一緒に寝たり水浴びしたりは抵抗が有るがの。浅倉は妙にベタベタ触ってくるし。う。さらには座ると自然と女の子座りになるは浅倉に買わされた下着を着けるのも抵抗がなくなつてきたはでもう……。……。

わしはこのままこの世界で成長し、変わっていくのじゃろうか？　大きくなつて、恋愛をして、結婚し、子を産み、育て、死んでいくのじゃろうか……？

……ふふ、滑稽じゃな。前の体の時はもうこの世に怖れるものな

ど何も無いと思っておったのに、今は自分の小さな変化にさえこんなにも不安になっておる。

自嘲気味に笑い、空を見上げる。月はちょうど見頃じゃ。これを肴に酒でも呑めればのう。

――変わることは不安じゃが、不幸とは思わん。元々、あと何年生きられるかもわからなかった身じゃ。それがこうして若く、健康な体を得て新たな人生を歩める。形はどうあれこの事に関してだけはマキナに感謝しとるぐらいじゃ。何より……「師匠？」

「きゃっ?!」

いきなり後ろから神埼に声をかけられて思わず「きゃっ?!」などと悲鳴をあげてしまった。おまけに手は反射的に大切な部分を隠しておった。

……恥ずかしい。恥ずかしい、が。こやつにだけはそれを悟られたくない。無理に堂々と神埼と相対した。どんどん顔が熱くなるのを感じる。

「何じゃ？」

「ああ、もうすぐ朝食ができるんで呼びに来たんですけど……大丈夫っすか？ 顔、真っ赤ですよ？」

「な、なんでもない！」

神埼に背を向ける。……こやつは……よくも平然と……わしがこれだけ恥ずかしいのに……。まあ、こやつからすればわしの肌など

見ても何ともないんじやろうのう。胸も無いし……なんじやろうか？
なんかイライラしてきおった。

まったく、昔はもつと可愛げが有ったというのに、中学一年の頃に年齢を偽ってアルバイトを始めた頃から妙に落ち着きおって。

それでもその頃は『料理を巧くなっていつか姉に食べさせてやりたい』とアルバイト先の料理長の技術を見よう見まねで覚えようとするなどまだ可愛げが有った。

……まあ、それで一年経たずに料理長の技術を完璧に盗みきった上に独自の改良まで加えて料理長を泣かせるまでに至ったのはさすがにどうかと思うが。

高校に入ってから……まったく。女子にけっこうモテておったくせに興味も示さず。馬鹿みたいに一途で、馬鹿みたいに真剣で……そして強かった。

今は見る影も無いが、神埼ほど心が強く、揺るがん人間をわしは見ることがない。その強さの行く末を見たいと思った。この子が幸せを掴むのを見届けたいと願った。

あの頃は望んでもおそらくは叶わぬ願いじゃったが……ふふ、人生とは本当にわからんものじゃ。

見ると神埼は不審そうな顔をしておった。
まったく、腑抜けた顔をしておって。

川から上がり着物を手にとる。……せめて下着を着ける時ぐらい目をそらさんか……。太刀の鞘で神埼の頭を叩いた。

「つて?! 何するんすか?!」

「うるさい。でりかしーを持たんかでりかしーを。そんなことでは愛想を尽かされるぞ?」

「は、はあ?!!」

やれやれ、先は長そうじゃのう。

……願わくはその先に、この子の幸せが有ることを……。

十四日目（1）（前書き）

※注意

どうも筆が進まないので気分転換に少しはっちゃけて書きました。
かなりの乱文かと思いますが十四日目だけはちよつと遊ばせてもら
いますm（ m

ストーリーとの関連は薄いので別に飛ばしても大丈夫です。

十四日目(1)

『よーやく、召喚に成功したわ』

もくもくと煙が立ち込める。床に描いた複雑な紋様の魔法陣の真ん中に、私の目当ての物はあった。

つかれた。いくら私が神様だからって異世界のものを召喚するのって大変なんだよね。けどけどこれで……。

召喚した物を手に取って状態を確認する。なるほどね。使い込まれてるのが一目でわかるわ。とにかくこれで準備オッケーっと。

『さあ、狩りの時間よ!』

side マキナ(白)

『というわけでこんにちは〜!』

「ひああっ?!」

空間移動魔法で丸太の椅子に座っていたもこちゃんの背後にワー

プして、後ろから抱き付く。わゝ♪ もこちゃんの胸柔らかいゝ♪
やっぱりもこちゃんのが一番揉みやすいねゝ♪ フィロちゃんは
私の手にはちよつと大きすぎるしリツちゃんと恋ちゃんはぺったん
こだし。

「ちよつ?! マ、マキナ……やめて……。いや、あん……ん……」

『よいではないかよいではないかゝ♪』

せつかくだから手に催淫効果を付加つと。もこちゃんをよがらせ
ながら他の人の反応をチェックする。

とりあえずフィロちゃんが眠って頭からたき火に突っ込みそうだ
ったからたき火の火を消滅させといた。

私達マキナが出現したらNPCは寝ちゃうって設定が有るのよね、
めんどくさい。変えちゃだめかなゝ。けどリツちゃんの変える時
でもかなり文句言われたからなゝ。とりあえずフィロちゃん周りの
空間を現座標に固定つと、これで倒れないでしょ。

「また来たのか……」

「マキナちゃんいらっしやーい♪」

りゅう君は軽く呆れ気味に、リツちゃんは嬉しそうに私を見る。
確認しないで来ちゃったけどお昼ご飯の後にみんなで話し合ってる
所だったみたい。

とりあえずトイレ中とかじゃなくてよかったよかった。まあそれ
はそれで面白そうだけど。

「何しに来おった」

恋ちゃんだけは思いつきり警戒モードだ。

そういえば恋ちゃんとはあんまり話したことなかったか。最初の試練の時、黒マキナが“斬られた”って言ってたから避けてたからなく。

『ちょっと遊びに來ただけだよ。ほら、だから刀から手を離して。私はリツちゃんのお友達だよ？ 娘の友達にひどいことしないでよお母さ〜ん』

「おぬしがお母さんなどと呼ぶな！ なら……まず浅倉を離せ」

『……………あ』

もこちゃんのこと忘れてた。というか催淫効果の出力間違えた気がする。

「あ……………いあ……………ん……………んう……………は……………はあ……………もっと……………ん……………」

あちゃ〜、なんかすつかり出来上がってる。手を離すところんと潤んだ目で私を見てきた。

「なんで……………なんでやめちゃうのよお……………」

あ、やっぱり出力間違えてた。

「お願い……………お願いだから……………最後までしてえ……………」

あらら〜……………。んー。サイキクスつと。

「あ……………?」

もこちゃんの体を浮かべる。そして標的をりゅう君に向ける。

『もこちゃんをりゅう君の胸にシューッ!!』

「のわあっ?!」

超エキサイティング!! もこちゃんを受け止めたりゅう君は椅子から丸太の椅子から落ちた。

そしてちょうどりゅう君の体にもこちゃんが馬乗りになる体勢になった。うんまあ狙ってたけど。

「も、もこ姉?」

「りゅう君……お願い……りゅう君。りゅう君の○○○をあたしの○○○に○○○して……もう、我慢できないの……」 「ちょ?!」
待てもこ姉!」「だめ……! やめて!」

服を脱ごうとしたもこちゃんをりゅう君とリツちゃんが全力で止めにはいる。いや、カオスなことになってるね……。……もうそろそろかな?

「……………あれ? ……………きゃあああ?!」

もこちゃんが悲鳴を上げた。過守護に当てられて催淫効果が切れたみたい。うん、まあ狙ってたけど。

顔真っ赤で泣きそうになってるもこちゃん達を見ながらお茶を一杯。……あ、茶柱。

「こっんの!! マキナアアアア!!」

『はいはい。スキル“第四波動”発動っ』

もちゃんが飛ばしてきたファイアの熱エネルギーを吸収っ。
後でお茶を暖め直すのにでも使いましょ。

「あ……あんたはいったい何しに來たのよおおおっ！！　こんな……こんな……うわああああん！」

ありゃ、マジ泣きしちゃったよもちゃん。元の世界では押し入れ占領するレベルでエロゲ集めてたくせにこういうの苦手だね。ま、そんなことより……。

『まあまあもちゃん、そんなことよりいい物持って來たの。ほらほら』

「ぐすっ……そんなことよりって……」

言いかけてももちゃんの動きが止まった。目をぱちくりさせながら私の手にあるものを見ている。

「……PSP？　プレイ・ステーション・ポケット　しかもこの使い込み具合に改造のあと……それに何より後ろのブロンゾさんステッカー……これまさか……」

『そ、もちゃんのPSP。メモステもUMDも全部そのまま。んでさ、私とリッチャんでちよくちよくモンキー・ハンターMHやってるんだけど一緒にやらない？　クリアできないクエスト有って困ってるのよ。もちゃんこういうのうまそうだし』

「……これやっていいの？」

「もちもち。というか嫌って言ったらさっきの淫乱状態にして最初の奴隷砦からやり直しさせちゃうよ〜♪」

——？ あれ？ なんかもこちゃん震えてる？　というか泣いてる？　あれ？　そんな奴隷砦怖かつ「封印がとけられたーっ！！」

いきなりガバアツと号泣しながら万歳するもこちゃん。え？　ちよ？　なに？

「うふふふ……あっはははは！　ついに……ついにこの時が来たわ！」

だからなにこれ？！　もこちゃんこんなキャラだった？！　魔神でも乗り移ってるの？！　ま、まあいいや……。

『あ……う、うんそうね。それじゃリツちゃんのPSPも……はい。それじゃみんなでレッツゴー……』「あんたそこは“一狩り行こうぜ！”でしょうが！　わかってないわねー。やり直し！」

『ひ……一狩り行こうぜ……』

「声が小さい！」

『ひ、一狩り行こうぜ……！』

「まだまだあっ！　一狩り行こうぜっ！……！　はい……！」

『一狩り行こうぜっ！……！』

「よろしいー！ さくてひっさしぶりのモンハーン♪ 最初は最初
は……どんな装備で相手をミンチにしようかなー♪」

……やだ、なにこれ怖い……。

十四日目(2)

「あっはははは!!　さいっころ♪　ガンガンランサー♪　ヤリヤリ♪」

うわあ……うわあ……、私とリツちゃんが二人がかりで勝てなかったグランモス、フルボッコにしてるよ……。PSPを握りしめてテンションがひたすら上がりまくってるもこちゃん。……キャラ崩壊してるし。

「バックステッポオ!」

というかさつきからもこちゃん相手の攻撃すり抜けてるけどなんで?

——ああそっか、回避した瞬間0.1秒ぐらい無敵時間が発生するからそれで避けてるのか……。なにそれ怖い。まずもこちゃんってそんな反射神経なかったはずなのに。

「マキナ!　そっちヘイト溜まってる!　時計回りに回避して!」

『えっ?!　う、うん!?!』

いやちよつともこちゃんヘイトって?!　なんでそんなのわかんのか?!　え、えっと一応スキル“数値判定”発動。……本当だ、私の方がもこちゃんよりヘイトが3高い。こわっ。

「よし！ マキナ！ このあと威嚇に移るはずだから頭殴って！
それで気絶するから！」

——いやちょっ？！ なんかさりげなく未来予知してない？！
ってマジで威嚇しだした？！ しかも気絶した？！

「あとリリー！ こんがり肉のタイミングは音楽が鳴り終わってか
らうん、たん、たん、よ！」

「……………うん、たん、たん（上手に焼けましたー）」

もちゃんはすっごく楽しそうに指示を出しながらグランモスの
しっぽを斬り落とす。うっわ……………なんかもう相手が可哀想になっ
てきたよ…………。

「…………ねえマキナ？」

『な…………？』

二人でグランモスを突いたり殴ったり爆破したりしながら会話を
する。リツちゃんのPSPからはまた「上手に焼けました」という
声が聞こえた。

「これ、元々あたしのなんだしあたしが持っていていいよね？」

『だめ……。技術レベル違い過ぎる物は表に出しちゃうとまずいのよ
』

私がそう言うともちゃんの笑顔が固まった。それでもグランモ
スをボコる手を止めないのはさすがだと思う。

「どうして……なんで……なんであたしが持ってちゃいけないのよ！？ やっと……やっとまた会えたのに……！」

いやそんな生き別れの恋人に会ったような勢いで言われても……。

「お願い！ あたしはやっとまたこの子と会えたの！ もう離さない！ 離したくない！」

え〜？ なんかりゆう君と再会した時より熱入ってるよねこれ。しかも相変わらずの超回避連発してるし

そんなこと言ってもなく。仕方ない、もこちゃんにも納得できるやり方で黙らせよっと。

『じゃあ、私とゲーム対決しない？』

「……ゲーム対決？」

『そつ、このACで勝負しましょ。アナザー・コア私が勝ったらPSP没収。もこちゃんが勝ったら好きにしていよいよ』

ちょっと大人げないかな？ このゲームのジャンルはハイスピードメカアクション。簡単にまとめると人型起動兵器を操って、超音速での冗談みたいな速度で戦うゲームだ。

鬼みたいな操作難易度と複雑さ、奥深さで知られていて、思った通りに動かすのにすら何日もかかるっていうようなゲームだ。

もこちゃんがこのゲームやったこと無いならその時点で勝ち確定だし、私はもう250時間以上やってる熟練プレイヤー。おまけに自分の体にチートをかけて動体視力や反射神経を徹底的に強化して

る。負けるわけがない。

ま、他のマキナに怒られるのも面倒だし、もちちゃんには現実の厳しさというものを味わってもらいませう。

『どうする？ やる？』

「もちろん」

もちちゃんはにっこり笑う。

「で、レギュレーションはいくつ？ 戦闘のルールは？ なんならハンデ付けてもいいわよ？」

ふーん、経験者みたいね。でもそれなら潰しがいがあるわ。ただの人間が動体視力と反射神経を徹底的に強化した私に勝てるわけがないもん。マッハで蜂の巣にしてやんよ♪

『ハンデなんていらないよ。それじゃさっそく始めよっか、ステージは……水上ステージね』

「……ハンデはいらない……か。殉ずるがいいわ……己の答えに……」

——ん？

……まあいいや、そんじゃアイテム取り出す、プラズマテレビ二台にPSS、んでもってコンセントをこの間召喚したペカチュウ入りのボールに差して……戦闘開始っ。

ステージは水没した街。水面からビルの先っぽが顔を出したようなステージだ。私は愛機を水上でホバーさせながら各種武装を確認する。私の機体は高速起動型に組んで合って、チートをかけた動体視力も合わせてものすごい起動力を持っている。

さて、もこちゃんはどんな機体を使ってるのかな？

……ってなにあのもこちゃんの機体？

遠くに見えたのを見て、思わず吹き出してしまった。もこちゃんが使っているのは両手にパイルバンカーを装備した機体だった。

パイルバンカーってのは物凄く威力は高いんだけど射程が短すぎて対人戦ではほぼ使い物にならない所謂ロマン武器だ。まあお互い音速で飛び回りながら相手を殴るようなもんだからね。

しかも私の機体は超高速起動が自慢だし、まず敗けることは ガスッ！『YOU LOSE』ない。……え？

顔面にパイルバンカーで穴を空けられて、水の底に沈んでいく私の機体。え？

もこちゃんは目を細め、細く息を吐く。え？

「貴様には水底が似合いだ……」

『いやちよっ?! え? 今何が……い、今の無し! もう一回!』

もこちゃんはフツと口元を弛める。さ、再戦開始。

い、今のは油断したただけだもん! つ、次は……ってあれ?!

ちよ?! わ、私の機体の旋回速度がもこちゃんについていけない?! ああっ?! 画面から消え「あなた、いい的よ」ガスッ!『

YOU LOSE』

え……え……？ 今何が……まばたきした瞬間画面から消えて……も、もう一回！

——ちょ？！ なんか動き読まれ「挟らせてもらうでえ！」ガストッ！『YOU LOSE』

なんか私が移動しようとした瞬間、移動先に回り込まれてやられた。あ……あれ？ もこちゃんにニュータイプスキルなんて持たせてないはずなのに……。も、もう一回！

「そんなんじゃこの先生きのこれない」ガスッ！『YOU LOSE』

……ライフル乱射したのに全回避で正面突破された。

「死に腐れ」ガスッ！『YOU LOSE』

……ならこっちもパイルバンカーってやったら案の定瞬殺された……。

「あいむ あ しんかー♪ とぅーとぅーとぅーとぅー♪」ガストッ！『YOU LOSE』

……一回も画面に捉えられないまま負けた。

『YOU LOSE』

『YOU LOSE』

『YOU LOSE』

悔しい……。悔しい悔しい悔しい！　なんで……。どうして！　私は自分にチートまでかけて……。う……。ぐすっ……

「お、おいマキナ？　たかがゲームで泣くなよ……」

「うるさい！　泣いてない！」

心配そうにりゅう君が声をかけてきた。うっさい……。なんで人間なんかには神様の私が心配されんのよ……。ああもう腹立つ……。ぐすっ、ひっく……。

「まだまだ！　もう一回よ！」

「……ん？」

「何よ！？　文句有るならもこちゃんのPSPぶっ壊すわよ！？」
もこちゃんをあわててPSPを背中に隠した。

「い、いや、なんか声の雰囲気が変わったから……」

「訳わかんないこと言っていないで早くやるわよ！　絶対勝ってやるんだから！」

「まあいいけどさ。けど真剣に挑んでくる以上、敗けるつもりは無いわよ？　3382時間のプレイ時間にかけてね」

——どうしよう。勝てる気しなくなってきた……。

十五日目（1）――異変

side 浅倉 もこ

朝、テントの中で目を覚ます。

ザーザーと、かなりの勢いで雨がテントに当たる音が聞こえる。体を起こしてテントに雨粒が当たるのを見上げながら小さくため息をついた。

「はぁ……最悪」

元の世界ではそこまで気にしなかったけど、こっちの世界で旅する分には雨って最悪だ。

冷たいし、地面はぬかるむし、オオイグに乗ってる間なんかもろに雨が直撃するからスピード出せないし。

一応フィロちゃんとあたしで雨避けの魔法を使ってるけど、あたしは魔力あんまり無いからフィロちゃんに負担かけちゃうし。

もう一回ため息。フィロちゃんってすぐ無理しちゃうからあまり負担かけたくないんだ。

りゅう君の過守護って雨は防げるのかな？ 防げるなら雨避け魔法の範囲狭くできるから多少魔力の節約になると思うけど。

うんと体を伸ばす……いたた。

なんか体もだるい。筋肉痛みたいな感じ。さすがにそろそろ体力

付けないとまずいかしらねえ……。ふあ……。ねむ……。

大きくあくびをしてコキコキと首を鳴らす。……ん、とりあえず着替えよ。

「アイテム、取り出す」

——あれ？

着替えが出てこない。おかしいな？　いつもなら言い切るのと同じ時に出てくるのに。

「アイテム！　取り出す！」

もう一度やってみる。すると今度は普通に着替えの服が出てきた。……何なんだろう？

一応、他の物を取り出したりしまったりしてみた。……普通にできるわね。疲れてるからかしら？

ちょっと気にはなるけど……とりあえず着替えよう。——と、その時ひよいとテントの入り口からフィロちゃんが顔を覗かせた。

「あ、起きてましたかもこさん」

「うん、どしたの？」

「ああ、リリーちゃんが近くで雨宿りできそうな小屋がみつけたので、そちらに移動しようってことになりましたので。もこさんも準備が終わった雨避け魔法の方お願いしますね？」

「りょーかい」

小屋か。助かった、前回雨が降った時は一日中雨避け魔法張ってなきゃいけなかったから大変だったのよ。

途中でモンスターとの戦闘挟んだりしたせいで魔力切れて、結局ずぶ濡れになっちゃったし。

フィロちゃんが必要なことを伝えると戻っていった。あたしはささと着替えて脱いだ服をアイテムボックスにしま……………あれ？

脱いだ服がすぐに消えなかった。首を傾げていると数秒ほど間を置いて消える。…………あたし体調でも悪いのかしら？

「浅倉！ まだ着替え終わらんのか？」

外で恋ちゃんの声が聞こえた。とと、早く行った方がいいか。

一応、深呼吸したり体を動かしたりして変なところがないかを確認。大丈夫…………ね。荷物をまとめてテントから出た。

——テントを畳んで移動を始める。雨はさらに勢いをましてバケツをひっくり返したような雨…………たぶんゲリラ豪雨ってやつだ。遠くが霞んで見えなくなってる。

とりあえず少し歩いたところに有ったっていう小屋の方向へみんなで向かう。フィロちゃんがオオイグの手綱を引きながら雨避けの魔法を張って、あたしがさらにそこに雨避け魔法を重ねて補助をや

る。

雨はきれいにあたし達を避けるようにカーブして降り注ぐ。……
やっぱりフィロちゃんは凄いなあ。こんな大雨、あたしの雨避け魔法じゃ絶対防ぎきれないもん。

前はフィロちゃんはこれを戦闘込みで半日ぶっ通しでやってた。
あたしなんてこの範囲まで展開したら30分ぐらいが限界だ。

ちなみにりゅう君の方はどうやら過守護の力で雨も無効化できる
みたい。だから雨避け魔法の範囲から追い出した。魔力とスペース
がもったいない。

リリーの方は自分から雨の中に飛び出していった。なんかイメー
ジ崩れるレベルでご機嫌かつハイテンションで、雨の中くるくる回
りながら踊ってる。

元々水辺で暮らしてたらしい濡れるの好きなのかしら？

「みんなー！ 早くおいでよー！ 置いてっちゃうよー！？」

少し先を行くリリーが元気に手を振ってる。いやだからあんたそ
んなキャラだった？

「リリー、あんまり遠くに行くでないぞー！」

「はい」

そして恋ちゃんとの会話はまるで姉妹みたいだ。なんか和……あ
れ？

雨粒が頬に触れた。さらに続いてポツポツと雨粒が落ちてくる。
上を見上げるとフィロちゃんの雨避け魔法が雨を防ぎきれてないみ

たいで、いくらか雨粒が落ちてくる。と、見る間にその量は多くな
っていった。

「あ……あれ？ す、すみません！ 今張り直しますね」

フィロちゃんは慌てた様子でもう一度雨避けの魔法を唱える。：
けど雨粒の量は少しの間ましになっただけで、すぐにまた増えて
いく。

「フィロちゃん大丈夫？ 調子でも悪いの？」

「い、いえ。そんなこと……わきゃあ？！」

パチンと音を立てていきなりフィロちゃんの張っていた雨避け魔
法が解けた。もろに雨が降り注ぐ。

「ちょ？！ フィロちゃん？！」

「あ、あれ？ そんな……もう魔力が……ご、ごめんなさい！ 皆
さん走ってください！」

結局、あたしたちはずぶ濡れになりながら走るようになった。

+

——ひた、ひたと。雨煙の中、一つの人影が動く。

黒衣を纏ったその姿は闇そのものを纏ったようで、その姿は肩に背負った大鎌と合わせてさながら生者を狩るという死神のようだ。

「あーめ あーめ ふーれ ふーれ……なんだっけ？」

その雰囲気合わない明るい声で歌う。黒衣のフードから覗く顔は少年のものであった。金色の幼く、どこか危険な光を宿した瞳、その瞳は一つの小屋を映す。

ひた、ひた、とその小屋に近づく。少年はあごに手を当て、その小屋を見上げた。

「木造……植物だね。さして、どうなるかな？」

楽しそうに笑い、少年は小屋の壁に手を触れた。

十五日目（2）

「うああ……」

小屋の中に飛び込んだあたしはそんな声を漏らした。
体中びっしょびしょ……うああ、下着まで濡れちゃってるし……。

「ごめんなさい……」

しゅんとフィロちゃんがうなだれた。一緒にしっぽと耳も下を向く。

「あ、いいいいよ気にしないで。いつもいっぱい助けてもらってるんだし！」

「けど……」

伏せ目がちにフィロちゃんはあたしを見る。……ああもうやっぱかわいい！　こういう表情もなかなか……。ああ……、頭なでなでして慰めてあげたい……。

い、今ならいいよね？　変じゃないよね？　おそろおそろ手を伸ばす。けど間にりゅう君が入ってきた。

「体調でも崩してるんじゃないか？　あまり無理するなよ？」

りゅう君はフィロちゃんのおでこに手を当てる。フィロちゃんは

「ひゃっ?!」って悲鳴を上げた。しっぽが跳ね上がる。

「……熱は無いけど顔が赤いな。腹減ってないか? 栄養がないと体温も上がらないからな」

「あ! い、いえ! 大丈夫です! お、お気遣いありがとうございます!」

「そうか? けど辛くなったらすぐ言えよ? それに今回のことは気にするな。濡れたことには誰も怒ってないし、むしろお前がしょげてたらみんな心配するんだ。いいな?」

「は、はい!」

フィロちゃんの顔が一気に明るくなった。しっぽもパタパタ元気に揺れてる。……りゅう君ずるい……。涼しい顔してそんな台詞吐かないでよ……。あんたはエロゲの主人公かっての。

フィロちゃんもそういうこと言ってもらうのに弱そうだし……あなんかもうりゅう君を見上げる目が恋する乙女に……。くそう、一発ひっぱたいでやりたい……。

……あたしもうりゅう君のことは好きだ（もちろん幼なじみとして）。けどやっぱこうやってフィロちゃんと絡んでるのを見るとちよつとイライラしてくるわけで……。

「はいはい女の子勢は着替えるからあんたは外でリリーとでも遊んでなさい」

「と? なんだよもこ姉?」

「いいから出た出た」

しっしっしと追い払うようにりゅう君を追い出した。フィロちゃんは少し不満そうにあたしを見ている。だってさ、あいつ普通にフィロちゃんとフラグ乱立するんだもん。これ以上ほつといたらどうなるか。

「の、のう浅倉……」

——恋ちゃんがおずおずと声をかけてきた。ん？ 何かな？ 恋ちゃんがこんな風に話すのは珍しい。

「その……わしも濡れたから……その……この前買ってもらった……服とし、しし下着をじゃな……」

——ほほう？

これまで濡れようが汚れようがひたすらあたしが買ってきた洋服と下着を着るのは断固拒否してたのに。うふふふ、なんか最近どんどん女の子っぽくなってる。

その様子を見守るのが最近ちょっと楽しみなのよね。いつかフィロちゃんも巻き込んでいろんな服着せてみたい。

よしよし、どんな服がいいかな？ あまり派手なのは嫌がるだろうから地味めなので……。

「アイテム、取り出す」

……あれ？ また出ない。本当にどうしちゃったんだろあたし？

「アイテム取り出す。アイテム取り出す。アイテム取り出す。アイテム取り出す。っと、出た出たってあれ？」

出てきたのは目的のやつとまったく違う服……着物なんだけど裾が短くて袖なんかにフリルが付いた白い和 Gos だった。前の町でなぜか有った——というかたぶん白マキナの好みで作ったんだろうコスプレ専門店で買ったやつだ。いや、やたらめったら安かったのよ。

あくまでも安かったからいっぱい買ったわけで、別にフィロちゃん達にコスプレさせようとか考えてた訳じゃない。うん。まあ念のために二人の体に合わせたやつばっか買ったけど。

和 Gos の服を広げる。ベースは着物だけどふりふりの付いた長い袖に明るい花模様。至るところに当然のようにフリルが付いてる。そして一番ハールドル高いのは下半身の方だ。なんか……花が開くような形状のスカートでやっぱりフリル完備。しかもこの長さだと……ちよつと動いたら見えちゃいそうね。さすがにこれは酷いか。

「ごめんね？　なんか違うの出ちゃった。すぐに別のに……」 「……これでよい」

……え？

「……これで……よいと言っておる……」

恋ちゃんは軽く目を潤ませながら和 Gos を掴むんだ。ふるふると手が震えている。え？　いやマジで？　なんでいきなり？　なんかの罰ゲーム？

「ど、どうしたの恋ちゃん？ 普段ならこういう服絶対着ないのに」

「……練習……しようかと……」

「練習？」

「その……普通の女子はおなごこういう華やかな服が好きなんじゃろ？
じゃから……少しは慣れようかと……」

いやいや間違ってるわよその認識？！ いやそりゃ確かにかわいい
いとは思うけど少なくともこれを着る勇氣はあたしにはないよ？！
……恋ちゃんの和ゴス姿……。

「レンさん？ その認識はちよつと……」 「フィロちゃんストップ
！！」

フィロちゃんの口をふさいだ。だって見たい。是非とも見たい！
恋ちゃんの和ゴス姿！！ このチャンス逃したらたぶんもうチ
ヤンス無いもん！！

「うんうんやっぱり女の子はフリルとか付いたかわいい服が似合う
よね！ じゃあ恋ちゃんもさっそくやってみよう！ 頑張って！」

「う……うむ」

恋ちゃんは帯を緩めた。はだけた着物の間から覗く白い肌。なん
というか……女のあたしでもむしゃぶり付きたくなるような滑らか
な肌……あ？！ いや？！ 別にあたしはそこまで変態な訳じゃな
いよ？！ ただ……恋ちゃんにはなんか思わずそんなことを思わせ
る色気があるんだ。

もちろんまだ子供だから、前の町ではさすがに言い寄られたりはしなかったけど、ロリコンの氣が有る人や同年代の子なら問答無用で一目惚れさせそうなぐらいの魅力が有る。大きくなったら魔性の女とかになるかも……。

「の、もう浅倉……そ、そんなに見んでもらえんか？ 着替えずらい……」

「あ。ごめんね？ じゃあ向こう向いてるから」

恋ちゃんに背中を向ける。……ん？ 振り向いた瞬間、視界の端に人影が映った氣がした……けど氣のせいかな。

後ろでは恋ちゃんが着替える衣擦れの音が聞こえる。着物が床に落ちる音、下着を下ろして……や、ヤバイ、なんかドキドキする……。

ちょっと時間が経って着替え終わったらしい。衣擦れの音が止んだ。恋ちゃんが深呼吸する音が聞こえた。

「……よいぞ」

言われて振り返って……言葉を失った。白い和ゴスの衣装に身を包んだ恋ちゃん。顔を真っ赤にして、短いスカートを恥ずかしそうに抑えながら、子犬みたいな潤んだ目であたしを見上げてくる。

なんだろう……その……何て言うか、初めて“萌え”っていうのを知った時の気持ちを思い出したというか……。えっと……うん。

「ま、股下がすーすーするのう……。ど、どこか……変かの……？」

不安そうにあたしを見上げてくる恋ちゃん。ヤバい、萌え死ぬ。とにかく写メを一枚。――カシヤツ。画像を保護フォルダへ保存。あ、念のためSDカードにもコピーしとこ。よしもう一枚。

「な?! ころ?! 写真撮るでない?!」

「やだ! これで撮るななんて生殺しだよ?! フィロちゃん! 恋ちゃん押さえてて!」

「え、ええ?!」

「――っ?! ちょ、ちょっと待て! 今外で何か物音が……!」

「そんなこと言ってごまかそうとしてもむ……あれ?」

がくん、と。急に重力が強くなった気がした。

……なんか昇りのエレベーターに乗ってる時みたいな感じ。いつたいなに……「やっと終わり? よかった、さっきはいきなり着替え始めたから出ていくタイミングに困ってたんだ」

天井から明るい、男の子の声が降ってきた。何が起きたか確認する間もなく、ふわりとあたし達の前に真っ黒な服を着た男の子が上から降ってきた。その手に握られてたのは……真っ黒な大鎌。

「お姉ちゃん達は竜人じゃないけど……ま、いいか」

にっこりと晴れやかに笑い、踊るように大鎌が薙ぎ払われた。

十五日目(3)

side 神埼 竜斗

「リュウトー！　いくよー！」

大雨の中、雨の音に負けないように大きな声でリリーは叫ぶと、俺に向けて水の球を投げた。受け止めるとグニョンとしたゼラチンみたいな感触。手の上でプルプル震えている。

これはリリーが遊びのために水を魔法で固めたやつだ。

——リリーは元気に両手を振っている。今まではおとなしいやつだと思ってたけど、こういう面も合ってたんだな。……いや、母親が死んだってのが有ったからな……。

これだけ元気になったことのきっかけは師匠の「母親になってやる」発言からだろう。

あのあと師匠とリリーでしばらく話してたんだが、師匠は本当に子供ができたみたいだなんて何だかんだで喜んでたし、リリーの方もそうやって“子供”として扱ってもらえることが嬉しかったらしくすんなり仲良くなれた。

それに加えてこの雨だ。元々水辺で暮らしていたリリーにとって、肌が乾燥するっていうのはかなりのストレスらしい。だからこうやって雨に濡れるっていうのはリリーにとってとても気持ちのいいことだそう。それでこんなにテンションが上がっているんだろう。

水の球を投げる。リリーはそれを取って投げ返す。っと、こいつ意外に肩いいな。キャッチもうまいしもう少し強めにいくか。水の球を握り直してさっきより強めに投げた。

「わっ……！　じゃあ、ぼくもいくよ！」

さらに強い球が返ってきた。

意外にやるなこいつ……こっちもさらに強く投げる。けどリリーは片手であっさりそれを取った。そして返ってきた球はさっきよりさらに強い球だった。

これは……男として引けない。さらに強くぶん投げる。

竜人になって腕力上がったのもあって、たぶん150kmぐらいは出てると思う。

けどリリーはそれをすんなり受け止めた。なんか……軽く悔しい。

「ところで、リュウト？　ちょっと、気になったんだけど……」

「どうした？」

俺のと同じぐらいの勢いの球が返ってくる。受け止めた手がじんじんする。

「リュウト、過守護っていう能力で雨を防いでるんだよね？」

「ん？　ああ、そうみたいだな」

大きく振りかぶって全力投球。水の球が降り注ぐ雨粒を吹っ飛ばしてリリーに向けて飛んでいく。けどリリーはやはりあっさりとそ

れを受け止めた。

「じゃあ、なんでこの水の球は防がないの？」

豪速球が返ってくる。ヤバい。マジで痛い。グローブが欲しい。

「そりゃあ危険じゃないからだろ」

ちよつと微妙な気もするがたぶんそうだ。過守護の効果は自分やもこ姉にとっての脅威を無効化する能力。ただ、何でもかんでも防ぐって訳でもなくて、師匠のツツコミとかは普通に通る。どうやら過守護の脅威って言うのは体に何らかの悪影響が出るレベルかららしい。

ただし相手に敵意とか害意が有った場合は別みたくて、旅の間に
出たむちゃくちゃ弱っちいモンスターの攻撃なんかはちゃんと防い
でた。

球を投げ返す。まあ今考えたのはだいたいもこ姉が分析したこと
 なんだけどな。もこ姉は本当にこういうの得意だ。

「じゃあ、なんで雨は防いじゃうの？　こんなに気持ちいいのに」

「そりゃあ、雨なんて浴びてたら風邪とか引くからだろ」

「竜人、風邪なんて引かないよ？」

リリーは首を傾げながら球を返してくる。

……　　「そういや水浴びする時とか、師匠はかなり寒そうにしてたけど俺は特に何も感じなかったな。いやけどあれは自分からやってるから……」

「ん？　あれ？　なんか引く掛かるな。」

球を投げ返す。

ああくそ、もこ姉ならもつとすんなり考えられるんだろうに……
あゝ、水浴びの水は防がないのに雨は防いで別に体に影響は無く
……うぶっ?!

リリーが投げた水の球が顔面に直撃した。いってえ……。

「リュ、リュウト……だ、大丈夫……!？」

「お……おう……」

リリーが心配そうに駆け寄って来る。これは……かなり恥ずかしい……。

——けど、過守護で今のを防げなかった? まあ確かに痛かったけど、脅威かって言われると微妙だしリリーにも悪意は無い。……
となると、ただ雨に濡れるのが脅威ってのは無理があるか?

そうになると……誰かが俺に害意を持って雨を降らしたとか……この雨自体がなんかヤバいとかか? ……そういやフィロもなんか様子が変わったような……。

一応後でもこ姉に相談してみるか。

そう思ってもこ姉達のいる小屋の方を見た瞬間、地面が軋むような音が響いた。なんだ? ……なんか下から……っとうお?!

いきなり地面が何かに押し上げられた。とっさに飛び下がって距離を取って……なんだよこれ?!

「き……木い?!」

小屋の下から大木がものすごい勢いで生えてきている。それは小屋を巻き込んでるか上空に押し上げてしまった。いや?! 訳わかんねえぞ?! 木とは言ってもちよっとしたビル並の太さと高さ

があつて……こ、この世界ってこんなあつという間に育つ木があるのか……？

「リュウト……」

リリーが俺の腕を掴んだ。なんか……怯えてる？ さっきまでの元気の良さが無くなっている。

「気を、つけて……なにか、来る」

「来る？」

——ふわりと羽根が落ちてきた。真っ白な、綺麗な羽根。見上げるとそこにそいつはいた。

「天……使……？」

雨の中、そいつは宙に立っていた。よく本で見る白い天使の翼。風もないのに法衣と長い金髪がはためいている。

「教皇様の名の元に、貴殿方に裁きを下しに参りました」

抑揚の無い声でそいつは言った。氷みtainな白銀の瞳が俺達を捉えた。——ヤバイ。目が合った瞬間、それだけで背筋が寒くなった。なんかわかんないがこいつは……絶対ヤバイ！！

天使は何も無い空間から弓と矢を取り出すと、それを俺達に向けた。

「我は“光の教団” No. 4 メリウス。悪しき存在よ、死を享受

しなさい。そして悔い改めなさい」

「確かに死にたくなるぐらいヤバいことはしたけど本当に死ぬつもりはねえぞ！」

メリウスと名乗った天使の射った矢を拳で弾く。俺の拳に触れる直前に矢は勢いを失って簡単に弾くことができた。

——これが過守護の効果か……これなら！

「リリー！ 俺の後ろからあいつを狙え！ 矢は俺が弾く！」

「う、うん……」

リリーを後ろに回し飛んでくる矢を弾き飛ばす。メリウスは少し不満そうな表情で矢を連射し続ける。けどこの程度なら楽勝だ。師匠との修行と比べれば問題ない。

——最初に感じた嫌な感じは気のせいだったか？

「リリー！」

「うん……！ いくよ……！」

リリーが聞きなれない言語で何かを叫ぶと周りの雨が集まり、四頭の水の竜へ変わった。

それが一斉にメリウスに向かい、一気に炸裂した。空気が震える程の衝撃。辺りを水煙が包んだ。

「やったか！？」

「……だめ」

突風が吹いた。それが一気に水煙を晴らし、メリウスが姿を現す。
……無傷の姿で。

「……この雨……なるほど、道理で矢に魔力が込められなかったわけです」

メリウスは雨に手をかざし、ため息をついた。

「致し方ありません。帰りの魔力を残しておきたかったのですが、早めに終わらせましょう」

メリウスは空に手をかざした。その手の先にはギラギラとした光が集まっていく。ゾクリと鳥肌が立った。

まずい……！

これだ……俺が最初に感じた感覚は……！

「禁忌【極光の鎚】」

メリウスがそう呟いた瞬間、辺りが光に包まれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2195u/>

神さまとゲーム脳と過守護な殺戮竜の物語

2011年10月9日16時58分発行